名古屋大学高等教育研究センター
質保証を担う中核教職員能力開発拠点 II

2024 年度
総合報告書

名古屋大学高等教育研究センター
質保証を担う中核教職員能力開発拠点 II

2024 年度 総合報告書

2025 年 3 月

はじめに

名古屋大学高等教育研究センター（以下、本センターと略す）は、名古屋大学の学内共同教育研究施設として平成 10（1998）年 4 月に創設されました。設立当初より、高等教育機関の質の向上に取り組み、高等教育研究の一大拠点となることを目標に掲げ、多様な教育改善・教育支援のニーズに応えるべく、学内外の教職員との協働による種々の研究会、実践的な教材や教育プログラムの開発、FD・SD に関連するセミナー・ワークショップなど、着実にその活動を発展させてきました。

平成 22（2010）年には、文部科学省より教育関係共同利用拠点「FD・SD 教育改善支援拠点」の認定を受け、平成 26（2014）年度まで同拠点としての活動を行いました。特に「FD・SD コンソーシアム名古屋」を中心的に牽引し、中部地域を中心として広く大学の教育・学生支援、教職員の自発的な教育改善への貢献に取り組んできました。その間に築いてきたフォーラム開催などの活動は、この地域の複数の大学で組織した新たな枠組みの中で継続されています。

平成 28（2016）年 4 月には本学に教育基盤連携本部が組織されました。国際的にも様々な分野においてリーダーシップを発揮できる「勇気ある知識人」を育成するため、入学前から卒業・修了に至るまで一貫した教育改革を総合的に実施することを目的としています。同本部にはアドミッション部門と高等教育システム開発部門の 2 つの部門が設けられています。本センターの専任教員は高等教育システム開発部門に移動し、センターを兼務して活動しています。高等教育システム開発部門では入学から卒業・修了までの学生データを総合的に分析検証する教学 IR システムの構築、国内外の優れた質保証実践に関する調査分析、そして、国際的なベンチマーキングを視野に入れた学生調査の開発実施を行っています。

平成 29（2017）年 8 月、本センターは文部科学省より教育関係共同利用拠点の認定を受け、「質保証を担う中核的教職員能力開発拠点」として再び拠点としての活動を行いました。本事業は、地域および全国各地の高等教育機関と連携し、内部質保証システムを担う教職員の能力向上を支援するための研修や教材を提供することを目指すものです。特に、質保証分野において体系的な能力開発プログラムを提供し、地域の教職員が連携体制を構築するための拠点として活動を行っています。高等教育システム開発部門としての取り組みを通して得られた成果なども反映しながら本拠点としての活動を続けています。

令和 2（2020）年 4 月 1 日に国立大学法人東海国立大学機構が設立され、名古屋大学と岐阜大学は共通の 1 法人傘下の大学として運営されています。この機構は日本初の大学運営方式として全国的にも注目を集め、本学の歴史上重要なターニングポイントとなりまし

た。本センターの教員は、東海国立大学機構に機構直轄事業として設置された、教育基盤統括本部（アカデミック・セントラル）の主要メンバーとして重要な役割を担っています。

令和 2（2020）年度には新型コロナウイルスが世界的に感染拡大し、大きな被害を与えるとともに、様々な活動が大きな制約を受けました。その影響は、令和 4（2022）年度まで続き、講演会をオンラインで開催するなど、センターの活動も大きな影響を受けました。令和 5（2023）年度には、社会生活が本格的にウィズコロナに移行したことから、対面での活動を活発化させました。一方で、コロナ感染拡大期間にオンライン講習会の利点も明らかとなったことから、対面とオンラインのハイブリッドでの活動も増やしました。その様な中、令和 5（2023）年度には、センターは創設 25 周年を迎え、令和 5 年 9 月 1 日に名古屋大学野依記念学術交流館において 25 周年記念国際シンポジウムを開催しました。内外からの 4 件の招待講演、パネルディスカッションを開催しました。

令和 6（2024）年度 7 月に、本センターは文部科学省より「質保証を担う中核教職員能力開発拠点」として教育関係共同利用拠点に再度認定を受けました。再認定期間は 2025 年 4 月 1 日から 2030 年 3 月 31 日までの 5 年間です。これまでの拠点活動で培ってきた経験と知識の上に、1 法人 2 大学制度をとる国立大学法人東海国立大学機構の経験を生かし、国際化や少子高齢化が進む大学環境において求められる教職員の能力向上を支援するための研修や教材を提供することを目指して今後も活動していきます。

本報告は、令和 6（2024）年度における高等教育研究センターの活動の全体像として、拠点が同年度に取り組んできた活動をまとめたものです。本センターならびに拠点の活動をご理解いただき、今後の取り組みについてご指導、ご支援を賜りましたら幸いに存じます。

令和 7（2025）年 3 月

名古屋大学高等教育研究センター長　　北　栄輔

※本報告書においては、敬称を略して表記している箇所があります。

目次

はじめに 1

目次 3

第 I 部　組織概要 6

1.　高等教育研究センターについて 6
1.1　沿革 6
1.2　高等教育研究センター規程 7
1.3　高等教育研究センター運営委員会規程 9
1.4　人員体制 12
2.　拠点事業について 14
2.1　拠点の概要 14
2.2　拠点における取り組み 15
2.2.1　取り組みの背景と目的 15
2.2.2　重点的に取り組む課題 15
2.2.3　分野別の取り組み計画 15
2.2.4　拠点体制図 17
2.3　拠点運営委員会 18
2.3.1　規程 18
2.3.2　委員名簿 21
2.3.3　委員会開催状況 21
2.4　拠点専門委員会 22
2.4.1　委員名簿 22
2.4.2　開催状況 22
2.4.3　その他 22

第 II 部　令和 6 年度の拠点活動実績 23

1.　組織的研修の開催 23

1.1　招聘セミナー・客員教授セミナー　23
1.2　大学教育改革フォーラム in 東海 2025　37
1.3　その他の主催・共催セミナー　44
2.　講師派遣　77
2.1　学外講師派遣　77
2.2　学内講師派遣　80
3.　情報提供　83
3.1　情報配信サービス　83
3.2　定期刊行物　84
3.3　オンラインサービス　86
4.　研究会運営　90
4.1　アカデミックスキルズ教育研究会　90
4.2　学生アシスタント養成研究会　92
4.3　教務系 SD 研究会　94
4.4　名古屋経済学教育研究会　98
4.5　高大社接続研究会　100
4.6　大学 IR×DX 研究会　102
4.7　名古屋哲学教育研究会　104
4.8　物理学講義実験研究会　106
4.9　マネジメント人材育成研究会　108
5.　研究開発　110
5.1　学術論文　110
5.2　その他執筆　112
5.3　講演発表　113
5.4　国際交流　115
6.　研究プロジェクト　116

APPENDIX　拠点外令和 6 年度活動実績　118

A.1　教育　118
A.1.1　正課　118
A.1.2　名古屋大学学生論文コンテストの企画運営　120
A.2　学内研修の企画運営　123

A.2.1　東海国立大学機構新任教員研修プログラム　123
A.2.2　大学教員準備講座　125
A.2.3　名古屋大学教員のためのメンタリングプログラム　128
A.2.4　名古屋大学教員のための教育研修プログラム　129
A.2.5　個別の授業改善支援（名古屋大学教職員対象）　130
A.3　学内貢献　132
A.3.1　学内委員・室員等の委嘱　132
A.3.2　学内活動への協力　133
A.4　社会貢献　134
A.4.1　学会等における活動　134
A.4.2　社会における活動　134
A.5　組織運営　135
A.5.1　高等教育研究センター運営委員会委員名簿　135
A.5.2　高等教育研究センター運営委員会開催状況　135
A.5.3　高等教育研究センター会議開催状況　135
A.6　令和 6 年度基盤的経費　137

第 I 部 組織概要

1. 高等教育研究センターについて

1.1 沿革

名古屋大学高等教育研究センターは、平成 10（1998）年 4 月 9 日に学内共同教育研究施設として設置されました。「国際的な視野のもとに高等教育の発展に戦略的に貢献すること」をミッションとして掲げ、研究開発の成果をふまえた知見の提供や問題解決への参画を行ってきています。

平成 22（2010）年には、文部科学省より教育関係共同利用拠点「FD・SD 教育改善支援拠点」の認定を受け、平成 26（2014）年度まで同拠点としての活動を開始しました。特に「FD・SD コンソーシアム名古屋」を中心的に牽引し、中部地域を中心とした大学の教育・学生支援、教職員の自発的な教育改善への貢献に取り組んできました。その間に築いてきたフォーラム開催などの活動は、この地域の複数の大学で組織した新たな枠組みの中で継続されています。

平成 28（2016）年 4 月には本学に教育基盤連携本部が組織されました。国際的にも様々な分野においてリーダーシップを発揮できる「勇気ある知識人」を育成するため、入学前から卒業・修了に至るまで一貫した教育改革を総合的に実施する部局です。同本部にはアドミッション部門と高等教育システム開発部門の 2 つの部門が設けられており、本センターの教員 4 名は高等教育システム開発部門の教員としても活動しています。高等教育システム開発部門では教育の内部質保証システムの構築が一つの大きな柱となっており、本センターの高等教育システムの開発・改善の活動とシナジー効果を生み出せるよう、鋭意取り組んでいるところです。

平成 29（2017）年 8 月、本センターは文部科学省より教育関係共同利用拠点の認定を受け、「質保証を担う中核教職員能力開発拠点」として再び拠点としての活動を行うこととなりました。本事業は、地域および全国各地の高等教育機関と連携し、内部質保証システムを担う教職員の能力向上を支援するための研修や教材を提供することを目指すものです。特に、質保証分野において体系的な能力開発プログラムを提供し、地域の教職員が連携体制を構築するための拠点として活動を行う予定です。高等教育システム開発部門としての取り組みを通して得られた成果なども反映しながら、本拠点としての活動を行っています。

1.2 高等教育研究センター規程

◎名古屋大学高等教育研究センター規程

（平成 16 年 4 月 1 日規程第 195 号）

改正　平成 18 年 2 月 27 日規程 第 69 号
平成 22 年 7 月 20 日規程 第 13 号
平成 27 年 5 月 7 日規程 第 6 号
平成 29 年 9 月 12 日規程 第 54 号
平成 31 年 3 月 29 日規程 第143号

（目的）

第 1 条　名古屋大学高等教育研究センター（以下「センター」という。）は，国内外の研究者の協力を得て，学部及び大学院における教育・研究活動との連携の下に，高度教育に関する研究・調査を行い，高等教育の質的向上に資することを目的とする。

2　センターは，教育関係共同利用拠点として，センターにおける教育・研究上支障のない場合に，他の大学の利用に供することができる。

（職員）

第 2 条　センターに，センター長その他必要な職員を置く。

（運営委員会）

第 3 条　センターに，センターの運営に関する事項を審議するため，運営委員会を置く。

2　運営委員会の組織及び運営に関し必要な事項は，別に定める。

（評価委員会）

第 4 条　センターに，センターの研究活動及び運営全般に関して学外者の立場から助言及び評価を得るため，評価委員会を置くことができる。

2　評価委員会の組織及び運営に関し必要な事項は，別に定める。

（質保証を担う中核教職員能力開発拠点運営委員会）

第 5 条　センターに，教育関係共同利用拠点としての利用及び運営に関する重要事項について審議するため，質保証を担う中核教職員能力開発拠点運営委員会（以下「拠点運営委員会」という。）を置く。

2　拠点運営委員会の組織及び運営に関し必要な事項は，別に定める。

（雑則）

第６条　この規程の定めるもののほか，センターに関し必要な事項は，運営委員会の議を経て，総長が定める。

附則

この規程は，平成 16 年 4 月 1 日から施行する。

附則（平成 18 年 2 月 27 日規程第 69 号）

この規程は，平成 18 年 4 月 1 日から施行する。

附則（平成 22 年 7 月 20 日規程第 13 号）

この規程は，平成 22 年 7 月 20 日から施行し，平成 22 年 6 月 10 日から適用する。

附則（平成 27 年 5 月 7 日規程第 6 号）

この規程は，平成 27 年 5 月 7 日から施行し，平成 27 年 4 月 1 日から適用する。

附則（平成 29 年 9 月 12 日規程第 54 号）

この規程は，平成 29 年 9 月 12 日から施行し，平成 29 年 8 月 16 日から適用する。

附則（平成 31 年 3 月 29 日規程第 143 号）

この規程は，平成 31 年 4 月 1 日から施行する。

1.3 高等教育研究センター運営委員会規程

◎名古屋大学高等教育研究センター運営委員会規程

（平成 16 年 4 月 1 日規程第 197 号）

改正　平成 18 年 2 月 27 日規程　第 69 号
平成 19 年 3 月 28 日規程　第 106 号
平成 24 年 3 月 29 日規程　第 105 号
平成 29 年 3 月 30 日規程　第 136 号
平成 31 年 3 月 29 日規程　第 143 号

（趣旨）

第 1 条　名古屋大学高等教育研究センター規程（平成 16 年度規程第 195 号）第 3 条第 2 項の規定に基づく名古屋大学高等教育研究センター（以下「センター」という。）の運営委員会に関する事項は，この規程の定めるところによる。

（審議事項等）

第 2 条　運営委員会は，次に掲げる事項について審議する。

一　センターの将来計画及びその評価に関する事項

二　センターの管理運営の基本方針に関する事項

三　センターの教員人事に関する事項

四　センターの予算及び施設等に関する事項

五　その他センターの運営に関する事項

（組織）

第 3 条　運営委員会は，次に掲げる運営委員をもって組織する。

一　センター長

二　大学院人文学研究科，大学院教育発達科学研究科，大学院法学研究科及び大学院経済学研究科の教授，准教授又は講師のうちから 2 名

三　大学院情報学研究科，大学院理学研究科，大学院医学系研究科，大学院工学研究科及び大学院生命農学研究科の教授，准教授又は講師のうちから 2 名

四　大学院国際開発研究科，大学院多元数理科学研究科，大学院環境学研究科及び大学院創薬科学研究科の教授，准教授又は講師のうちから 1 名

五　教養教育院長

六　センターの教授及び准教授

七　その他本学の大学教員で運営委委員会が適当と認めた者

2　前項第 2 号から第 4 号まで及び第 7 号の運営委員は，総長が任命する。

（任期）

第 4 条　前条第 2 項の運営委員の任期は，2 年とする。ただし，再任を妨げない。

2　前項の運営委員に欠員が生じたときは，その都度補充する。この場合における運営委員の任期は，前任者の残任期間とする。

（委員長）

第 5 条　運営委員会に，委員長を置き，センター長をもって充てる。

2　委員長は，運営委員会を招集し，その議長となる。ただし，委員長に事故がある場合は，あらかじめ委員長が指名した運営委員が議長となる。

（定足数）

第 6 条　運営委員会は，運営委員の過半数の出席により成立し，議事は，出席者の過半数によって決する。

2　前項の規定にかかわらず，センター長候補者の選考及び教員人事に関する議事を審議する運営委員会は，運営委員の 3 分の 2 以上の出席により成立し，当該議事は，出席者の 3 分の 2 以上をもって決する。ただし，客員教授及び客員准教授に係る教員人事を審議する場合は，過半数の出席により成立するものとする。

（雑則）

第 7 条　この規程に定めるもののほか，運営委員会に関し必要な事項は，運営委員会の議を経て，センター長が定める。

附則

この規程は，平成 16 年 4 月 1 日から施行する。

附則（平成 18 年 2 月 27 日規程第 69 号）

この規程は，平成 18 年 4 月 1 日から施行する。

附則（平成 19 年 3 月 28 日規程第 106 号）
この規程は，平成 19 年 4 月 1 日から施行する。

附則（平成 24 年 3 月 29 日規程第 105 号）
この規程は，平成 24 年 4 月 1 日から施行する。

附則（平成 29 年 3 月 30 日規程第 136 号）
この規程は，平成 29 年 4 月 1 日から施行する。

附則（平成 31 年 3 月 29 日規程第 143 号）
この規程は，平成 31 年 4 月 1 日から施行する。

1.4 人員体制

◎センター長（兼任）

教　授　　北 栄輔　　情報学、機械工学、計算科学
（大学院情報学研究科）

◎専任教員

教　授	加藤 真紀	高等教育学、国際人口移動、知識創造
准教授	安部 有紀子	高等教育マネジメント、学生支援
准教授	安田 淳一郎	高等教育学、学習評価、物理教育研究
助　教	齋藤 芳子	科学技術社会論、科学技術政策

◎特任教員等

特任准教授	松本 みゆき	産業・組織心理学、キャリア発達論
特任准教授	和嶋 雄一郎	IR、知識工学、認知科学
特 任 助 教	竹永 啓悟	高等教育論
拠点研究員	東岡 達也	高等教育論

◎客員教員

・海外客員教員

2024. 5 ～ 2024. 7　　Kinjal Vijay Ahir（インド サルダール・パテル大学）

・国内客員教員

2024. 6～2024. 7　　伏木田 稚子（東京都立大学）
2024. 8～2024.11　　戸村 理（東北大学）
2024.12～2025. 3　　梅崎 修（法政大学）

◎アシスタント

岡田 久樹子	事務員
谷口 千佳	事務員
飯田 洋子	拠点事務補佐員
森 和大	事務補佐員
林 昌幸	事務補佐員
高井 収	事務補佐員（2025 年 3 月より）

2. 拠点事業について

2.1 拠点の概要

高等教育研究センターではこれまで、名古屋大学内のみならず全国の大学の教育の質向上を支援するため、情報収集、ツール開発、セミナー・教材の提供、相談業務などを行ってきました。

こうした実績が評価され、高等教育研究センターは平成 29（2017）年 8 月に文部科学大臣から教育関係共同利用拠点として令和 3（2021）年度まで 5 年間の認定を受けることとなりました。平成 22～26（2010～2014）年度の認定に続き、2 度目の認定となります。

今日の状況に鑑み、本拠点では、内部質保証システムの強化と高等教育の現代的課題に関する体系的な能力開発プログラムの提供を行うこととしています。そのため、「キャリア段階別」「専門的職員の分野別に関する内容」の SD および「基礎的・共通的」FD を中心に、全国調査でも課題となっている、IR に基づく教学マネジメントに関する SD、および、マネジメント能力向上 SD に重点をおいた研修を提供しています。また、全国の大学で重点課題となっている、アクティブラーニングを推進する FD ワークショップにも取り組んでいます。これまでに蓄積した知見と、本事業の中で得られた成果を、全国の高等教育機関に利用しやすいように提供することを心がけています。

令和 3（2021）年 7 月には文部科学省より教育関係共同利用拠点の再認定を受け、令和 7（2025）年 3 月 31 日まで拠点の活動を継続することになりました。

2.2 拠点における取り組み

2.2.1　取り組みの背景と目的

今日の質保証においては、内部質保証システムの構築がその中心的取り組みであり、教育プログラムの一貫性とエビデンスベースの評価、IR 機能等の検証システムの構築がとりわけ重要です。特に、これらの推進を担う教職員は、内部質保証システムにおいて重要な役割を果たすことが期待されています。

各大学で内部質保証システムの機能を果たす部門の設置などが進む一方、そうした教職員に対するその能力開発の機会や教職員同士の連携体制の構築は、十分とはいえません。大学教職員のキャリアが多様化する中、質保証の中核を担う教職員の多様な研修ニーズに応える教材と研修機会の提供は喫緊の課題であり、本拠点はこの課題解決に資することを目指します。

2.2.2　重点的に取り組む課題

SD に関しては、職員としての基礎的・共通的な SD、キャリア段階別の SD、専門的職員の分野別 SD のいずれにおいても、十分に提供されていないことが、文部科学省の調査でも指摘されています。これをふまえて、IR に基づく教学マネジメントに関する SD やマネジメント能力向上 SD に重点をおいた研修の開発と提供を進めます。

また、同調査ではアクティブラーニングを推進する FD ワークショップも不十分であると指摘されています。アクティブラーニングを単に活動型の授業とはとらえず、問いのつくり方、授業における発問活用、試験や課題における良問の作成などに重点をおいた研修の開発と提供を進めます。

2.2.3　分野別の取り組み計画

本拠点では、プログラム開発研究会を通じて、変化する個別ニーズに対応する研修と教材の開発を進める点が特徴です。さまざまな専門分野の教職員の協力を得て、各大学のニーズに適合し、より効果的な教職員の能力開発の実現を目指します。

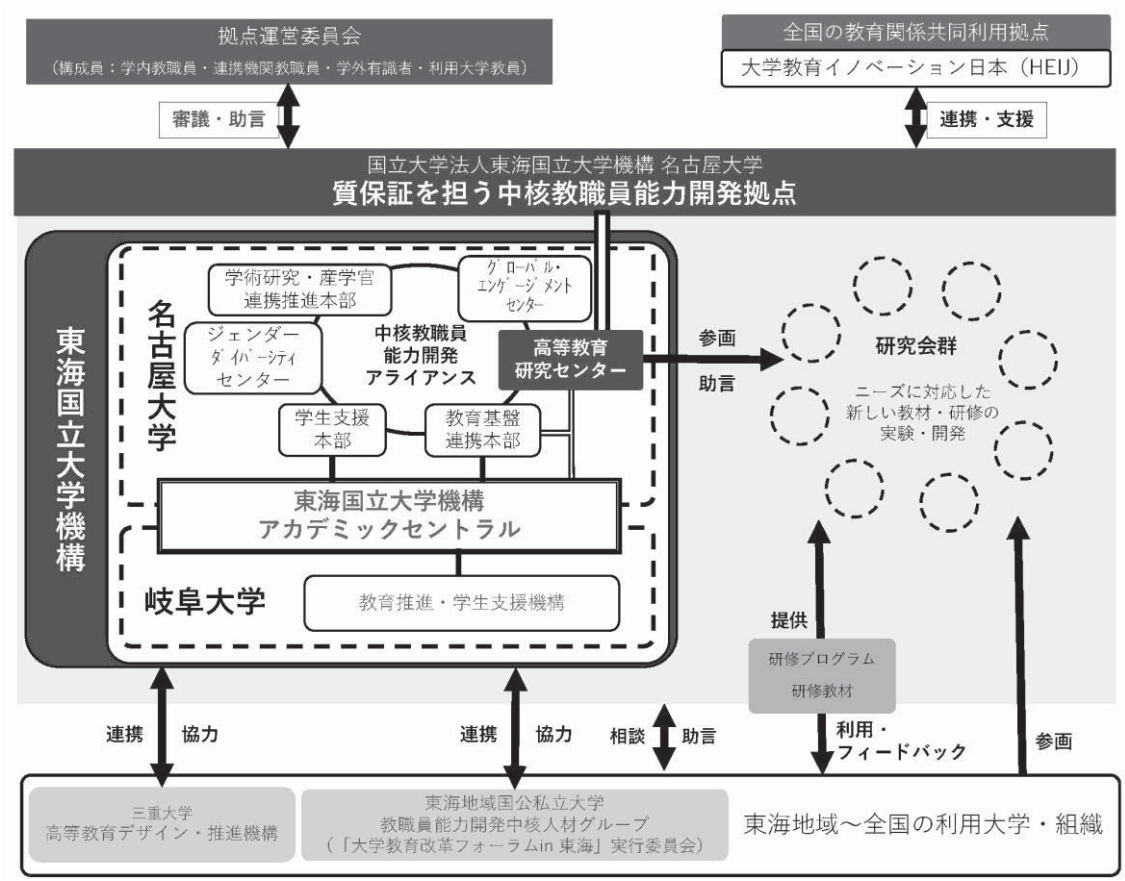
研修プログラムの開発や提供にあたっては、名古屋大学内での協働体制の下、高等教育研究センターを中心に、教育基盤連携本部、高等教育研究センター、学術研究・産学官連携推進本部、国際機構（現：グローバル・エンゲージメントセンター）、学生支援センター（現：

学生支援本部）、男女共同参画センター（現：ジェンダーダイバーシティセンター）が連携して取り組みます。また、東海地域を中心に、学外の教職員の協力と参画を得ながら進めます。こうした連携体制により、次のような分野でプログラムの提供を進める見込みです。

FD	
教員として必須の基礎的・共通的な内容	・研究倫理 ・アクティブラーニング ・英語による授業
学問分野別に関する内容	・研究倫理講座 ・哲学教育 ・物理学教育
プレ FD に関する内容	・大学教員準備講座（大学院生向け） ・大学教員準備講座（実務家教員向け）
FD 担当者に必要な内容	・FD 委員長、FD 委員支援

SD	
職員として必須の基礎的・共通的な内容	・教務職員支援
キャリア段階別に必要な内容	・管理職向けマネジメント研修
専門的職員の分野別の内容	・IR 分野 ・アドミッション分野 ・学生支援分野 ・留学生支援分野 ・研究支援分野 ・ダイバシティマネジメント分野

2.2.4　拠点体制図


拠点運営委員会
（構成員：学内教職員・連携機関教職員・学外有識者・利用大学教員）
全国の教育関係共同利用拠点
大学教育イノベーション日本（HEIJ）
審議・助言
連携・支援
国立大学法人東海国立大学機構 名古屋大学
質保証を担う中核教職員能力開発拠点
東海国立大学機構
名古屋大学
学術研究・産学官連携推進本部
グローバル・エンゲージメントセンター
ジェンダーダイバーシティセンター
中核教職員能力開発アライアンス
高等教育研究センター
学生支援本部
教育基盤連携本部
東海国立大学機構
アカデミックセントラル
岐阜大学
教育推進・学生支援機構
参画
助言
研究会群
ニーズに対応した新しい教材・研修の実験・開発
提供
研修プログラム
研修教材
連携
協力
連携
協力
相談
助言
利用・フィードバック
参画
三重大学
高等教育デザイン・推進機構
東海地域国公私立大学
教職員能力開発中核人材グループ
（「大学教育改革フォーラムin 東海」実行委員会）
東海地域～全国の利用大学・組織

2.3 拠点運営委員会

2.3.1 規程

◎名古屋大学高等教育研究センター質保証を担う中核教職員能力開発拠点運営委員会規程
（平成 29 年 9 月 12 日規程第 55 号）

改正　平成 31 年 3 月 29 日規程　　第 143 号
令和　2 年 4 月　1 日名大規程　第　7　号

（趣旨）

第 1 条　名古屋大学高等教育研究センター規程（平成 16 年度規程第 195 号）第 5 条第 2 項の規定に基づく名古屋大学高等教育研究センター（以下「センター」という。）の質保証を担う中核教職員能力開発拠点運営委員会（以下「拠点運営委員会」という。）に関する事項は，この規程の定めるところによる。

（審議事項）

第 2 条　拠点運営委員会は，センターの教育関係共同利用拠点としての利用及び運営に関する重要事項について審議する。

（組織）

第 3 条　拠点運営委員会は，次に掲げる拠点運営委員をもって組織する。

一　センター長
二　センターの教授 1 名
三　教育推進部長又は学生支援監
四　名古屋大学以外の学識経験者 5 名以上
五　その他センター長が必要と認めた者

2　前項第 4 号の拠点運営委員の数は，全委員の 2 分の 1 以上とする。

3　第 1 項第 4 号及び第 5 号の拠点運営委員は，センター長の推薦により，総長が任命又は委嘱する。

4　前項の推薦を行う場合において，センター長は，センター運営委員会の議を経るものとする。

（任期）

第 4 条　前条第 3 項の拠点運営委員の任期は，2 年とする。ただし，再任を妨げない。

2　前項の拠点運営委員に欠員が生じたときは，その都度補充する。この場合における拠点運営委員の任期は，前任者の残任期間とする。

（委員長）

第 5 条　拠点運営委員会に委員長を置き，第 3 条第 1 項第 1 号の拠点運営委員をもって充てる。

2　委員長は，拠点運営委員会を招集し，その議長となる。ただし，委員長に事故がある場合は，あらかじめ委員長が指名した拠点運営委員が議長となる。

（定足数）

第 6 条　拠点運営委員会は，拠点運営委員の過半数の出席により成立し，議事は，出席者の過半数によって決する。

（意見の聴取）

第 7 条　拠点運営委員会が必要と認めたときは，拠点運営委員以外の者の出席を求め，その意見を聴くことができる。

（専門委員会）

第 8 条　拠点運営委員会が必要と認めたときは，専門委員会を置くことができる。

（雑則）

第 9 条　この規程に定めるもののほか，拠点運営委員会に関し必要な事項は，拠点運営委員会の議を経て，センター長が定める。

附則

この規程は，平成 29 年 9 月 12 日から施行し，平成 29 年 8 月 16 日から適用する。

附則（平成 31 年 3 月 29 日規程第 143 号）

この規程は，平成 31 年 4 月 1 日から施行する。

附則（令和２年４月１日名大規程第７号）

この規程は，令和２年４月１日から施行する。

2.3.2　委員名簿

委員長	北 栄輔	高等教育研究センター センター長
委　員	大津 史子	名城大学薬学部 教授
委　員	大塚 知津子	瀬木学園 理事長／愛知みずほ大学・短期大学 学長
委　員	近田 政博	神戸大学大学教育推進機構 教授
委　員	松下 佳代	京都大学大学院教育学研究科 教授
委　員	飯吉 弘子	大阪公立大学 学長補佐／国際基幹教育機構高等教育研究開発センター センター長／教授
委　員	加藤 真紀	高等教育研究センター 教授
委　員	佐久間 淳一	学生支援本部 本部長
委　員	河口 正樹	教育推進部 部長

2.3.3　委員会開催状況

	日程	主な議題
第 8 回	2024 年 5 月 23 日 Zoom オンライン会議	令和 5 年度活動報告、令和 6 年度活動計画

2.4 拠点専門委員会

2.4.1　委員名簿

委員長	北 栄輔	高等教育研究センター センター長
委　員	加藤 真紀	高等教育研究センター 教授
委　員	安部 有紀子	高等教育研究センター 准教授
委　員	安田 淳一郎	高等教育研究センター 准教授
委　員	松本 みゆき	高等教育研究センター 特任准教授
委　員	和嶋 雄一郎	高等教育研究センター 特任准教授
委　員	齋藤 芳子	高等教育研究センター 助教
委　員	竹永 啓悟	高等教育研究センター 特任助教
委　員	東岡 達也	高等教育研究センター 研究員

2.4.2　開催状況

	日程	主な議題
第 46 回	2024 年　4 月 12 日	前期活動計画
第 47 回	2024 年　5 月 17 日	運営委員会の準備
第 48 回	2024 年　9 月 13 日	進捗の確認
第 49 回	2024 年 10 月 11 日	後期活動計画
第 50 回	2025 年　1 月 17 日	進捗の確認
第 51 回	2025 年　3 月 11 日	次年度計画と年度報告書確認

2.4.3　その他

高等教育研究センター会議及び高等教育システム開発部門会議を月に 1 度開催しており、拠点事業を含む各種業務について審議報告を行っている。今年度の開催状況は巻末の Appendix を参照。

2024 年 4 月～ 5 月に第 3 期拠点事業申請に向け、第 2 期の総括及び関係者への調整と計画書策定等を行った。

第 II 部　令和 6 年度の拠点活動実績

1. 組織的研修の開催

1.1 招聘セミナー・客員教授セミナー

〇第 216 回招聘セミナー

「英語で専門科目を学ぶためのアプローチを考えよう：CLIL 紹介」

講　　師：カヴァナ・バリー（東北大学高度教養教育・学生支援機構 准教授）

　　ヴァシィレヴァ・マリア（名古屋大学教養教育院 特任准教授）

日　　時：2024 年 5 月 16 日（木）15:00～17:00

開催方法：対面／オンライン

対面会場：名古屋大学東山キャンパス文系総合館 5 階アクティブラーニングスタジオ

対面定員：20 名

概　　要：日本の多くの大学は、「グローバル人材」の育成を目的として EMI（English Medium Instruction：英語で専門科目の授業をする）コースを展開しています。しかし、英語力の向上を目的として日本人学生が EMI 授業を履修しても、語学力が十分でないため単位を取得できないのが現状です。この問題を解決するため、本セミナーでは新たな取り組みである CLIL（Content and Language Integrated Learning：内容言語統合型学習）の教育アプローチを EMI と比較しながら紹介します。また日本の大学での CLIL の実践や、理学や工学の専門家によるコンテンツの導入例を示します。

講演要旨：

本セミナーでは、CLIL（Content and Language Integrated Learning）の教育概念と EMI（English as a Medium of Instruction）との違いを取り上げた。さらに、東北大学と名古屋大学で STEM 分野の学生向けに開発された CLIL コースの 2 例も紹介した。

EMI は、日本人学生の英語能力を改善するための手段として周知されている。しかし、EMI は言語習得のアプローチを実際は含んでいない。その名称が示すように、EMI はあくまで授業改善に焦点を当てた方法であり、英語は授業内容を伝達するための媒体にすぎない。したがって、言語習得のためのサポートが提供されない EMI では、教員と学生の両方に英語能力が求められる。それに比べ、CLIL は言語習得と授業改善の両方に焦点を当てたアプローチであり、学生に対する語学サポートが CLIL の授業計画には組み込まれており、

授業目標も言語習得を含んでいる。

1994 年にヨーロッパで始まった CLIL は、主に中等教育現場で実践されてきたが、日本では大学の社会科学の授業で取り入れられている。 日本における CLIL の研究と普及を目的とした学会が J-CLIL である。

CLIL による教育は、Content（内容：専門的科学分野）、Communication（情報伝達：言語）、Cognition（認知：思考力）、Culture（文化：異文化理解）の 4 つの C の概念に基づいている。Cognition は、用語の暗記などの低次思考スキル（LOTS：Lower Order Thinking Skills） だけでなく、分析・統合などの高次思考スキル（HOTS：Higher Order Thinking Skills）も含む。 現在の CLIL コース開発が抱える問題に、教材不足がある。CLIL 教材は、ネイティブの言語能力に合わせて開発されるが、同時に第 2 言語として学ぶ 者にも対応する必要があるため、ほとんどの CIL 講師は教材開発と授業計画を独自に行っているのが現状だ。

東北大学工学部が開発した CLIL コースを講師のカヴァナ・バリーより紹介した。学生が英語を用いて研究できることを目指し、大学院工学プログラムにより開発が求められた。学部 3・4 年生および大学院生を対象に、生物物理学の CLIL コースを設立したが、英語教育の専門家が開発に携わったため、授業で取り上げる内容を厳選し、専門分野を説明することに苦労を要した。

名古屋大学が開発した生物学専攻の学生向け CLIL コースを講師のヴァシィレヴァ・マリアより紹介した。名古屋大学が G30 国際プログラムを通じて提供する EMI コースを日本の学生にも開放したいという要望から開発が求められた。学部 1・2 年生対象の生物学 CLIL コースは、生物学専門家によって開発されたため、英語をいかに授業に取り込んでいくかに苦労を要した。

結論として、CLIL コース開発のために、英語教育の専門家と授業分野の専門家が協力するチームティーチングの必要性が明らかとなった。

https://web.cshe.nagoya-u.ac.jp/event/47/

〇第 114 回客員教授セミナー

「インドと日本の高等教育における協力の可能性：国際比較を通じた考察」

講　　師：キンジャール・アヒール（インド サルダール・パテル大学経済学部 教授）

日　　時：2024 年 7 月 4 日（木）15:00〜17:00

開催方法：オンライン

使用言語：英語

概　　要：インドの高等教育は、機関数にして世界最大、高等教育への入学者数では世界第2位を誇る。高等教育の国際化も多様な形で進み、例えばインドの最近の規制改革は、従来の伝統的な国際協力関係に加えて、世界に向けて高等教育のための様々な協力の道を開いている。一方で日本との結びつきはわずかである（2022年のインドへの留学生46,878人のうち、日本からの留学生は約0.1%の47人に過ぎず、インドから留学する学生1,324,954人のうち、日本への留学生も約0.1%の1,302人に留まる）。本セミナーでは、このような現状を踏まえつつ、インドと日本の高等教育システムの協力の道を探る。まずはインドの高等教育について、日本の高等教育との比較を基に紹介し、そこで得た知見により両国間の協力の可能性を探索する。

講演要旨：

本セミナーの目的は、インドと日本の高等教育における協力関係の現状と今後の展望を理解することである。それには両国間の歴史的つながりと、それぞれの高等教育システムが発展してきた背景の理解が不可欠となる。本セミナーでは、インドと日本の過去から現在までの関係、インドの高等教育制度と日本との相違点について順に説明した。最後に、日本とインドの高等教育における協力の可能性について議論を行った。

日本とインドは、文化、経済、商業、科学技術、防衛などで歴史的に強い結びつきがある。例えば、奈良の東大寺にある大仏は752年にインドの僧侶ボディセナによって奉献されたものであり、卍（スワスティカ）、ヨガ、絞り染め（バティックやバンドニー）のように、両国間の交流を象徴するような文化も日常において観察することができる。

インドではナーランダ大学、タクシャシーラ大学、ヴィクラマシーラ大学といった古代遺産に値する機関をはじめ、多くの大学が6〜7世紀の間に設立された。これがインド高等教育のはじまりである。これらの大学には世界中から学者が集まり、入学審査も厳しいものであった。知識、倫理、戦略、技能の科目があり、世界的にも優秀な学者が教員となり、大きな自治権と権威を有していた。数世紀前から既に女性の副学長も存在した。

次に、インドの高等教育の組織構造について日本と異なる特徴を説明した。特に附属カレッジなど日本とは異なる形態の大学について紹介し、インドにおいて大学がどれだけ重要な位置づけにあるか、大学院の名称の違い、学位規定などについても詳しく説明した。インドの高等教育は、機関数・入学者数ともに世界最大数を誇るが、進学率は28%に過ぎない。インドの高等教育機関における入学者数の男女平等を示すジェンダー平等指数や、インドの高等教育の特徴に焦点を当てながら、高等教育の分野別およびプログラム別の入学者数の傾向について説明した。

また、インドに留学する学生とインドから海外に留学する学生の傾向についても取り上げた。インドが受け入れる留学生のほとんどは近隣諸国であり、アフリカ諸国やアメリカからの学生も多い。一方、インドから海外に留学する学生は、主にアメリカ、カナダ、オーストラリアへの留学で、最近の傾向では、UAE、サウジアラビア、カタール、オマーンなどの中東アジア諸国への留学するケースも増加している。一方で、2022 年にインドから日本に留学した学生はわずか 1,302 人であり、留学生全体の 1%にも届かない。インドに留学した日本人学生も 50 人に満たないうえ、そのほとんどが卒業後の留学を希望している。ちなみに Scopus のデータによると、インドと日本の研究者の共著論文は約 2,000 件で、その分野は自然科学、特に物理学が主となっている。

両国間の留学については国際フェローシップという形でさまざまな機会を提供するべく具体的な話し合いが行われている。日本とインドの大学間の覚書（MoU）では教員同士の派遣についても言及があった。インド外務省（MEA）及びいくつかのインドの大学では日本語研修も実施している。インド教育省が主導するインドのオンライン学習ポータル SWAYAM では、インドの公用語であるヒンディー語による日本語研修も提供している。同時に、分野にも依るが、日本の大学もまたインドの大学との連携に力を入れている。

年齢別人口を考えても、日本とインドは高等教育においてもっと協力し合えるはずだ。さらに、日本の労働市場における人材不足と、反対にインドの人材過多は、より多くのインドの学生が日本の大学で学び、さらに日本での就職を目指すきっかけになるかもしれない。高等教育界以外ではすでに同じ方向性や共通点をもった機関が両国間には多くみられる。日本とインドの高等教育における協力に残されている多くの可能性が、これから実現されていくことを望む。

https://web.cshe.nagoya-u.ac.jp/event/52/

〇第 115 回客員教授セミナー

「研究コミュニティの価値とは－学部ゼミナールと大学院研究室の調査データをひもとく－」

講　　師：伏木田 稚子（東京都立大学大学教育センター 准教授）

日　　時：2024 年 7 月 25 日（木）15:00～17:00

開催方法：オンライン

概　　要：本邦では 100 年以上もの間、学生がコミュニケーションを取りながら研究活動に励む場として、学部ゼミナールや大学院研究室が大切に引き継がれてきました。こうした研究コミュニティにはどのような価値があり、それは何によって支えられているのでしょ

うか。本セミナーでは、講演者がこれまでに行った複数の調査データを基点に、参加者の皆様とアイディアを共有し、問いへの答えを共創していけたらと考えています。

講演要旨：

本セミナーでは、「研究コミュニティにはどのような価値があり、それは何によって支えられているのか？」という問いを掲げ、参加者の皆様とテキストベースでやり取りをしながら、答えを一緒に創っていくことを試みました。ここでの研究コミュニティとは、学部ゼミナールと大学院研究室を例に、「学生がコミュニケーションを取りながら研究活動に励む場」を指しています。

はじめに、問いに関するアイスブレイクとして、研究コミュニティの実践および参加経験、研究コミュニティの魅力についての考えを、オンラインフォームに書き込んでいただきました。あえて魅力という言葉を用いたのは、価値を主観的なよさとする見方に立ち、参加者が自身の経験に引きつけて思いを巡らす機会を設けたかったからです。例えば、「立場などに関係なく、研究内容について自由に議論できる」「科学的な知見と思考や生きる態度を身につけることができる」「相互扶助的に励まし合う環境に救われる」「好きを突き詰められる」などの声が集まりました。

続いて、学部ゼミナール、大学院研究室の順に、調査を通じて得られた知見を紹介しました。学部ゼミナールは、「少人数での探究に基づく共同体な学習環境」であり、研究を通じた教育という理念の下、知の創造を目指すドイツの大学で 18 世紀に誕生しました。19 世紀後半に日本へ導入された後、専門分野における探究と教員・学生間の情緒的つながりを大切にしながら、汎用的技能（基礎的で転用可能な技能）が成長する場へ成熟したと考えられます。10 年ほど前の質問紙調査では、教員がゼミ生の心理・状況面を理解して探究心の醸成を図ること、ゼミ内で結束性と互恵性の意識が育まれること、積極的な議論や課題遂行の支援を行うこと等の重要性を示しました。

大学院研究室については、文献レビューを基に「有機的で多義性のある、アジールのようなコミュニティ」という仮定を置き、今年 2 月にオンライン調査を実施しました。分析途中にはなりますが、大学院生は専攻や研究タイプにかかわらず、研究室での報告・議論・指導やインフォーマルなやり取りを通して、自身の研究に役立つ知識を得たり、研究の方向性を検討・調整したりできると推測されます。また、研究室が作業場のほかに書庫や憩いのスペースを有する場合、居場所としての機能が高まる可能性も見えつつあります。

以上を踏まえたセミナーの最後では、参加者が自身の経験をふり返り、学生にとっての研究コミュニティの価値に対する考えを、ウェビナーの Q&A に寄せてくださいました。「自

分としてこうありたいという形が、この数年実現していない」という教員の方々のお悩みに、少しでも具体的な知見をお返しできるよう、研究成果の可視化に励んでいきたいと思います。ご参加くださった皆様、ほんとうにありがとうございました。
https://web.cshe.nagoya-u.ac.jp/event/53/

○第 217 回招聘セミナー・第 7 回学生支援担当者講習会
「ソウル大学の学生寮教育の現状
　－Living & Learning (LnL) Residential College の経験から－」
講　　師：Jong Kwon Choe
　　（韓国 ソウル大学建設環境工学部 准教授／Living & Learning (LnL) 運営団長）
日　　時：2024 年 9 月 6 日（金）14:00～16:00
開催方法：オンライン
対 象 者：大学教職員、学生、その他大学関係者
使用言語：英語、日本語
　　※講演は英語で行います（Zoom 翻訳機能をご利用になれます）。なお、質疑応答は日本語でも対応します。
概　　要：ソウル大学は 2023 年より、Living & Learning（LnL）Residential College（以下、LnL RC）と呼ばれる学生寮を通じた教育を試験的に実施しています。LnL RC では、主に学部 1 年生を対象に、共同生活を送りながら様々なカリキュラムや課外活動に参加する機会を提供することによって、コミュニティへの参加意識と異なる文化や考え方を尊重する意識を育むことを目的としています。
　今回 LnL RC 運営団長の Choe 教授をお招きし、韓国でも有数のソウル大学がなぜ LnL RC を導入するに至ったのか、その背景・経緯、従来の学生寮と異なる LnL RC の特徴、2 年間の活動内容、現状の課題についてご紹介いただき、フロアを交えて今後の展望等について意見交換していきたいと思います。
※本セミナーは科学研究費補助金 23K02524、ならびに 20K02615 の協力により開催します。

プログラム
趣旨説明：「韓国の大学の学生寮の現状について」日暮 トモ子（日本大学文理学部 教授）
講演：Jong Kwon Choe（ソウル大学建設環境工学部 准教授／LnL 運営団長）
質疑応答

講演要旨：

ソウル大学は 2023 年から「Living & Learning（LnL）」という名称で、学部 1 年生が寮で共に生活し、教科および課外活動に参加する寄宿型大学（Residential College。学寮カレッジ）を試験的に運営している。本事業は、ソウル大学のビジョンの一つである「共同体意識とグローバルな能力を備えたリーダーの育成」を達成するための、ソウル大学の長期戦略計画の一環として始まった。学生たちが共に生活し学習する中で調和の価値を尊重し、共同体（コミュニティ）への参加と多様な文化や思考への尊重を促進することを目指している。LnL 内では、各学部の学生数比率、男女比率、首都圏および地方出身の比率にあわせて多様な学生が参加できるように構成されている。

LnL は 2024 年現在 410 人の学部 1 年生が参加しており、各階ごとにセミナールーム、ラウンジなどの共有スペースが配置されている 906 棟と、アパート式でリビング構造の共有スペースを 6 人のルームメイトが共有する 919 棟がある。各棟には、マスター教授、専任講師、大学院生で構成されるプロクター（proctor）、高学年の学部生で構成されるメンター（mentor）が、 1 年生の教科および課外活動をサポートし、共同生活での密接なメンタリングを行っている。

新入生は、 1 学期には共同体に関連する講義と討論を中心とした「冠岳モドゥム講座（관악모둠강좌）」を履修し、2 学期には、学生自身がチームを組んで、関心のある学術的テーマについて自主的にシラバスを作成し、学びを深める「学生自主セミナー」を履修する。課外活動としては、プロクターやメンター、または新入生が企画して運営するさまざまなテーマの課外プログラムや、同じ階や部屋の学生同士で親睦を深めたり野外活動を行うグループ活動がある。

これらの活動を通じて、LnL に参加した 1 年生は、同じ学部の学生や主に交流する他の 1 年生（LnL 非参加学生）と比較して、多様な背景を持つ学生との親交が生まれ、また、複数専攻や副専攻への関心が高まるなどの変化が見られた。今後、LnL を持続的に拡大していくためには、教科及び課外活動の充実化とプロクターおよびメンターのトレーニングプログラムの発展が必要であり、またインフラ面でも、全学生を収容できる寮の増築や再建が求められる。このような課題を克服しながら、今後 LnL がソウル大学を代表する寄宿型大学として発展し続けるよう尽力していきたい。

https://web.cshe.nagoya-u.ac.jp/event/62/

○第 218 回招聘セミナー・第 8 回学生支援担当者講習会

「高等教育論から見た学生相談」

講　　師：大山 泰宏（放送大学教養学部 教授）
日　　時：2024 年 11 月 12 日（火）13:00～15:00
開催方法：オンライン
対 象 者：大学教職員、学生、その他大学関係者
共　　催：名古屋大学学生支援本部
概　　要：「木に竹を継いだようだ」と、日本の大学の制度について、私の友人のアメリカ人高等教育研究者は言っていました。この比喩の中には、日本の学生相談・学生支援の置かれた状況を理解するうえでの重要なヒントがあります。学生の自己探求と成長を支える大学教育の実現と維持のためには、個々の教職員の努力だけでなく、自分たちが戦うべき本当の相手を知ることも重要です。この講演では、日本と欧米の学生支援に関する社会文化的な背景を理解し、高等教育の中での学生支援について俯瞰することを目的とします。
https://web.cshe.nagoya-u.ac.jp/event/69/

〇第 219 回招聘セミナー・第 18 回アドミッション担当教職員支援セミナー
「学力の 3 要素・観点別評価の大学入試活用への期待と課題」
講　　師：永野 拓矢（名古屋大学教育基盤連携本部アドミッション部門 准教授）
日　　時：2024 年 11 月 21 日（木）15:00～17:00
開催方法：オンライン
概　　要：2017 年 4 月の学校教育法施行規則改正により、すべての大学において「三つのポリシー」の策定・公開が義務づけられ、現在は入学者選抜要項等に記載されています。このうち、アドミッション・ポリシー（以下、AP）には「学力の 3 要素」が盛り込まれました。本講演では、各国立大学が示す AP と「学力の 3 要素」の関連に注目し、入試種別ごとの「求める人物像」の傾向について分析と考察を行います。さらに調査書へ記載待ちの段階にある「観点別学習状況の評価」についても、「導入後」を見据えて同評価の大学入試への活用可能性について考察します。
https://web.cshe.nagoya-u.ac.jp/event/73/

〇第 116 回客員教授セミナー
「大学から高等教育へ：1960-70 年代日本の大学・高等教育改革の再検討」
講　　師：戸村 理
（東北大学高度教養教育・学生支援機構高等教育開発部門高等教育開発室 准教授）
日　　時：2024 年 11 月 28 日（木）15:00～17:00

開催方法：オンライン

概　　要：戦後大学改革によって誕生した新制大学は、大学進学機会の拡大に大きく寄与した一方、その成立経緯から種々の問題を内包していた。その問題は新制大学発足後 10 年を経ずに顕在化し、1960 年代には大学進学率の上昇とあいまって深刻化、社会問題化する。こうして大学は改革の時代を迎えることになるわけだが、本セミナーでは、1960 年代から始まる日本の大学・高等教育改革が何を問題視し、どのような大学・高等教育像を設計しようとしていたのかについて、あらためて検討する機会にしたいと考える。

講演要旨：

本セミナーでは、1960～70 年代の 2 つの中教審答申における大学・高等教育機関の目的・性格に関する議論・審議経過に注目し、その議論の根底に共通して見られた改革の焦点について考察した。当日は導入として戦後大学改革に関する先行研究の評価を確認したうえで、以下、「38 答申」と「46 答申」の審議において、大学・高等教育機関の目的・性格を検討した 2 つの特別委員会の検討を試みた。

まず「38 答申」では、第 15 特別委員会での委員や参考人の意見を取り上げた。そして大学の種別や修業年限、何よりも一般教育に関する問題点が数多く言及された事実を紹介した。周知の通り、一般教育は戦後大学改革によって新たに導入された科目である。だがこれによって旧制大学と比べて専門教育に充てられる時間が短縮された。しかも市民的教養や人格形成に寄与することが期待された一般教育について、当時の大学教員の多くはそれをどのように行えばよいのかがわからず、その教育内容・教授方法にも苦慮していた。結果として第 15 特別委員会では、一般教育は各高等教育機関の教育目的に応じて定めるべきであるとし、高等教育機関を大学院大学・大学・短期大学・高等専門学校・芸術大学の 5 つに種別化した事実を確認した。

次に「46 答申」では、第 26 特別委員会での複雑な審議経過を一次資料も紹介しつつ紹介した。ここでも最も大きな問題は一般教育の取り扱いであり、学校体系をめぐる対立では、既存（当時）の 4 年制大学とは修業年限も教育課程も異にする「一般大学」と「専門大学」という新たな構想があったこと、そしてそれらを「別種積み上げ式」とするのか、「多様並列木式」とするのかで議論が紛糾した事実を紹介した。加えて教育課程も、一般教育と専門教育という枠組みから、「総合専門教育」、「特殊専門教育」、「特殊学芸教育」という枠組みへと変更する案を文部省が提示していたことを紹介した。他にも論点が数多くあったことを示したうえで、結果として、第 1 種の大学（総合領域型・専門体系型・目的専修型）、第 2 種の短期大学（教養型・職業型）、第 3 種の高等専門学校、第 4 種の大学院（修士相

当）、第 5 種の研究員（博士相当）という区分で種別化・類型化した事実を確認した（機関名はすべて「仮称」とされた）。

以上の事実から、両答申には、大学の「教育」改革という意味で、連続性・一貫性が見られるとした。さらに大学・高等教育機関の改革、つまり種別化・類型化の議論の背景には、戦後新たに大学の教育課程に加わった一般教育の問題があったことを仮説的に提示した。
https://web.cshe.nagoya-u.ac.jp/event/71/

〇第 220 回招聘セミナー・大学 IR×DX 研究会第 4 回セミナー
「上智大学の事務組織における、生成 AI の利活用について
　－アンケートの自由記述の処理や、学内文書の翻訳など－」
講　　師：相生 芳晴（上智大学 IR 推進室 室長）
日　　時：2024 年 12 月 17 日（火）13:30～15:30
開催方法：オンライン
対 象 者：大学教職員、学生、その他大学関係者
概　　要：上智大学の事務組織における、生成 AI 活用の事例について紹介します。
・学生調査等の自由記述テキストを、生成 AI で整理して、分かりやすい報告にまとめる
・翻訳業務での利用により、学内文書の日英化が進展した
・Excel の使い方など、日常利用しているソフトウェアについて相談する
といった活用事例の他、生成 AI 利用における課題点についても触れる予定です。それらによってもたらされた学内の変化についてもご紹介できればと思います。

講演要旨：

本講演では、上智大学の事務組織における生成 AI 利活用の事例についてご紹介をしました。

上智大学では、事務系業務における効率化や質の向上を目指し、2023 年の秋頃から生成 AI 利用の試行錯誤をしてきました。まずは、法人向けの生成 AI サービスのトライアルから始まり、「事務系生成 AI ガイドライン」を整備するに至った経緯について説明しました。

事例紹介の前半では、上智大学における学内文書のバイリンガル化について取り上げました。生成 AI 導入以前は、学内掲示や学内文書の日英化には多くの時間と労力がかかるとともに、利用するソフトウェア面での課題がありました。しかし、AI 翻訳サービスや生成 AI の導入により、このプロセスが大幅に改善されました。現在では、学内掲示については、日英化がかなり進展し、外国人教員からの反応は変わってきております。なお、翻訳業務に

おける生成 AI の利用に際しては、学内文書特有の表現やニュアンスについては限界があるのと、生成 AI の仕様面や運用上の問題も明らかになりました。

事例紹介の後半では、学生調査やアンケートの自由記述テキストを生成 AI で整理し、分かりやすい報告にまとめる取り組みを紹介しました。これにより、大量の自由記述データを効率的に資料化し、的確なフィードバックや改善提案に役立てるケースが徐々に増えてきております。また、Excel やその他の日常的に利用するソフトウェアの使い方に関する相談を、生成 AI がサポートすることで、教職員のスキル向上や業務効率化にも寄与しています。

最後に、生成 AI 利用における課題点についても触れます。例えば、生成 AI の出力結果に依存しすぎるリスクや、プライバシー保護・セキュリティ面での注意が求められる点などがあります。それでも、これらの課題を乗り越えた結果、学内業務の効率化や多言語対応の充実といった大きな変化をもたらしました。本講演では、これらの事例を通じて、生成 AI が大学事務業務にもたらした変化と可能性を考察し、その導入と活用に向けた知見を共有しました。

https://web.cshe.nagoya-u.ac.jp/event/74/

〇第 222 回招聘セミナー・第 9 回学生支援担当者講習会

「名古屋大学における学生支援の取り組み」

講　　師：鈴木 健一（名古屋大学学生支援本部 副本部長／学生相談センター センター長）

司　　会：松本 寿弥（名古屋大学学生支援本部学生相談センター教育連携室 室長）

日　　時：2024 年 12 月 24 日（火）13:00〜15:00

開催方法：オンライン

対 象 者：大学教職員、学生、その他

共　　催：名古屋大学学生支援本部

概　　要：2019 年度から V 字回復した名古屋大学の学生支援体制と具体的な取り組みについてご紹介します。周回遅れどころか 2 周も 3 周も遅れていた名古屋大学学生支援体制は、前総長や現総長の理解を得てカウンセラーを増員し、心が躓いてしまう前の予防教育に注力し、仮に躓いたとしても早期支援に繋げる体制へと変化をしています。アフターコロナの現在、大規模大学が取り組んでいる様々な小さな居場所支援を紹介しながら、学生だけでなく教職員もサポートすることによって学生の躓きが軽減されることをみなさんと一緒に考えたいと思います。

https://web.cshe.nagoya-u.ac.jp/event/78/

○第 221 回招聘セミナー・大学 IR×DX 研究会第 6 回セミナー

「現役担当者が語る事務改革の光と影」

講　　師：湊 涼子（大阪大学総務部／事務改革推進室 専門職員）

日　　時：2025 年 1 月 31 日（金）13:30〜15:30

開催方法：オンライン

対 象 者：大学教職員、学生、その他大学関係者

概　　要：大阪大学での事務 DX の取組を紹介し、そこで体験した成功や失敗、これから目指す方向性についてお話できればと思います。

・大阪大学の事務 DX の取組紹介

　－RPA、生成 AI を中心に

・失敗と成功、苦労と喜び

　－事務改革担当者として実感した、大変さと楽しさ

　－阪大は世間がイメージする大阪人の集まりではない!?

　－研修の内製化が思わぬ反響へ

・目指したい未来

　－草の根活動から次のステージへ

　－組織改革・業務集約の波に乗って DX 加速へ

講演要旨：

大阪大学の事務改革推進室では、様々な形で業務効率化の支援を行っている。特に RPA（Robotic Process Automation）や生成 AI を導入し、専用のポータルサイトを作成することで事務職員への発信を行い、事務業務の効率化を図っている。今回のセミナーでは、それらをどのように学内で展開しているかの具体的な事例を紹介し、今後の展望について取り上げた。RPA の導入については、2022 年 1 月から 2024 年 9 月まで「RPA 推進タスクフォース」が設立され、RPA の普及活動を通じて学内の業務自動化を推進したことを報告した。RPA 活用の成果として、自動化フローの作成数や市民開発者の増加が挙げられ、効率化が進んでいることが確認されている。また、「RPA 超！基礎講習」を開催することで、まだ RPA に触れたことがない職員に利用のきっかけを提供し、利用者の底上げを行った。生成 AI については、専用の生成 AI ツールを導入し、プロンプト集を公開することで、職員が生成 AI を活用しやすい環境を整備したことを報告した。RPA の事例と同様に、初心者向けのコンテンツを作成することによって、活用の広がりに努めた。一方で、無関心層へのアプ

ローチが難しいという共通の課題を抱えており、今後、より一層の活用浸透のために、施策を思案していることが報告された。
https://web.cshe.nagoya-u.ac.jp/event/77/

〇第 117 回客員教授セミナー
「インターンシップ効果の総合的研究」
講　　師：梅崎 修（法政大学キャリアデザイン学部 教授）
日　　時：2025 年 3 月 6 日（木）15:00～17:00
開催方法：オンライン
対 象 者：大学教職員、学生、その他大学関係者
概　　要：2020 年代に入ってからインターンシップは量的拡大と質的多様化が進んでいる。インターンシップの効果の把握は、その実践にとっても必要であるが、分析が追い付いていないと言えよう。本報告では、インターンシップの効果測定尺度の開発とその尺度を使ったインターンシップ体験の質的な分析を報告する。特に希望業界などの絞り込む焦点化と、業界の多様性に気付いていく展望化に着目する。焦点化と展望化に焦点を当てることでインターンシップ効果の過程が明らかになる。

講演要旨：
近年、急激に拡大している大学生のインターンシップについて、効果測定尺度の開発を中心に、インターンシップの効果について報告を行った。
第一に、2020 年に刊行した、以下の共著論文についてその開発プロセスを説明した。特に、既存のキャリア探索の尺度や大学生版のキャリア意識の尺度との違いについて詳しく説明した。
初見康行・梅崎修・ 坂爪洋美「大学生のインターンシップ効果測定尺度の開発－テキスト分析とパネルデータによる実証研究」『日本労務学会誌』第 21 巻 3 号
加えて、インターンシップに特化した効果測定尺度が、インターンシップを含めた職場体験を含むキャリア教育において実践上の価値があることを報告の中で確認した。実践上の価値とは、効果測定を導入することによって同じプログラムでも学びの個人差が生まれること、その個人差に対応してプログラムの改善が行わる可能性を示したことである。
続けて、実際に一つのインターンシップのプログラムを取り上げ、定性的分析の例を紹介した。まず、効果測定尺度の項目の中でもキャリアの焦点化とキャリアの展望化という方向が異なる二つの因子に絞り、効果の大きさを比較して、両効果が大きい A グループ、どち

らか片方が大きいB・Cグループ、両方が小さいDグループという4つのタイプに分けた。そして、参加者にグループインタビューを行って、そのような学びの過程の違いが生まれる要素を学生たちの語りの中から探った。

この分析は、現在進行中のものであるが、SCAT（Steps for Coding and Theorization）を使用して、すべての語りのコーディングまでは進んでおり、いくつかの事実発見がある。例えば、Aグループでは、語られる体験の具体性、事前計画があること、実力の認知が行われること、能動性や他者の存在が活用されることなど確認できた。一方、他タイプには、具体性の欠如、不安や焦りの存在、決断の一貫性のなさなどが確認できる。また、Dグループに関しては、語りそのものが少なかった。

最後に、以上のような定性分析の事実発見を踏まえて、学ぶ過程の個人差を踏まえたキャリア支援の在り方、4年間の大学生活の中でのインターンシップ・プログラムの段階化などを提案し、報告者と参加者で有意義な議論をすることができた。

https://web.cshe.nagoya-u.ac.jp/event/82/

1.2 大学教育改革フォーラム in 東海 2025

大学教育について、近隣の大学関係者が一緒に議論し、連携、連帯を深め、もっと質の高い大学教育をこの地区に実現することを目指して、大学教育改革フォーラム in 東海を企画した。

日　　時：2025 年 3 月 8 日（土）10:00～18:00
会　　場：名古屋大学東山キャンパス IB 電子情報館
参 加 費：無料
主　　催：大学教育改革フォーラム in 東海 2025 実行委員会
　　名古屋大学高等教育研究センター[質保証を担う中核教職員能力開発拠点]
U　R　L：https://sites.google.com/view/tokaiforum

プログラム：
10:00～10:05　開会挨拶
10:05～11:30　基調講演「大学教育における汎用的／分野横断的能力の育成の可能性」
　　松下 佳代（京都大学大学院教育学研究科 教授）
11:45～12:30　ポスターセッション
12:30～13:30　休憩
13:30～15:00　分科会第Ⅰ部
15:15～16:45　分科会第Ⅱ部
17:00～18:00　情報交換会

○分科会第Ⅰ部の内容
Ⅰ-1：学生の多様化
「障害のある学生と大学教育－社会的バリアを多様な視点から考える－」
司会者：福田 由紀子（日本福祉大学学生支援センター 職員）
発表者：中野 まこ（自立生活センター十彩 代表）
　　小林 眞弓（日本福祉大学全学教育センター 助教）
　　工藤 晋平（名古屋大学学生支援本部アビリティ支援センター 准教授）
Ⅰ-2：産学官連携教育
「大学教育における産学官連携のさらなる可能性を探る」

司会者：東岡 達也（名古屋大学高等教育研究センター 研究員）

発表者：水野 英雄（椙山女学園大学現代マネジメント学部 准教授）

平田 博信（豊田工業大学学生部〔学生グループ／学生支援センター〕 副部長）

矢野 貴大（名古屋大学学術研究・産学官連携推進本部スタートアップ推進室 URA）

Ⅰ-3：組織マネジメント

「ミドルマネジメント経験を語り合う」

司会者：丸山 和昭（名古屋大学大学院教育発達科学研究科 准教授）

話題提供：水谷 朋子（東海国立大学機構名大病院人事労務課 係長）

小山 敬史（東海国立大学機構名大病院人事労務課 課長補佐）

ファシリテーター：大津 正知（茨城大学教学イノベーション機構 助教）

坂本 規孝（広島市立大学教育基盤センター 特任講師）

的場 由紀子（キャリアコンサルタント）

武谷 信吾（九州産業大学大学改革推進本部）

ディスカッション・サポート：

伊藤 加奈子（椙山女学園大学学務部教務課）

澤田 涼（名城大学総合企画部／愛知県立愛知総合工科高等学校専攻科）

○分科会第Ⅱ部の内容

Ⅱ-4：キャリア支援

「外国人留学生の就職支援に向けた取り組みと課題

－キャリア支援者・日本語教員・外部支援組織の視点から－」

司会者：鬼頭 裕介（愛知教育大学教務企画課）

佐藤 幸代（南山大学国際センター 特別任用講師）

発表者：佐藤 幸代（南山大学国際センター 特別任用講師）

松尾 憲暁（岐阜大学日本語・日本文化教育センター 助教）

塚本 将弘（株式会社 Harmony For 代表取締役）

Ⅱ-5：教育 DX

「みんなで考える DX 化への第一歩」

オーガナイザー：稲垣 太一（学校法人金城学院 課長補佐）

アドバイザー：和嶋 雄一郎（名古屋大学高等教育研究センター 特任准教授）

大津 史子（名城大学薬学部 教授）

今野 拓哉（マイクロソフトコーポレーション インダストリーアドバイザー）

Ⅱ-6：高大接続

「探究学習の学びを活かす－大学教育への接続と展開を考える－」

全体進行：安田 淳一郎（名古屋大学高等教育研究センター 准教授）

総合討論進行：竹永 啓悟（名古屋大学高等教育研究センター 特任助教）

発表者：田中 孝平（北海道大学高等教育推進機構 助教）

吉川 靖浩（名城大学附属高等学校教育開発部 副部長／教諭）

・ポスターセッション一覧

P 1「教職協働による SD 研修の企画・実践の効果と課題－職員の主観的評価に着目して」

藤本 正己（山口大学）、坂本 規孝（広島市立大学）

P 2「内部質保証に寄与する学生参画に関する考察」

荒木 俊博（淑徳大学）

P 3「新潟大学 NICE プログラム SA（スチューデント・アシスタント）による授業シラバス改善プロジェクト」

上畠 洋佑（新潟大学）、佐々木 真理也（新潟大学）、笹森 玲那（新潟大学）、井上 莉那（新潟大学）、藤森 大陸（新潟大学）

P 4「大学と学校教育支援企業の業務連携の動向」

谷村 英洋（帝京大学）、小島 佐恵子（玉川大学）、日下田 岳史（大正大学）、橋本 鉱市（放送大学）

P 5「専修学校から専門職大学化された林業大学校における教育活動の変遷」

小川 高広（京都大学）

P 6「大学教職員ウェルビーイングとその背景要因（1）：J－DCS モデルによる予備的検討」

後藤 和史（北陸大学）、杉森 公一（北陸大学）、川村 拓也（北陸大学）、鶴見 祐大（北陸大学）、金澤 佑治（北陸大学）、河内 真美（北陸大学）

P 7「国立大学図書館協会地区協会助成事業による複数機関で共同した大学図書館広報の取り組み－『東海北陸地区国立大学図書館 グッズでリンク！』プロジェクト」

田中 幸恵（名古屋大学）、北村 左希子（金沢大学）、増田 光世（福井大学）、竹田 深佳（岐阜大学）、金田 志保（岐阜大学）、柴田 佳寿江（浜松医科大学）、島原 優菜（浜松医科大学）、江間 利枝（浜松医科大学）、神谷 知子（名古屋大学）、池田 美穂里（名古屋大学）、岡田 久美子（名古屋大学）

P 8「ティーチング・アシスタントを活かした学生実験の授業改善」

町 環多（岐阜大学）、高橋 孝太朗（岐阜大学）

P 9「長時間労働への意識と教職志望度の関連：性差に着目した計量分析」

菊地原 守（名古屋大学大学院）、澤田 涼（名古屋大学大学院）、溝脇 克弥（名古屋大学大学院）、藤川 寛之（名古屋大学大学院）、田口 愛梨（名古屋大学大学院）、長谷川 哲也（岐阜大学）、内田 良（名古屋大学）

P10「帰国困難なミャンマー留学生のための持続可能なキャリア支援モデル」

白石 寛子（立命館アジア太平洋大学）、森山 寛（立命館大学）

P11「『ディプロマ・ポリシーに基づくアウトカム到達レベル』の策定」

井上 一成（滋賀医科大学）、上志 真記雄（滋賀医科大学）、向所 賢一（滋賀医科大学）、伊藤 俊之（滋賀医科大学）、松浦 博（滋賀医科大学）

P12「大学教員のためのメンタープログラム－名古屋大学における取り組み事例の現状と課題－」

齋藤 芳子（名古屋大学）、熊坂 真由子（名古屋大学）、三枝 麻由美（名古屋大学）

P13「主体性を育むためのサービスラーニングの体制－農業環境リーダー（TA）の役割－」

島田 理暉（岐阜大学大学院）、厚味 莉歩（静岡大学大学院）、乾 千響（静岡大学）、

大畑 花奈（静岡大学）

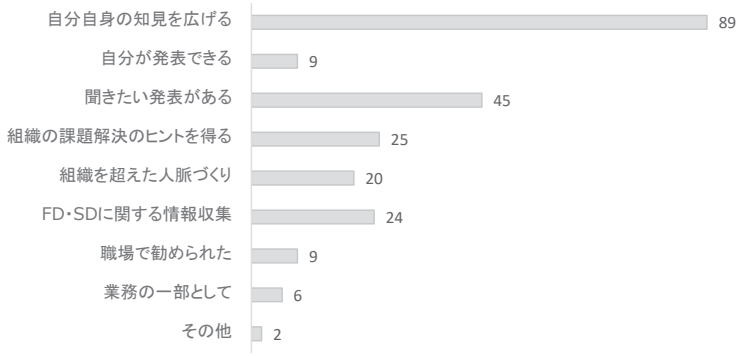
P14「社会福祉専門職養成課程における批判的思考の育成」

久保田 祐歌（関西福祉科学大学）

▷アンケート結果（参加者：172 名　アンケート回答者：101 名）

フォーラムの内容について（単位：人）

（1）フォーラムに参加した動機はなんですか。（複数回答）

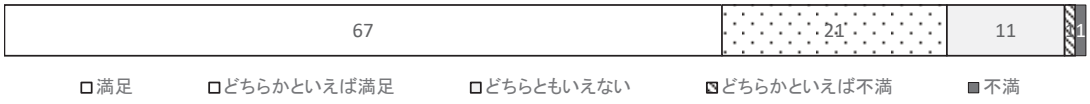


（2）基調講演で取り上げられた内容は、あなた自身にとってどうでしたか。

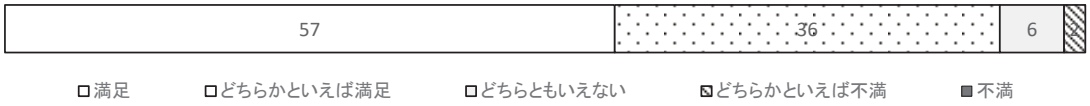
（3）分科会Ⅰ（分科会 1～4）で取り上げられた内容は、あなた自身にとってどうでしたか。

（4）分科会Ⅱ（分科会 5～7）で取り上げられた内容は、あなた自身にとってどうでしたか。

（5）フォーラムの運営等（広報・当日の運営等）についてどう感じましたか。



（6）フォーラムは全体的に満足できましたか。



（7）フォーラムを同僚や部下などに勧めたいですか。

自由記述

・基調講演、分科会とも刺激的かつ示唆に富んだ内容で参加して本当に良かったです。できていないことや課題を見つめなおすことができ、今後のモチベーションとなりました。貴重な機会を設定してくださり、ありがとうございました。来年も楽しみにしております。

・ボランティアの皆様で行っているフォーラムにもかかわらず、駅から会場までの案内、会場内での受付、講演会・分科会への案内等、非常に丁寧でスムーズでした。

1.3 その他の主催・共催セミナー

◎公正研究セミナー

「公正研究セミナー2024」

講　　師：中村 征樹（大阪大学全学教育推進機構 教授）

日　　時：2024 年 4 月 4 日（木）10:00～12:00

開催方法：オンライン

定　　員：100 名（本学大学院理学研究科新 M 1 を除く募集定員数）

主　　催：名古屋大学高等教育研究センター[質保証を担う中核教職員能力開発拠点]／
　　名古屋大学大学院理学研究科

概　　要：「公正研究」をより広い視野で理解するためのセミナーです。「研究不正をしない」ということを超えて、社会における研究活動の意義と意味、研究者の「責任」のあり方を広く見つめ直し、日々の実践を振り返るきっかけを提供します。

本セミナーでは、実際に発生した研究不正事例をもとに、公正研究を進める際に気を付けるべきポイントについて解説します。また、講師が実施した研究公正アンケートから浮き彫りになった研究現場における研究公正の実態と課題についても取り上げます。

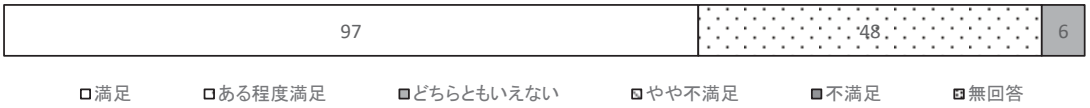
研究者、大学院生はもちろんのこと、研究支援系の事務職員やリサーチ・アドミニストレーターのみなさまの受講もお待ちしています。

https://web.cshe.nagoya-u.ac.jp/event/44/

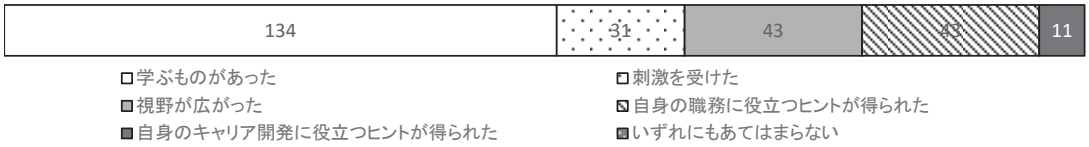
▷アンケート結果（参加者：234 名　アンケート回答者：151 名）

セミナーの内容について（単位：人）

（1）満足度はいかがでしたか。



（2）本セミナーについて、あてはまるものを選んでください。（複数選択可）



自由記述

・ヒヤリハット事例など具体的な例が多く、不正行為にはどのようなものがあるか、そして自身が不正行為を行わないためにはどのようなことに注意すればよいかをより具体的に学ぶことができました。

・悪意がない、意図がないものでも研究不正になりうる可能性があり、判断が難しい個々の事例について詳しく議論されていて興味深かったです。

・盗用が、確認、連絡不足により同じグループ内でも起こりうることが印象的でした。

・質疑応答を前半と後半に分けて細かく設けることによって、より多くの意外な角度からの不正防止などを考え、知ることができてよかったです。

◎教員免許事務担当者講習会

「教職課程事務の概要・学び方について」

講　　師：有馬 美耶子（白百合女子大学教務課 課長代理）
　　小野 勝士（龍谷大学社会学部教務課）
　　多畑 寿城（神戸女子大学・神戸女子短期大学 理事長）

日　　時：2024 年 6 月 1 日（土）13:00～17:00

開催方法：対面／オンライン／アーカイブ

対面会場：国士舘大学世田谷キャンパス

対面定員：100 名

主　　催：大学教務実践研究会

共　　催：東海国立大学機構名古屋大学高等教育研究センター[質保証を担う中核教職員能力開発拠点]

参 加 費：1 名につき 2,000 円　※名古屋大学・岐阜大学所属の方は無料です。

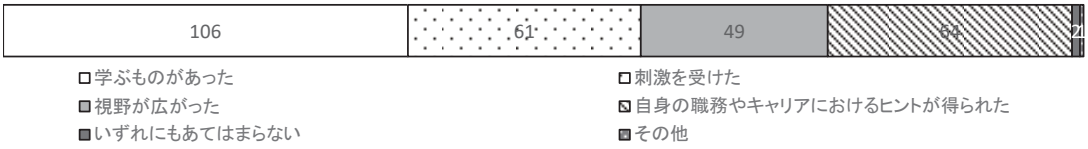
概　　要：6 月 15 日（土）開催予定の教務系初任者向け講習会のプレ企画です。年度が変わり、人事異動に伴い、教職課程の担当となった方が多くおられると思います。今後、教職課程の事務を担当するにあたり、この業務の概要をつかむとともに、教職課程事務に関する知識をどのように獲得していくのかについて、参考となる書籍やウェブサイト、今年度開催が予定されている各種講習会等を紹介します。またこの業務では他大学に相談できるネットワークが形成されており、ネットワーク活用の仕方や活用上の注意点について、3 者の対談形式にて、対面参加者の皆さんからの質問を交えつつ進めていきたいと思います。

https://web.cshe.nagoya-u.ac.jp/event/45/

▷アンケート結果（参加者：290 名　アンケート回答者：122 名）

講習会の内容について（単位：人）

（1）本講習会について、あてはまるものを選んでください（複数回答可）。



（2）本講習会の内容水準はいかがでしたか。

自由記述

・担当業務のために何を勉強するべきかがわかり、モチベーションが上がりました。「やらない仕事はあるけど、知らなくていい仕事はない」がとても響きました。

・セミナーでの有馬さんのお話や多畑さんや小野さんからいただく情報は、本を読むだけではわからないことが多く、また、実例やご経験からのお話等には共感を持つ点と新たな学びがあり、あっという間に時間が過ぎました。

・膨大な量の勉強をみなさんはどのように身に付けていっているのか気になっていましたので、有馬さんの教職事務知識の身に付け方を教わることができ、とても有意義な時間でした。紹介していただいた本を参考に勉強していきたいと思います。

・みなさま、日々の業務に加えて、知識構築をしっかりされており、経験値の違いだけではなく、そのような努力をされておられる事を感じ、向上心を持たなければと背筋が伸びる思いでした。

・東京開催の回数を増やしていただきたいです。

◎大学教務実践研究会セミナー

「教務系職員初任者向け講習会」

講　　師：宮林 常崇（東京都立大学理系管理課 課長〔学務課長兼務〕／公立大学協会事務局 参与）

満田 清恵（中京大学教学部教務センター 係長）

小野 勝士（龍谷大学社会学部教務課）

多畑 寿城（学校法人行吉学園〔神戸女子大学・神戸女子短期大学〕 理事長）

有馬 美耶子（白百合女子大学教務課 課長代理）

日　　時：2024 年 6 月 15 日（土）10:30〜17:00
開催方法：対面／オンライン／アーカイブ
対面会場：名古屋大学東山キャンパス文系総合館カンファレンスホール／
　　アクティブラーニングスタジオ
対面定員：30 名ずつ
主　　催：大学教務実践研究会
共　　催：東海国立大学機構名古屋大学高等教育研究センター[質保証を担う中核教職員能力開発拠点]
参 加 費：1 名につき 2,000 円　※名古屋大学・岐阜大学所属の方は無料です。
概　　要：教務系の業務では、法令や規則規程が想定していない事案が少なからず生じます。この場合、類似事例に照らす等により現場で都度判断せざるを得ないのですが、「教務事務の基本的な考え方」が十分に身についていないと、事例を誤って解釈してしまう可能性があり、円滑に対応することができません。

この講習会では、教務・教職事務初任者を対象として、担当業務を円滑に遂行するために求められる知識を身につけるとともに、今後の制度改正に対して、自ら学ぶために必要なスキルを身につけることを目指します。

プログラム：
10:30　分科会 1
　1a）教務事務の基礎① 法令・制度の理解〜根拠を実務に活かす〜
　　担当：宮林
　1b）今後の教職課程事務を担う　これからの光る君へ
　　担当：有馬・多畑
12:30　意見交換など（現地参加・オンライン参加のみ）
14:30　分科会 2
　2a）教務事務の基礎② 学生対応の心構え
　　〜未然防止を意識した聴き方、伝え方を考える〜
　　担当：満田
　2b）教務課程事務に関する基本用語の理解について
　　担当：小野
16:30　意見交換など（対面・オンライン参加のみ）
https://web.cshe.nagoya-u.ac.jp/event/50/

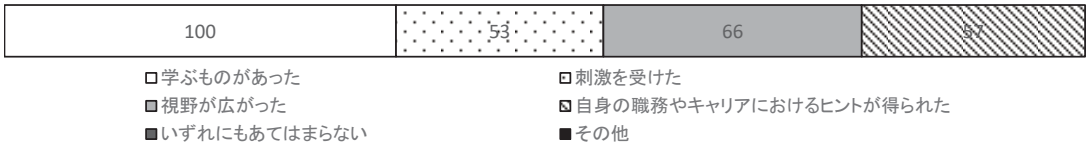
参加者数：497 名

▷アンケート結果

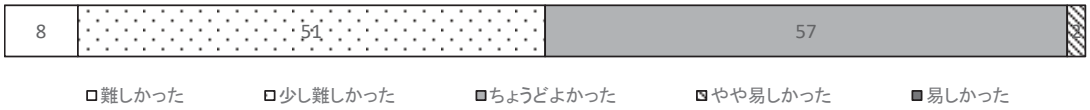
【分科会 1a】（参加者：169 名　アンケート回答者：118 名）

分科会の内容について（単位：人）

（1）本分科会について、あてはまるものを選んでください（複数回答可）



（2）本分科会の内容水準はいかがでしたか。



自由記述

・具体例を交えながらの説明だったのでとてもわかりやすかったです。

・教務担当として知っておくべきことの基礎が学べました。

・取り上げる例題も内容もとてもわかりやすかったです。自身に足りていない知識も認識できましたので、いい機会になりました。

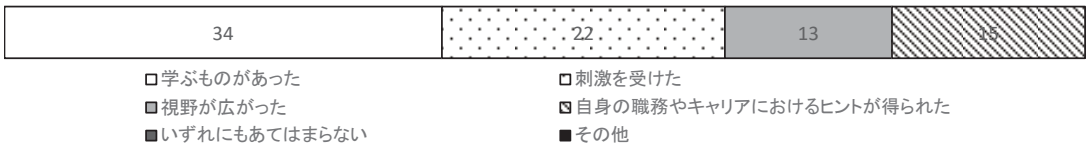
・声がよく通り、話も簡潔で、とても聞きやすかったです。

・法律や制度と現場の業務がどのようにつながっているかを改めて理解、納得することができました。クイズでは自分の理解の精度を改めて考えることができました。

【分科会 1b】（参加者：71 名　アンケート回答者：39 名）

分科会の内容について（単位：人）

（1）本分科会について、あてはまるものを選んでください（複数回答可）



（2）本分科会の内容水準はいかがでしたか。

自由記述

・講師お二方の経験に沿って、今後どのように教職事務に携わっていくのかというイメージができてよかったです。

・表現、話し方、スライド、どれもとてもわかりやすく、大変有意義な時間でした。

・体験談に基づいていたので、最初は誰もが新人でも、いつかは経験が身につきこなせるようになることがわかり心強かったです。

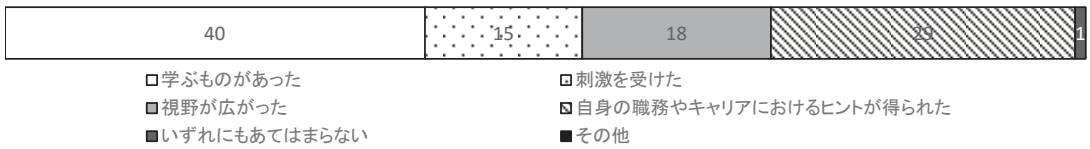
・対面参加で、他の大学の方と名刺交換やお話をうかがうことができてよかったです。

・もしもう少し時間があるようでしたら、他の参加者の方のケーススタディも伺ってみたかったです。

【分科会 2a】（参加者：123 名　アンケート回答者：55 名）

分科会の内容について（単位：人）

（1）本分科会について、あてはまるものを選んでください（複数回答可）



（2）本分科会の内容水準はいかがでしたか。

自由記述

・初任者向けでわかりやすかったです。

・非常にわかりやすかったです。過去の事例等を身近なことに感じられました。

・オンライン参加者もフォームに回答する機会をいただけたので自分も参加していることを実感できよかったです。

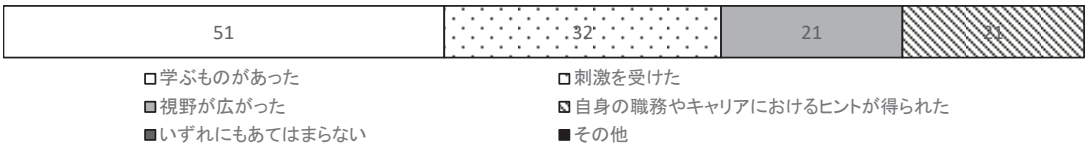
・ケーススタディで、この場合はどうすればいいか話し合いながら考える時間があった点がよかったです。自分では思いつかなかった考えも聞けたため、新たな気づきや発見につながりました。

・ワークをもっと取り入れてほしかったです。

【分科会 2b】（参加者：97 名　アンケート回答者：55 名）

分科会の内容について（単位：人）

（1）本分科会について、あてはまるものを選んでください（複数回答可）



（2）本分科会の内容水準はいかがでしたか。

自由記述

・解説が非常に丁寧で、初任者にもわかりやすい内容でした。ありがとうございます。

・録画を止めてからのお話しがとても面白かったです。対面で参加できなくて残念でした。

・参考になる資料をたくさん紹介していただけてよかったです。

・教職事務について、用語や仕組みのところから学ぶことができてよかったです。ここから、知識を深めるきっかけとなったと思います。

・グループワークも時々入れてほしいです。

◎経済学教育研究会セミナー

「アメリカの大学における学問の自由の変容」

講　　師：宮田 由紀夫（関西学院大学国際学部国際学科 教授）

日　　時：2024 年 9 月 13 日（金）13:00～15:00

開催方法：対面

開催場所：名古屋大学東山キャンパス文系総合館 5 階 509 会議室

定　　員：15 名

対 象 者：経済学関連教員

概　　要：アメリカにおける大学の学問の自由は、テニュア制度と密接に結びついて発展してきた。大学が政府（国防省）や企業（産学連携）との関係を強化すると、学問の自由が脅かされることになる。さらに、保守派政治家や大口寄付者の干渉も顕著になり、テニュア制度も脅かされている。一方、キャンパスでもポリティカルコレクトネスの行き過ぎなど、学生自身が学問の自由を狭めるケースも見られる。アメリカの大学が直面する学問の自由の問題から、日本の大学が学ぶことは何か議論したい。

講演要旨：

アメリカの大学における研究成果発表の自由は、国家安全保障のために制限を受けることがあった。大学側は軍事機密研究を行うことを否定してはいないが、初めから機密指定をして特定の施設で行い、キャンパスでの研究は国防省からの資金であっても成果の公開できる研究と区別することを望んであり、それが実行されている。

産学連携においても、スポンサー企業の圧力から不都合な結果の公表の制限を受けることがあった。大学はここでも成果を公表できない研究資金は受け取らない方針であるが、学科を丸抱えする包括的連携では、企業が研究テーマにまで影響を及ばす可能性があるので注意が必要である。

一方、産業界と政治家は、環境規制の基になる研究を行っている大学の研究者に対して、ハラスメントを行っている。研究者がそのようなテーマに取り組まなくなれば、学問の自由の侵害である。さらに、保守派政治家が大学はリベラル派の巣窟だとして社会的に批判を行っている。州立大学におけるテニュア制度を否定する動きもある。また、州立大学への予算を減らすことで、テニュア対象になる教員を減少せざるを得なくなっている。テニュア制度は学問の自由を支えるために重要な役割を果たすが、危機に瀕している。

ガザ紛争において反イスラエルのデモを行った学生に対する、大学側の対応が甘いとして、連邦議会（下院）が大学を批判している。本来、切迫した危険を生じさせないならば、過激な発言であっても発言の内容だけで違法と判断することはできないはずなのだが、議会が圧力をかけ。学長が辞任に追い込まれる事態がおきている。一方、学生の側でも自分が不愉快に思う講演会は物理的に開催不能にして良いと思う意見をもち、他人の言論の自由を奪おうとしている。キャンパス全体で寛容の精神が欠けてしまっている。

質疑応答では、国家安全保障や産学連携のメリットと、それによって学問の自由が侵害されるデメリットを比較すべきなど、活発な議論が行われた。

https://web.cshe.nagoya-u.ac.jp/event/61/

◎大学教務実践研究会セミナー

「大学院教務の現在地」

講　　師：宮林 常崇（東京都立大学理系管理課 課長〔学務課長兼務〕／公立大学協会事務局 参与）

大津 正知（茨城大学教学イノベーション機構／情報戦略機構 助教）

日　　時：2024 年 9 月 14 日（土）10:30～12:00

開催方法：対面

対面場所：名古屋大学東山キャンパス文系総合館５階アクティブラーニングスタジオ
定　　員：20 名
対 象 者：大学職員
※経験年数は問いませんが、①大学院教務を担当した経験のあること、②事前課題に取り組むこと、の２点を要件とします。
主　　催：大学教務実践研究会
共　　催：東海国立大学機構名古屋大学高等教育研究センター[質保証を担う中核教職員能力開発拠点]
概　　要：令和５年 10月に設置された中央教育審議会大学分科会高等教育の在り方に関する特別部会をはじめ、様々な場で、研究力向上や国際化、リスキルといった視点から大学院教育の充実についての議論がなされています。こうしたなか、各大学の現場で大学院教育を支える事務職員の SD が早晩大きな課題となることが予想されます。

一方、大学院教育を支える教務は、どの大学も学部教育に比べて担当者が少なく、情報交換や能力開発の機会も多くありません。また、大学院生としての経験がない事務職員にとって、教員と共通認識をもつのに時間を要する業務であるという側面も、大学院教務の課題の１つと言えます。

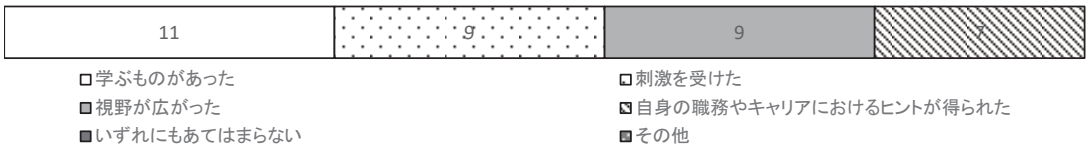
こうした状況をふまえ、本プログラムでは、大学院教務を担う事務職員の皆さんと、その現在地を確認する作業を行いたいと考えています。具体的には、大学院教務が担う主な業務とその課題について講師による論点整理を行ったのち、参加者それぞれが大学院教務における実務上の課題を持ち寄り、グループに分かれて議論することで、それぞれの現場が抱える課題に取り組むための手がかりとします。

https://web.cshe.nagoya-u.ac.jp/event/54/

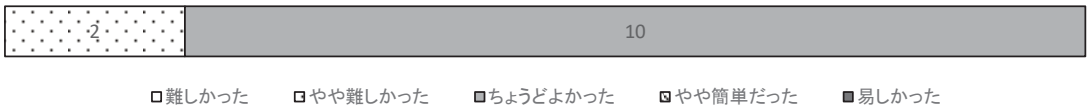
▷アンケート結果（参加者：21 名　アンケート回答者：12 名）

セミナーの内容について（単位：人）

（1）本セミナーについて、あてはまるものを選んでください（複数回答可）。



（2）本セミナーの内容水準はいかがでしたか。



自由記述

・他大学の状況を伺う機会がなかったのでとても有意義でした。

・セミナーの形にはまらず、気兼ねなく意見交換ができたことが素晴らしかったです。また、グループワーク前の導入部分も（大学院の現在・問題点や起源など）とても勉強になりました。

・大学院教務という視点でこれまでの流れや現状を整理し、課題等を学ぶことができました。また、他大学の皆さんと情報交換・共有ができよかったです。

・事前課題での質問内容がよかったです。他大学院の状況はお伺いしたい内容ばかりでした。

・時間的に難しかったと思いますが、グループデスカッション時間がもう少しほしかったです。また、最後に各グループから一言ずつでも情報共有があるとなおよかったと思いました。

◎教員免許事務担当者講習会

「事例から学ぶトラブル事案への対応」

講　　師：小野 勝士（龍谷大学社会学部教務課）
　　多畑 寿城（神戸女子大学・神戸女子短期大学 理事長）
　　有馬 美耶子（白百合女子大学教務課 課長代理）

日　　時：2024 年 9 月 14 日（土）13:30～17:00

開催方法：対面／オンライン／アーカイブ

対面場所：名古屋大学東山キャンパス文系総合館カンファレンスホール

対面定員：40 名

主　　催：大学教務実践研究会

共　　催：東海国立大学機構名古屋大学高等教育研究センター[質保証を担う中核教職員能力開発拠点]

参 加 費：1 名につき 2,000 円／日　※名古屋大学・岐阜大学所属の方は無料です。

概　　要：質保証を担う中核教職員能力開発拠点事業の一環として今年 5 月に『事例から学ぶ、事例でわかる大学教職課程事務』（ナカニシヤ出版）を刊行いたしました。6 月の講習会に引き続き、このテキストを用いて講習会を開催します。第 1 章事例 2「一般的包括的な内容を含む科目の罠」をもとに「一般的包括的内容を含む科目」の事例研究を行います。一般的包括的内容を含む科目の修得方法について、令和 6 年 4月4日付事務連絡により解釈変更がなされました。事務連絡記載の「含有事項」「複合事項」について検討したいと思います。対面会場におきましては、参加者の皆さんが経験したヒヤリハット事例をもとに意見交換します。

プログラム：

13:30　第 1 部：対面／オンライン

15:50　第 2 部：対面

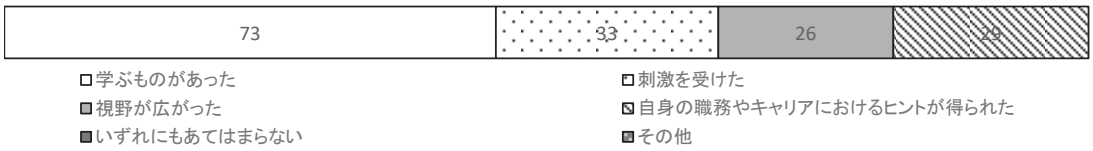
グループごとに自己紹介、意見交換を行い、大学間のネットワーク形成を図ります。また、今回の講習会において、踏み込んで聞きたい内容について、登壇者との質疑応答を行います。

https://web.cshe.nagoya-u.ac.jp/event/55/

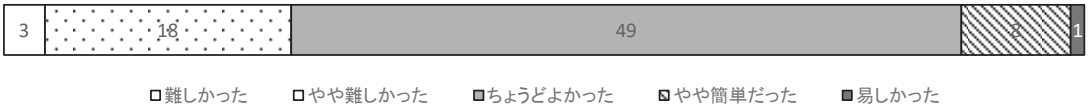
▷アンケート結果（参加者：269 名　アンケート回答者：79 名）

講習会の内容について（単位：人）

（1）本講習会について、あてはまるものを選んでください（複数回答



（2）本講習会の内容水準はいかがでしたか。



自由記述

・オンラインも含め何度も参加をしていますが、講師陣からは毎回違った経験談が出てくることから、教職の仕事というものの複雑さや奥深さが非常に感じられました。

・有馬さんの具体的な事例と小野さんの法令の解説のセットが、今まで以上に教職の法令に対する考え方を理解する助けになりました。

・5 月から教職を担当することになりました本学の職員が、一般的包括的内容を含んだ科目についてきちんと理解できる、また、本学での今後の対応等考えることができる内容であったことから、初任者に対してもわかりやすく、中堅者にとっては改めて確認できる機会になったと思います。

・具体的な事例をあげて、実際に業務をしている方の目線で解説していただけるのでとてもわかりやすかったです。実際に自分が同じような対応をする場合にどうすればよいかがイメージしやすかったです。

・事前に受け付けた質問事項の回答集などあれば、共有してもらえたら嬉しいです。

◎教育基盤連携本部高等教育研究システム開発部門シンポジウム

「未来／AI 社会のキャリアに向けた大学教育のカリキュラム」

講　　師：美馬 のゆり（公立はこだて未来大学システム情報科学部 教授）

杉谷 祐美子（青山学院大学教育人間科学部教育学科 教授）

福留 東土（東京大学大学院教育学研究科 教授）

鈴木 泰博（名古屋大学大学院情報学研究科 准教授）

日　　時：2024 年 10 月 3 日（木）13:00〜17:15

開催方法：対面／オンライン

対面場所：名古屋大学東山キャンパス環境総合館レクチャーホール

定　　員：対面 80 名、オンライン 500 名

対 象 者：高等教育関係者

主　　催：名古屋大学教育基盤連携本部高等教育システム開発部門

共　　催：名古屋大学高等教育研究センター／

東海国立大学機構アカデミック・セントラル／大学 IR×DX 研究会

概　　要：人生 100 年時代と称されるように私たちのキャリアモデルは今後大きく変わり、特に急速にプログラム変わる労働市場に対応する必要があると言われています。AI が身近に感じられる昨今、一部のホワイトカラー職の消失は実感を伴う予測になりつつあります。そして現在のところ、将来的に消失しない職業は、人間ならではのスキル、例えば、創造性、共感、問題解決、対人関係、そして身体的作業を中心とした職業に集約されると考えられています。

このような大きな変革期において、大学生はどのような知識や技能を身に付ければよいのでしょうか？そのために大学は何をどのように教えればよいのでしょうか？技術革新が著しい社会では、いっそうの教養教育、STEAM 教育、汎用能力の習得、経験学習の強化などが必要だとも言われています。そうではなく、既存の枠にとらわれない全く新しい発想のカリキュラムが求められるのかもしれません。このシンポジウムでは、AI が当たり前に使われる社会での大学教育の在り方に主な焦点を当て、議論を深めたいと思います。

プログラム：

13:00　趣旨説明

加藤 真紀（名古屋大学高等教育システム開発部門 教授）

13:05　主催者挨拶

藤巻 朗（名古屋大学 副総長）

13:15　基調講演

「AI の社会的影響と教育の転換」

美馬 のゆり（公立はこだて未来大学システム情報科学部 教授）

14:05　講演 1

「大学教育への期待とカリキュラム編成の実際」

杉谷 祐美子（青山学院大学教育人間科学部教育学科 教授）

14:55　講演 2

「多様な学生が主体的に学び合う場としての大学教育を目指して」

福留 東土（東京大学大学院教育学研究科 教授）

15:35　講演 3

「コモンベーシックスとしてのアルゴリズム的思考」

鈴木 泰博（名古屋大学大学院情報学研究科 准教授）

16:25　パネルディスカッション

モデレーター：安田 淳一郎（名古屋大学高等教育システム開発部門 准教授）

丸山 和昭（名古屋大学教育発達科学研究科 准教授）

17:25　閉会挨拶

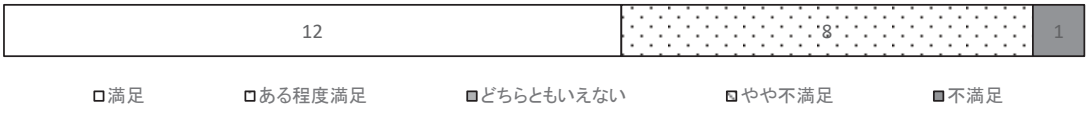
北 栄輔（名古屋大学高等教育システム開発部門 部門長）

https://web.cshe.nagoya-u.ac.jp/event/63/

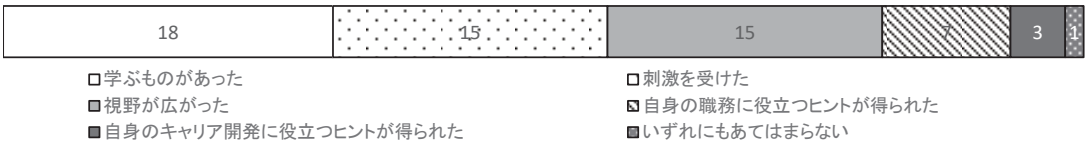
▷アンケート結果（参加者：210 名　アンケート回答者：21 名）

シンポジウムの内容について（単位：人）

（1）満足度はいかがでしたか。



（2）本シンポジウムについて、あてはまるものを選んでください。（複数選択可）



自由記述

・教育工学者として、教育設計の幅広い知見を得られました。特に美馬先生のご講演は全て刺激的でした。

・パネルディスカッションの論点が興味深く、その際に各登壇者の認識を伺えたことがよかったです。

・文理融合実践のヒントを得られたのはありがたかったです。アルゴリズムのお話は普段耳にしないので、とても新鮮でした。
・ルーブリックとアルゴリズムを組み合わせて、学習内容・到達目標を分解して、学生の教育と評価に応用できればよいと思いました。

◎大学教務実践研究会セミナー
「教務系事務部門中堅者向け講習会」
講　　師：宮林 常崇（東京都立大学理系管理 課長〔学務課長兼務〕／公立大学協会事務局 参与）
大津 正知（茨城大学教学イノベーション機構 助教）
小野 勝士（龍谷大学社会学部教務課）
多畑 寿城（学校法人行吉学園〔神戸女子大学・神戸女子短期大学〕理事長）
有馬 美耶子（白百合女子大学子大学教務課 課長代理）
日　　時：2024 年 10 月 19 日（土）10:30～16:30
開催方法：対面／オンライン／アーカイブ
対面会場：名古屋大学東山キャンパス文系総合館カンファレンスホール／アクティブラーニングスタジオ
対面定員：30 名ずつ
対 象 者：教務／教職事務を 1 年以上経験している、または 1 年の流れを把握できている方であれば理解できる内容です。
主　　催：大学教務実践研究会
共　　催：東海国立大学機構名古屋大学高等教育研究センター[質保証を担う中核教職員能力開発拠点]
参 加 費：1 名につき 2,000 円／日　※名古屋大学・岐阜大学所属の方は無料です。
概　　要：教務系事務部門の中堅職員には国内の高等教育情勢や大学政策、規程、全学的会議の議論内容、自大学の教育理念や内容などの理解を踏まえた上で学内諸会議において、適切な資料を作成・提示することが求められます。この講習会では、教務・教職事務の中堅者を対象として、部署内の他の職員や他部署からの相談案件に対して、状況を適切に理解し、一定の判断を行うことができるスキルを身につけることを目指します。

プログラム：
10:30　分科会 1　対面／オンライン

1a）大学設置基準改正対応の現在地／
カリキュラム検討に関わる職員に求められる知識・理解
担当：宮林・大津

1b）全学的に教職課程を実施する組織について～ガイドラインの確認、事例報告～
担当：有馬・多畑・小野

14:30　分科会 2　対面

2a）教務系職員の能力開発～職場で誰がどのように育成するか～
担当：宮林・大津

2b）教職課程認定大学実地視察報告書から学ぶ
担当：有馬・多畑・小野

https://web.cshe.nagoya-u.ac.jp/event/57/

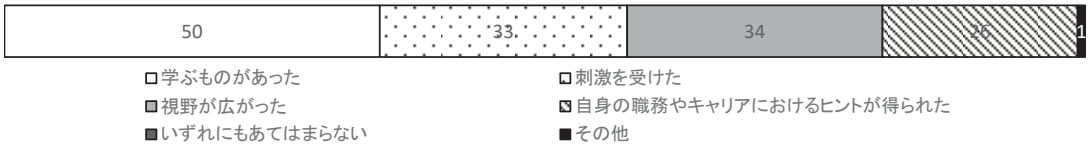
参加者数：304 名

▷アンケート結果

【分科会 1a】（参加者：85 名　アンケート回答者：52 名）

分科会の内容について（単位：人）

（1）本分科会について、あてはまるものを選んでください（複数回答可）



（2）本分科会の内容水準はいかがでしたか。

自由記述

・過去の経緯も踏まえ説明頂いたので、非常にわかりやすかったです。

・講師の話がコンパクトでわかりやすかったです。

・教務の原点であるカリキュラムやアカデミックカレンダーが復習でき、大学設置基準と認証評価との関連性が理解できてよかったです。

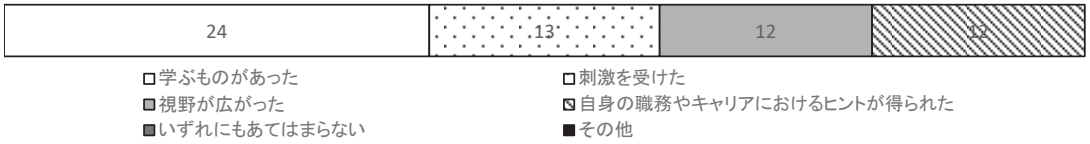
・何度か宮林さんのオンライン研修に参加させていただきましたが、情報の質およびプレゼンテーションの上手さに毎回感心いたします。今回も学びの多い充実した内容でした。

・宮林さんの講座は、話し方・資料とともに非常に理解しやすいので、もっと長めに時間をとって細かく説明してほしいです。全体的にもっと長くてもよいと思います。

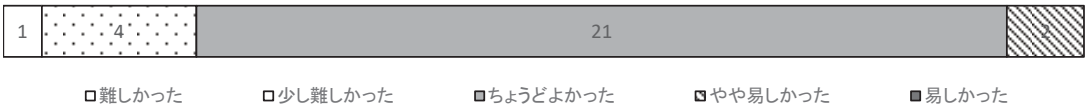
【分科会 1b】（参加者：56 名　アンケート回答者：28 名）

分科会の内容について（単位：人）

（1）本分科会について、あてはまるものを選んでください（複数回答可）



（2）本分科会の内容水準はいかがでしたか。



自由記述

・教職課程組織の運営のあり方について考えるきっかけとなりました。また、どのような経緯で運営組織のあり方が課題となっていったかも知ることができました。

・講師としてお話いただいた 2 大学の組織が、センターと委員会だったため、それぞれの長所と短所が非常にわかりやすかったように思いました。

・事例報告による形式であったことがよかったです。「他大学の状況を知る」ことが重要とおっしゃっていましたが、本当にそのとおりだと思います。

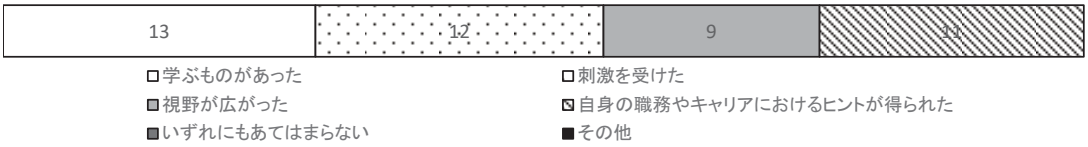
・対面の講習会には行けない状況なので、オンライン・アーカイブがあり大変助かります。ご準備いつもありがとうございます。

・本学でも教職課程の運営に係る全学的組織を整備しなければならないことを改めて実感しました。

【分科会 2a】（参加者：29 名　アンケート回答者：15 名）

分科会の内容について（単位：人）

（1）本分科会について、あてはまるものを選んでください（複数回答可）



（2）本分科会の内容水準はいかがでしたか。

自由記述

・自身や自身の勤務校において同様の課題を抱えていたため、お話を聞いて、現状を整理することができました。私自身、自分を「大学職員」として日頃より勤務していますが、本学の職員の中において「事務職員」として認識している者がいるのではないかと気づきました。職員の能力開発においては、他の管理職に本日の研修会で教えていただいたことを共有しながら、職場全体として解決の糸口を模索していきたいです。

・3 名の講師が各々のアプローチで、多角的に考えるきっかけになりました。また、対面でグループワークでの意見交換ができたのもよかったです。同じ悩みの共有やアプローチ等を知ることができました。

・他大学の方も、私と同じような悩みを抱えながら部下育成に対応されていることが印象に残りました。

・部署の業務でなく、大学職員としてのスキルは誰から教わるのか、これを知りたく参加しました。同グループの方とも意見交換ができよかったです。

・時間が限られているところで難しいですが、あと 30 分あるとじっくり講師の先生方のお話を聞いたり、参加メンバーと話す時間が取れたのかな、と思いました。

【分科会 2b】（参加者：34 名　アンケート回答者：20 名）

分科会の内容について（単位：人）

（1）本分科会について、あてはまるものを選んでください（複数回答可）

（2）本分科会の内容水準はいかがでしたか。

自由記述

・実地視察で確認されることを再確認できてよかったです。とくに施設・設備についてはなかなか目が行き届いておらず、こちらも随時改善が必要と感じました。

・各大学における具体的な事例をお聞きすることができ、業務改善のヒントになりました。また、自身の所属大学のことですら知らないこと・わからないことがあり、グループの方にお答えできない項目がありましたので、勉強するきっかけになりました。
・グループごとに分かれての意見交換で、他大学の実情を知ることができました。特に教育実習の訪問指導や履修カルテなど、実地視察の項目では本学が改善を行いたいと考える内容を知ることができました。
・他大学との意見交換の時間が多かったので、いろいろ聞けて参考になりました。同じ課題を抱えていらっしゃり共感がもてました。
・グループワークにて、各大学の課題や改善点について、共感できる点や本学で取り入れられそうなことが共有できた点がよかったです。また、対面参加が初回のため緊張していましたが、和気あいあいとした雰囲気でよかったです。

◎授業設計セミナー

「授業設計セミナー2024」

講　　師：安部 有紀子（名古屋大学高等教育研究センター 准教授）
　　東岡 達也（名古屋大学高等教育研究センター 研究員）

日　　時：2024 年 10 月 26 日（土）10:30～16:15
　　2024 年 11 月　9 日（土）10:30～16:15
　　2024 年 12 月　5 日（木）16:30～19:45
　　※本セミナーは全 3 日間への参加が必須です。

開催方法：オンライン（Zoom ミーティング）／対面（模擬授業の希望者のみ）

対面会場：名古屋大学東山キャンパス文系総合館 5 階アクティブラーニングスタジオ

定　　員：10 名

対 象 者：大学に在籍している大学院生、ポスドク（博士研究員）、非常勤講師等

主　　催：名古屋大学高等教育研究センター[質保証を担う中核教職員能力開発拠点]

概　　要：名古屋大学高等教育研究センターでは、将来大学教員を目指す大学院生を対象にした大学教員準備講座や、実務家教員を対象とした授業実践のセミナー等に取り組んできました。このたび、過去の受講生から特にニーズが高い「授業設計セミナー」を、全国の大学院生・ポスドクのみなさまを対象に開始します。本セミナーでは、受講生と講師、受講生同士の双方向のやり取りを基本にしながら、授業実践のスキル・能力を身に付けることを目指していきます。将来、大学教員を目指している大学院生・ポスドクのみなさま、この機会にふるってお申し込みください。

プログラム：

10 月 26 日（土）

10:30　第 1 回 授業デザインとは何か

13:00　第 2 回 シラバス作成の理論と実践

14:45　第 3 回 学習の科学と多様な教授法

11 月 9 日（土）

10:30　第 4 回 アクティブラーニングの技法・授業デザインシートの作成

13:00　第 5 回 パフォーマンス評価実践

14:45　第 6 回 合理的配慮について

12 月 5 日（木）

16:30　第 7 回、第 8 回 模擬授業（対面／オンライン）、全体ふりかえり

【事前学習】

本セミナーでは、授業を行うための実践的な内容を身に付けるため、多様な授業手法を受講者自身が実際に体験していきます。そのため、次のような時間外学習が必要です。

・各回の対面授業までに指定された 20 分程度の講義動画を視聴

・シラバス案の作成

・授業デザインシートの作成

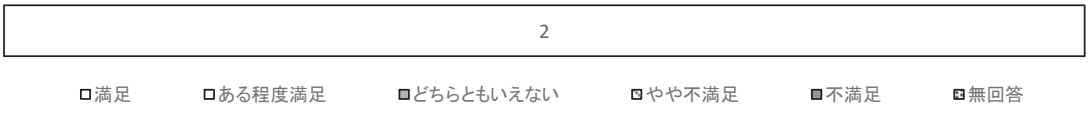
・模擬授業の準備

https://web.cshe.nagoya-u.ac.jp/event/65/

▷アンケート結果（参加者：2 名　アンケート回答者：2 名）

セミナーの内容について（単位：人）

（1）満足度はいかがでしたか。



（2）本セミナーの内容水準はいかがでしたか。

◎大学教務実践研究会セミナー

「大学教育の国際化 基礎知識セミナー」

講　　師：岩田 剛（愛媛大学）
　　大竹 秀和（立教大学）
　　塩川 雅美（龍谷大学）
　　鈴木 悠（東京音楽大学）
　　前河 泰正（大阪国際大学）
　　宮林 常崇（東京都立大学）
　　村上 健一郎（横浜国立大学）

日　　時：2024 年 12 月 13 日（金）13:00～17:15

開催方法：対面

開催場所：名古屋大学東山キャンパス文系総合館

定　　員：40 名

主　　催：大学教務実践研究会、東海国立大学機構名古屋大学高等教育研究センター[質保証を担う中核教職員能力開発拠点]

概　　要：このセミナーでは、学生の海外派遣や留学生の受け入れといった大学教育の国際化に関する業務について、どの大学でも活用できる標準的なケースを用いて、必要な知識・理解を基礎から丁寧に解説します。併せて、セミナーでの学びを実際の業務に活かすためのワークや他大学の職員とのつながりを構築できる時間も設定します。

大学の国際化は、国際部門だけではなく、教務やキャリア支援、総務、人事、施設など、様々な部門の業務に影響があります。そのため、これからの大学職員にとって、国際化に関する基礎的な知識・理解は必須のものといえるでしょう。このセミナーは、大学教育の国際化に関する業務で日々苦労している部署の方はもちろんのこと、大学職員としてステップアップしたいすべての方を対象としています。

プログラム：

13:00　第 1 部 講習会
　　大学教育の国際化に関する業務のうち留学生の受け入れを中心に、基礎から丁寧に解説します。

14:45　第 2 部 ワークショップ
　　次のテーマの中から関心のあるものを事前に 1 つ選んでいただきます。どのテーマも業務知識や経験ゼロで参加できます。

①海外派遣プログラム（短期）の企画

②留学生受け入れの環境整備

③各種証明書（単位認定など）の解読

16:30　第 3 部 情報交換会

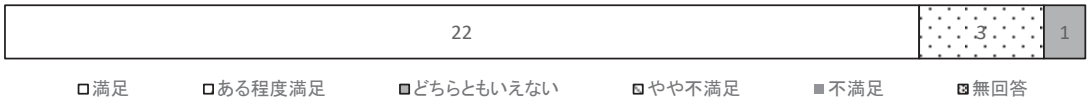
担当者を中心に小グループを複数つくり、お互いの業務上の悩みや経験をシェアします。

https://web.cshe.nagoya-u.ac.jp/event/75/

▷アンケート結果（参加者：42 名　アンケート回答者：26 名）

セミナーの内容について（単位：人）

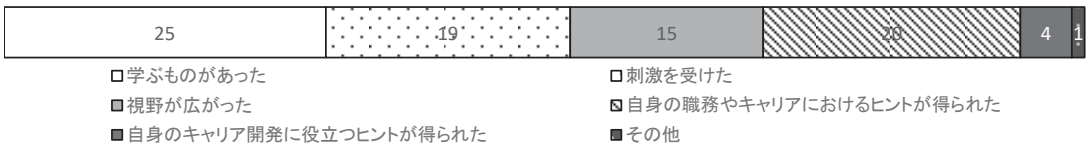
（1）第 1 部（基礎知識講習会）の満足度はいかがでしたか？



（2）第 2 部（ワークショップ）の満足度はいかがでしたか？

（3）第 3 部（情報交換会）の満足度はいかがでしたか？

（2）本セミナーについて、あてはまるものを選んでください。（複数回答可）



自由記述

・大変わかりやすい説明であり、すべての内容が参考になりました。これまで国際業務に関するセミナーや研修を県内で参加する機会がありませんでしたので、今後も継続開催を希望いたします。

・国際業務を担当したばかりですが、今後業務を進めていく上で大変参考になりました。

・基礎知識を自己努力・自己理解で身に着けさせる風潮が学内にあるため、基礎力をしっかりと学ぶ機会をつくり共通認識とすることの重要性を感じました。今回の学びをいかし、勉強会をするなどを行いた

いと思います。また、ワークショップでおこなったワークはプログラム担当者の力量形成に有用だと感じましたので、チーム研修でも取り入れていきたいと思いました。

・留学生の受け入れを主に担当しているので、講習会の受け入れに関する内容については、自身の部署にもかなりマッチするものでした。今後の人事異動の際の引き継ぎ資料の参考にさせていただきます。

・グループワークでの学びや気づきが多かったので、メンバーを変えてもう1セッションあると更によかったと思いました。

◎大学教務実践研究会セミナー

「教務課題検討フォーラム」

講　　師：宮林 常崇（東京都立大学）
大津 正知（茨城大学）
有馬 美耶子（白百合女子大学）
竹中 喜一（近畿大学）
小野 勝士（龍谷大学）
満田 清恵（中京大学）
多畑 寿城（神戸女子大学／神戸女子短期大学）
徳丸 由紀（日本文理大学）

日　　時：2024年12月14日（土）10:00～16:30

開催方法：対面／オンライン／アーカイブ

対面会場：名古屋大学東山キャンパス全学教育棟A館

主　　催：大学教務実践研究会／東海国立大学機構名古屋大学高等教育研究センター[質保証を担う中核教職員能力開発拠点]

参 加 費：1名につき2,000円 ※名古屋大学／岐阜大学所属の方は無料です。

概　　要：大学教務実践研究会と名古屋大学高等教育研究センターとは、教務の現場における事例を持ち寄り、それを整理した上で実践的な知識まで高めることを目的に、協働して活動しています。この教務課題検討フォーラムは、今日的な課題をとりあげ、ともに議論を深めていく場として設定しています。今年のフォーラムでは、第4期機関別認証評価、中央教育審議会高等教育の在り方に関する特別部会などの政策動向、法令が関係する教職課程業務、学生支援、大学院教務をテーマとする分科会を設定し、実践的な知識を共有します。

プログラム：

10:30　　分科会1

1a）第 4 期認証評価・法令改正・政策動向を踏まえた教務部門における対応

担当：宮林・大津

1b）ケーススタディ（入学前の既修得単位の取扱い）

担当：有馬

13:15　分科会 2

2a）3 つのポリシーとアセスメントプランの見直しに向けて

担当：竹中

2b）事例で学ぶ教員免許事務（教育課程の変更届）

担当：小野

15:00　分科会 3

3a）窓口対応からはじめる教務職員の学修支援の「今」とこれから

担当：満田

3b）「教職支援」って何でしょう？

担当：徳丸

3c）自大学の大学院教務を客観視してみよう

担当：宮林・大津

https://web.cshe.nagoya-u.ac.jp/event/72/

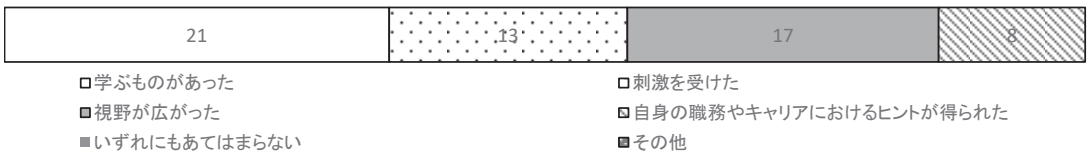
参加者数：324 名

▷アンケート結果

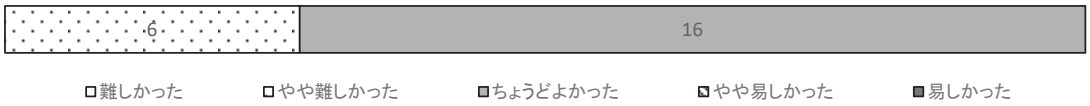
【分科会 1a】（参加者：84 名　アンケート回答者：22 名）

分科会の内容について（単位：人）

（1）本分科会について、あてはまるものを選んでください（複数回答可）



（2）本分科会の内容水準はいかがでしたか。



自由記述

・日々業務に追われているため、様々な情報を整理して理解し、今後取り組むべき業務を考える機会になりました。

・資料もわかりやすく、先生がはっきりお話くださるので、受講しやすいです。

・宮林さんは大事なことも端的に伝えてくれるので、押さえておくポイントが明確で理解しやすいです。大津さんも、「内部質保証」について丁寧に説明してくださり、少しずつではありますが理解が深まりました。いつもありがとうございます。

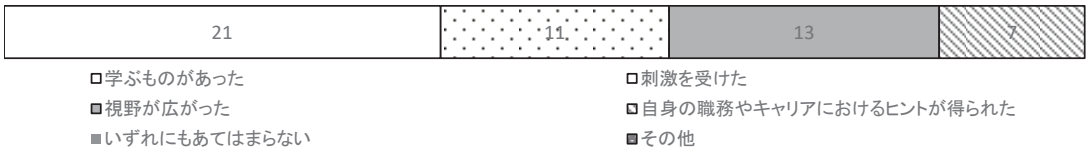
・認証評価一つでも部署間、教職員課員で理解に違いがあることから、それらを埋めていく作業も必要であると学ぶことができました。

・大学を取り巻く環境の変化を整理してご教授いただきました。また、そのことをふまえて次回の認証評価で求められる事項を確認することができました。

【分科会 1b】（参加者：60 名　アンケート回答者：23 名）

分科会の内容について（単位：人）

（1）本分科会について、あてはまるものを選んでください（複数回答可）



（2）本分科会の内容水準はいかがでしたか。

自由記述

・入学前既修得単位の基本的な考えと注意点を聞けてよかったです。

・職員として知っておかなければならない法令等改めて確認できました。また、今一度自大学のルールを考えるきっかけになりました。

・教務事務との兼ね合いについて、もう少し詳しく聞きたいと思いました。

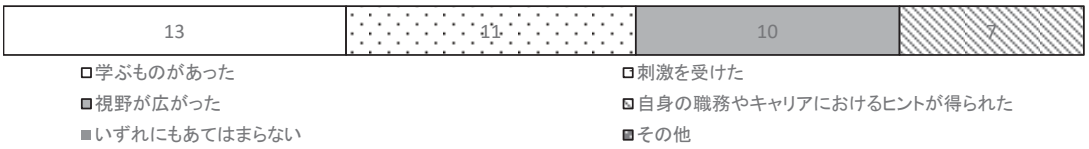
・個別対応における他の学生との公平さや公正さという視点は盲点でした。編転入学生に限らず、個別対応が多くなる学生に手を出しすぎていることは少なからずあるかなと思います。

・編入学生の既修得単位の認定については難しいと感じているので、他大学様の事例等をお伺いできる機会は大変貴重です。

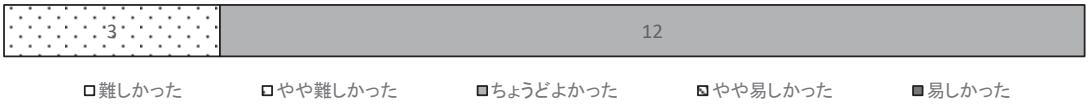
【分科会 2a】（参加者：80 名　アンケート回答者：15 名）

分科会の内容について（単位：人）

（1）本分科会について、あてはまるものを選んでください（複数回答可）



（2）本分科会の内容水準はいかがでしたか。



自由記述

・3 つのポリシーの見直しについては本学でも動いているところですが、内部質保証や改善に向けた PDCA サイクルの遂行という点でのアセスメントプラン、ツールとしてのルーブリックやカリキュラムマップ、カリキュラムツリー、ナンバリングの意義についても具体的に学べました。

・3 つのポリシーを適切に策定することにより、教育の改善につなげ、説明責任を果たすことにつながるということがわかりました。また、学習成果の評価やその活用などについても理解を深めることができました。

・途中で他大学の事例等を聞くことができて、同じ悩みを抱えていることがわかりました。また、どういった対処をしているかも聞くことができたのよかったです。

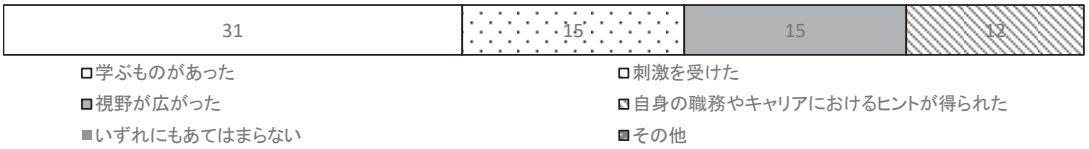
・3 つのポリシーのうち AP との整合性や、きちんと質保証ができるかが難しいと思っていましたが、その点についても解説があり助かりました。

・次のステージとして、3 つのポリシーの整合性を検証するのに、教員がどのように検証しているのかが見えてきていません。そのあたりの具体的なことを職員として把握したいので、そういったことが学べると今後の取り組みに生かせると思いました。

【分科会 2b】（参加者：60 名　アンケート回答者：35 名）

分科会の内容について（単位：人）

（1）本分科会について、あてはまるものを選んでください（複数回答可）



（2）本分科会の内容水準はいかがでしたか。

自由記述

・変更届の作成について、自分の中で誤って理解している部分もあり、それに気づくことができたのが非常によかったと思います。

・変更届について特に注意すべき点が明確になり、普段手引きを呼んでいるだけではわからない点を深く理解することができました。

・本年変更届作成の担当になり手引きだけでは理解が深まらなかったところでしたが、今回の講演を聞いて作成のメソッドを学ぶことができました。

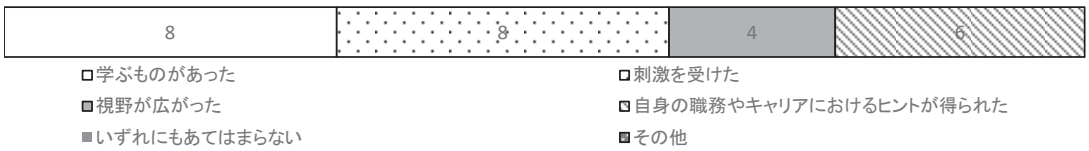
・変更届の提出が必要な時とそうでない時の違いについて、理解ができてよかったです。また、変更届を作成する際に注意が必要な部分についても知ることでき、今まで自分がやっている業務ではあるが、改めてその内容が自分の頭の中で整理ができてとてもよかったと思います。

・内容によっては 1 時間半は短いかもしれません。

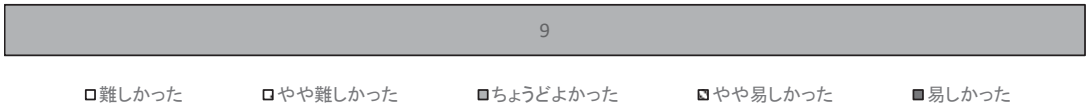
【分科会 3a】（参加者：21 名　アンケート回答者：9 名）

分科会の内容について（単位：人）

（1）本分科会について、あてはまるものを選んでください（複数回答可）



（2）本分科会の内容水準はいかがでしたか。



自由記述

・他の教務担当の方と情報共有することができ、大変貴重な機会になりました。

・他大学の教務担当職員の方と長時間お話しさせていただき、同様の悩みや気持ちを抱えている方がいる、学生のためを思って活動されている同志の方がいると感じました。自身のやる気につながったと思います。

・強いて言えば、もう少し時間がほしかったです。それぐらい充実しておりました。

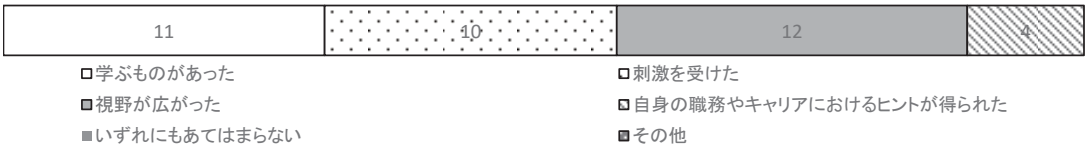
・日々、自分が窓口対応していて悩んでいることを、他大学の職員の方々と共感し合えたことがとても励みになりました。グループワークの時間を長くとっていただけたことがよかったです。難しいテーマであったこともあり、時間が足りないほど話が尽きませんでした。

・自分と同じく大学の学生支援部門で勤務しておられる方々と日常の窓口業務についてお話しすることができ、同じような悩みを抱えながら仕事をしていることがわかったのが印象的でした。

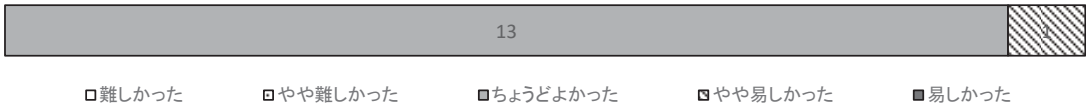
【分科会 3b】（参加者：35 名　アンケート回答者：14 名）

分科会の内容について（単位：人）

（1）本分科会について、あてはまるものを選んでください（複数回答可）



（2）本分科会の内容水準はいかがでしたか。



自由記述

・一口に教職支援と言っても、各大学で様々な取り組みを工夫されていることがわかりました。

・教職支援について、具体的な例示を聞くことができ、グループワークを通して様々な大学の現状や意見を聞くことができたのはとてもよかったです。

・小規模であっても、大規模であっても、どちらの大学も学生との結びつきが強く、教職員の方の熱意を感じました。

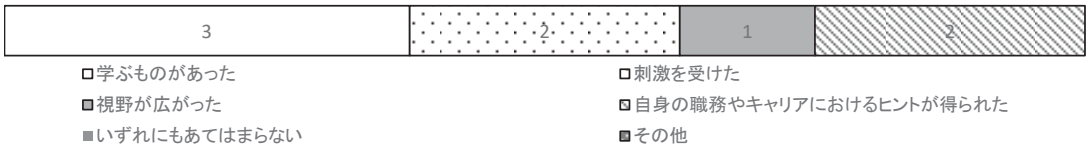
・卒業生と接点を持つという取り組みが本学では弱いように感じていましたので、様々なケースを知ることができ、参考になりました。

・もっと他大学の方々と話がしたかったです。

【分科会 3c】（参加者：16 名　アンケート回答者：3 名）

分科会の内容について（単位：人）

（1）本分科会について、あてはまるものを選んでください（複数回答可）



（2）本分科会の内容水準はいかがでしたか。

自由記述

・正直なところ、大学院業務はわからないことが多く不安しかない中で他大学の方と情報を共有でき、同じような状況の中でされている大学もあることで、安心してはいけないけど前向きになれました。

・論点整理がとてもわかりやすく、現在の状況と今後の流れを体系的に学べてよかったです。

・特に政令や答申など、解釈の正否に自身が持てずにいるので、いずれもの業務も策定に至った経緯やそれを評価する指標を「根拠」をもって「説明」できること、することの大切さを改めて感じました。

・9 月に引き続き、大学院に関する内容を開催していただいて感謝しています。今後も開催していただけると非常に嬉しいです。

・前回の大学院セミナーもそうでしたが、もっと聞きたいことなどあったため、時間が足りませんでした。大学院というテーマで開催していただくだけで、感謝しているのですが、もう少しグループワークや全体で共有する時間を取っていただけると嬉しいです。

◎大学 IR×DX 研究会第 5 回セミナー

「大学基本情報って国公立大学の学部・学科、研究科・専攻の情報を確認できる使えるデータなんですけど、使ってみたいと思いませんか？」

講　　師：和嶋 雄一郎（名古屋大学高等教育研究センター 特任准教授）

日　　時：2024 年 12 月 21 日（土）13:30～15:30

開催方法：オンライン

対 象 者：高校・大学教職員、学生、その他大学関係者

主　　催：名古屋大学高等教育研究センター[質保証を担う中核教職員能力開発拠点]

概　　要：大学で IR をやっていると他大学との比較を求められることがあります。結構困るお願いなのですが、実は、大学改革支援・学位授与機構が公開している、大学基本情報を使うと、かなり簡単に国公立大学の集計値を作成することができます。過去年度データも公開されているので、経年変化も確認できておもしろいですよ。大学で IR に従事している方、IR に興味のある方だけではなく、国公立大学のデータにご興味を持たれている高校関係者の方、とりあえず面白そうだと思った方、たくさんの方に広く楽しんでいただける内容を目指します。

内容

①大学基本情報を知る

1. 大学基本情報とは何か？
2. 大学基本情報にはどんなデータがあるのか？
3. 集計値はこんな感じで使えます

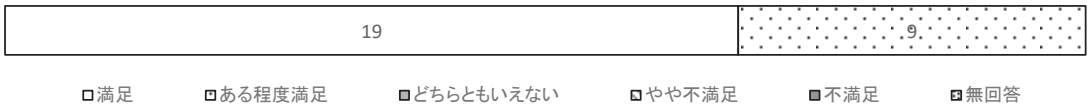
②大学基本情報を処理してみる

1. データをダウンロードする
2. 集計の前の準備：データを整形する
3. 可視化には BI ツールが便利（今回は Tableau を使います）

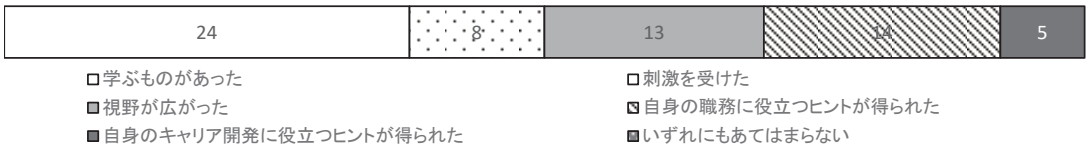
▷アンケート結果（参加者：60 名　アンケート回答者：28 名）

セミナーの内容について（単位：人）

（1）本セミナーの満足度はいかがでしたか？



（2）本セミナーについて、あてはまるものを選んでください（複数回答可）



自由記述

・大学基本情報のデータを集計・可視化できるという発想そのものが、とても新鮮でした。

・BI ツールを使うと簡単に情報が可視化できるという説明はよく聞きますが、そのためにはデータの前処理が必要であるにもかかわらず、前処理についてはあまり触れられることが無いように思います。今回のセミナーでは、前処理のところから順を追って説明いただけたのはとてもよかったと思います。

・ウェビナーの運営を知悉されている先生が講師だったため、とてもスムーズでした。内容だけでなく、運営についても学ぶ点が多かったです

・スライド資料だけでなく、使っているところを共有してくれるところがよかったです。また、冒頭のアンケートも楽しかったです。

・セミナータイトルがソフトで、参加しやすい雰囲気が滲み出ていたのでデータや統計に疎い人間ですが参加を決めました。

https://web.cshe.nagoya-u.ac.jp/event/76/

◎教員免許事務担当者講習会

「変更届提出前のチェックポイントについて」

講　　師：小野 勝士（龍谷大学社会学部教務課）
　　多畑 寿城（神戸女子大学・神戸女子短期大学 理事長）
　　有馬 美耶子（白百合女子大学教務課 課長代理）

日　　時：2025 年 2 月 8 日（土）13:00〜17:00

開催方法：対面／オンライン／アーカイブ

対面会場：共立女子大学神田一ツ橋キャンパス本館 2 階 206 講義室

対面定員：70 名

主　　催：大学教務実践研究会

共　　催：東海国立大学機構名古屋大学高等教育研究センター[質保証を担う中核教職員能力開発拠点]

参 加 費：1 名につき 2,000 円　※名古屋大学／岐阜大学所属の方は無料です。

概　　要：本講習会では、3 月末提出期限となっている教職課程の変更届の作成担当者を主な対象として、登壇者の対談、参加者からの質問を交え、提出直前の確認事項のおさらいをします。教務課題検討フォーラム（2024/12/14 開催）においても教育課程の変更届をテーマにしましたが、新手引き（令和 8 年度開設用手引き）公表前尾の内容で行いましたので、今回は新手引きに基づく内容で実施します。

　今回の第 1 部（オンライン）、新手引きに沿った手引きの解説、チェックポイントの確認と、ご参加の皆さんからの slido を通じた質問を交えつつ進めていく講師陣の対談を行います。第 2 部（対面）では、判断の難しい個別具体事例をもとにご参加の皆さんと検討する、ラウンドテーブルを開催します。

プログラム：

13:00〜15:15　第 1 部　対面／オンライン〈録画あり〉

15:30〜17:00　第 2 部　対面〈録画なし〉
　　判断の難しい個別具体事例について、登壇者の見解をもとにざっくばらんに参加者の方とともに共有・意見交換したいと思います。また、参加者の方が抱えている業務上の課題点等について、参加者相互で意見交換し、解決のヒントになる場になればと考えています。

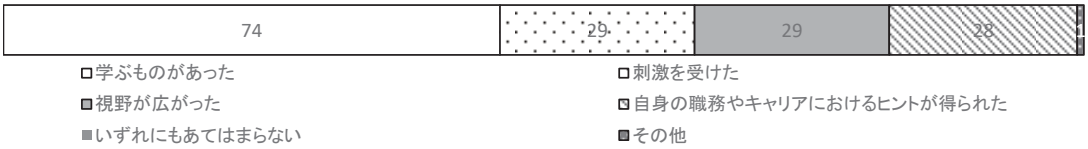
https://web.cshe.nagoya-u.ac.jp/event/79/

参加者：225 名

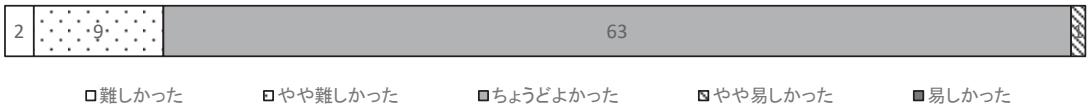
▷アンケート結果（回答者：75 名）

講習会の内容について（単位：人）

（1）本講習会について、あてはまるものを選んでください（複数回答可）



（2）本講習会の内容水準はいかがでしたか。



自由記述

・手引きにおける変遷や変更点をわかりやすく整理していただけたことが有り難かったです。また、再課程認定に向けての話題も、早めに学内で共有し動き出そうと思いました。

・いつもとてもわかりやすくご説明いただき、とても勉強になります。グループワークでは他大学の方の事例を伺うことができ、気づきがありました。

・対面での参加でしたので、第二部では同じグループの大学の方と変更届のことだけでなく、業務上の苦労や工夫されている点、本学との違いなどを知ることができました。また、オンラインではなかなか聞けないような質問や相談を他大学の方に聞けたり、後日メール等を通じて繋がりを構築できたことは、貴重な機会であると感じました。

・自分自身では当たり前で特に疑問を持たず行っていたことの根拠を知ることができたり、引き継いだ内容に誤りがあることに気が付くことができたことがとてもよかったです。

・可能であれば、もう少しグループ内で話す時間がほしかったです。

◎北陸大学 IR シンポジウム 2024

「IRer vs FDer 真剣トーク！－データと理想の狭間で揺れる大学改革の本質に迫る－」

講　　師：佐藤 浩章（東京大学総合教育研究センターTL 推進部門 部門長／教授）

和嶋 雄一郎（名古屋大学高等教育研究センター 特任准教授）

田尻 慎太郎（北陸大学 学長補佐／経済経営学部 教授）

山本 啓一（北陸大学経済経営学部 教授）

モデレーター：杉森 公一 （北陸大学高等教育推進センター長 教授）

日　　時：2025 年 3 月 6 日（木）14:00〜16:30
開催方法：オンライン
定　　員：400 名
主　　催：北陸大学
後　　援：公益社団法人 大学コンソーシアム石川、
　　名古屋大学高等教育研究センター[質保証を担う中核教職員能力開発拠点]
概　　要：いま、日本の大学教育は岐路に立っています。IR によるデータ分析は果たして教育現場に響いているのか。FD は本当に教育力向上に寄与しているのか。

現場では「IR のデータは机上の空論」「FD は形骸化している」という痛烈な批判の声が絶えません。しかし、これからの大学改革に両者は不可欠なはず。この矛盾にどう向き合えばよいのか。

本シンポジウムでは、国内屈指の FDer をお招きし、IRer 達と従来の建前論を排除。時に厳しい批判も交えながら、両者の本質的な協働の可能性を探ります。

IR のデータが現場で十分に活用されない理由、教育の質保証のエビデンスとしてのデータ、そして両者間の「言語の違い」という壁。さらには経営層を動かすために必要な要素まで、登壇者たちは現場での豊富な経験と深い洞察を持ち寄り、これらの課題に真正面から向き合います。

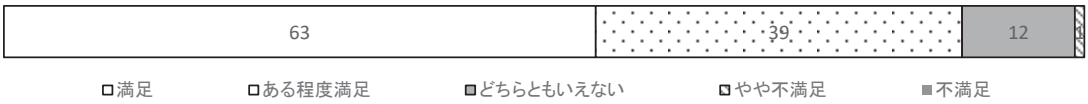
建前や理想論ではない、リアルな現場の声と解決策が飛び交う 3 時間。大学改革に関わるすべての方々に、新たな視座と実践的な示唆を提供します。

トークテーマ
1.「IR と FD の連携はなぜ進まない？－背景・課題・乗り越え方」
2.「ミドルマネジメントの役割－ ‘現場’と‘経営’をつなぐ要として」
3.「DP（ディプロマ・ポリシー）と学修成果の理想と現実」
4.「組織変革へのシナジー－IR×FD で大学をどう変える？」
5.「これからの大学運営の展望－参加者と描く未来像」
https://web.cshe.nagoya-u.ac.jp/event/83/

▷アンケート結果（参加者：264 名　アンケート回答者：115 名）

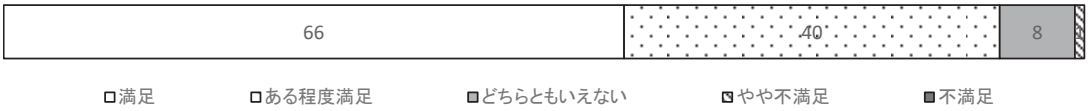
セミナーの内容について（単位：人）

（1）トークテーマ 1 の満足度はいかがでしたか？



（2）トークテーマ 2 の満足度はいかがでしたか？

（3）トークテーマ 3 の満足度はいかがでしたか？



（4）トークテーマ 4 の満足度はいかがでしたか？

（5）トークテーマ 5 の満足度はいかがでしたか？

自由記述

・FD（ファカルティ・ディベロップメント）と IR（インスティテューショナル・リサーチ）が双子のような関係であることに気づきました。

・トークテーマ 3 の議論において「全学的な DP の測定・評価を真面目に考え過ぎる必要は無い」という田尻先生の発言に目から鱗が落ちる思いでした。

・内容もさることながら、展開演出方法もよかったです。

・大学の DP を可視化することは難しく、DP を可視化するには内容を簡易にしていく必要がある、というところが印象的でした。

・FD や IR を進める者たちの悩みはどこも同じだと感じました。ただ、それで終わってはだめで、部局間の調整能力が求められるということはとても共感しました。

2. 講師派遣

2.1 学外講師派遣

○2024 年 4 月 5 日（金）
令和 6 年度中京大学新採用教員研修 FD ワークショップ「『教える』を考える」
講　師：齋藤芳子
主　催：中京大学
会　場：中京大学八事キャンパス
対　象：中京大学教員
参加者：20 名

○2024 年 4 月 10 日（水）
第 11 回早稲田大学ライティング・フォーラム
「大学と生成系 AI－教育は ChatGPT と協力してできるのか？－」
講　師：和嶋雄一郎
主　催：早稲田大学
会　場：早稲田大学
対　象：早稲田大学アカデミック・ライティング教育部門の院生、卒業生、教職員
参加者：180 名

○2024 年 8 月 29 日（木）
第 1 回 FD「成績評価のためのルーブリック活用」
講　師：加藤真紀
主　催：皇學館大学教育開発センター
会　場：オンライン
対　象：皇學館大学専任教員
参加者：89 名

○2024 年 8 月 30 日（金）
令和 6 年度人材育成プログラム第 4 回
「高等教育における生成系 AI－活用の可能性とその影響－」

講　師：和嶋雄一郎
主　催：ネットワーク大学コンソーシアム岐阜
会　場：オンライン
対　象：加盟機関の教職員
参加者：239 名

○2024 年 10 月 26 日（土）
立教大学学生相談所創立 70 周年記念シンポジウム「SPS に次ぐ現在の理論的背景」
講　師：安部有紀子
主　催：立教大学
会　場：オンライン
対　象：立教大学教職員・学生
参加者：70 名

○2024 年 11 月 20 日（水）
令和 6 年度岐阜大学大学院自然科学技術研究科 FD「研究指導を円滑にするために」
講　師：齋藤芳子
主　催：岐阜大学
会　場：オンライン
対　象：岐阜大学教員
参加者：250 名

○2024 年 12 月 11 日（水）
中部学院大学短期大学部 FD 研修会「大学教育における生成 AI の活用と課題」
講　師：和嶋雄一郎
主　催：中部学院大学短期大学部
会　場：オンライン
対　象：中部学院大学短期大学部の教職員
参加者：30 名

○2025 年 3 月 19 日（水）
ソウル大学 LnL セミナー「学寮プログラム日韓合同セミナー」

講　師：安部有紀子

主　催：韓国 LnL

会　場：ソウル大学

対　象：ソウル大学教職員

参加者：13 名

2.2 学内講師派遣

○2024 年 4 月 8 日（月）

令和 6 年度東海国立大学機構名古屋大学新任教員研修「授業改善支援」

講　師：安部有紀子

運　営：東海国立大学機構 教育基盤統括本部（アカデミック・セントラル）／
総務部人事労務課／教育戦略部教育戦略課
岐阜大学 教育推進学生支援機構／学務部教務課
名古屋大学 高等教育研究センター

会　場：野依記念学術交流館

対　象：名古屋大学／岐阜大学の新任教員

参加者：173 名

○2024 年 5 月 8 日（水）

数理・データ科学教育研究センター

「データサイエンス海外研修報告会－大学院生の教育力を高める試み－」

講　師：加藤真紀

主　催：数理・データ科学教育研究センター

会　場：名古屋大学

対　象：博士課程におけるデータサイエンス人材育成及び国際交流活動に関心のある教職員・学生

参加者：33 名

○2024 年 6 月 13 日（木）

物理学教室憲章記念講演会「新教育体制の下での高等教育」

「大学におけるアカデミックスキル教育」

講　師：齋藤芳子

主　催：大学院理学研究科物理学教室

会　場：理学部 B 館

対　象：関心のある方

参加者：50 名

○2024 年 7 月 3 日（水）
アカデミックライティング講習会 レポートの書き方セミナー 第 1 回
「レポートに取り組むために～レポートの類型と書式を学ぶ～」
講　師：齋藤芳子・竹永啓悟
主　催：附属図書館
会　場：中央図書館ディスカバリスクエア
対　象：名古屋大学／岐阜大学の学部生
参加者：5 名

○2024 年 7 月 10 日（水）
アカデミックライティング講習会 レポートの書き方セミナー 第 2 回
「レポートを書こう！」
講　師：竹永啓悟・安部有紀子
主　催：附属図書館
会　場：中央図書館ディスカバリスクエア
対　象：名古屋大学／岐阜大学の学部生
参加者：4 名

○2024 年 10 月 30 日（水）
アカデミックライティング講習会 論文の書き方セミナー 第 1 回
「論文の大枠を定めよう～構成と『問い』の立て方を学ぶ」
講　師：竹永啓悟
主　催：附属図書館
会　場：中央図書館ディスカバリスクエア
対　象：名古屋大学／岐阜大学の学部生
参加者：8 名

○2024 年 11 月 6 日（水）
アカデミックライティング講習会　論文の書き方セミナー 第 2 回
「論文を書こう！」
講　師：竹永啓悟
主　催：附属図書館

会　場：中央図書館ディスカバリスクエア
対　象：名古屋大学／岐阜大学の学部生
参加者：6 名

〇2024 年 11 月 27 日（水）
第 26 回教務学生事務担当者実務研修「教務と生成 AI の関係性」
講　師：和嶋雄一郎
主　催：教育推進部
会　場：豊田講堂シンポジオンホール会議室
対　象：教務学生関係事務を担当する職員
参加者：28 名

〇2024 年 12 月 18 日（水）
情報リテラシー教育研修会「実習サポートの技術を高める」
講　師：齋藤芳子（アドバイザー）
主　催：附属図書館
会　場：アクティブラーニングスタジオ
対　象：名古屋大学／岐阜大学の図書館職員
参加者：20 名

〇2025 年 2 月 5 日（水）
名古屋大学国際交流会館ミニシンポ
「学生の成長を促進するための学生寮コミュニティの形成－レジデンス・アシスタントの役割に注目して－」
講　師：安部有紀子
主　催：名古屋大学
会　場：名古屋大学共創スタジオ「Idea Stoa」
対　象：学寮に関わる教職員、学生
参加者：50 名

3. 情報提供

3.1 情報配信サービス

高等教育研究センターによる各種セミナーや新刊などの情報をメールでお知らせするサービスを行っています。情報配信サービスへの登録は、以下ウェブサイトよりお申込ください。

・申込サイト
https://forms.office.com/r/PgyyCQUT3P

4 月 16 日（火）	CSHE ニュース 184
5 月 7 日（火）	CSHE ニュース 185
5 月 31 日（金）	CSHE ニュース 186
7 月 11 日（木）	CSHE ニュース 187
8 月 19 日（月）	CSHE ニュース 188
9 月 10 日（火）	CSHE ニュース 189
10 月 11 日（金）	CSHE ニュース 190
10 月 24 日（木）	CSHE ニュース 191
11 月 19 日（火）	CSHE ニュース 192
12 月 3 日（火）	CSHE ニュース 193
1 月 17 日（金）	CSHE ニュース 194
2 月 25 日（火）	CSHE ニュース 195

3.2 定期刊行物

◎ジャーナル『名古屋高等教育研究』第 25 号（2025 年 3 月）

・目次

このジャーナルがめざすもの　編集委員会

[特集] 未来／AI 社会のキャリアに向けた大学教育のカリキュラム

特集の趣旨　加藤真紀

AI の社会的影響と教育の転換　美馬のゆり

大学教育への期待とカリキュラム編成の実際－文理横断・文理融合教育の検討－　杉谷祐美子

多様な学生が主体的に学び合う場としての大学教育を目指して　福留東土

コモンベーシックスとしてのアルゴリズム的思考

－STEAM の発展モデル STEA²M の提案と実践－　鈴木泰博

AI 社会を切り拓く大学カリキュラムの再構築と協働の可能性

－パネルディスカッションの記録－　東岡達也・安田淳一郎

[研究論文]

「大学の都心回帰」の偏在性－大学立地政策の転換に対する首都圏大学の定員配置動向－　寺田悠希

20 世紀初頭アメリカの大学教員資格論－NCA アクレディテーション基準に着目して－　吉田翔太郎

[特別寄稿]

学習環境から捉えた大学院研究室の全体像－大学院生に対するオンライン調査を繙いて－　伏木田稚子

気候災害時代の高等教育のあり方－韓国における新唯物論的教育研究の可能性－　崔承賢

Regulatory Framework for Internationalization of Higher Education in India　AHIR Kinjal Vilay

[研究ノート]

高校国語科「論理国語」におけるレポート作成　伊藤 奈賀子

大学における日本文学研究者の形成－戦前期の高等教育拡大期を事例として－　原田健太郎・野本瑠美

国際教育交流分野の教員人事に関する調査研究－担当教員へのインタビュー調査から－

・ウェブサイト

https://test.cshe.nagoya-u.ac.jp/publication/journal/

◎季刊紙「かわらばん」

記事タイトル抜粋

・ かわらばん 86 号（2024 年 4 月）
　巻頭「日本の博士エコシステム（博士と共栄する社会）を考える」
　グローサリー「インターンシップ」
・ かわらばん 87 号（2024 年 7 月）
　巻頭「組織変革を駆動するモデル」
　グローサリー「ファカルティ・ラーニング・コミュニティ」
・ かわらばん 88 号（2024 年 10 月）
　巻頭「GPA は学びの指標たりえているか？」
　グローサリー「アカデミック・アドバイジング」
・ かわらばん 89 号（2025 年 1 月）
　巻頭「コロナ禍を経て注目される『大学のコミュニティ』」
　グローサリー「キャンパス」

ウェブサイト

https://web.cshe.nagoya-u.ac.jp/publication/kawaraban/

◎ e-Newsletter FRIENDS vol.18: E-bulletin from the Center for the Studies of Higher Education, Nagoya University. (December 2024)

センターに過去に在籍した方々（客員教員を含む）、海外から招聘した方々を対象に、年に１回、センターの活動状況を英語で発信しています。これにより、学術的交流を継続させています。

3.3 オンラインサービス

◎新任教員リソース集

新任教員のみなさまが着任後スムーズに活動を開始することができるよう、名古屋大学の教員として働くうえでのスタートアップ情報や、教育・研究環境の基本情報について提供しています。

https://web.cshe.nagoya-u.ac.jp/support/teacher/portal/resource/

◎高等教育グローサリー

高等教育にかかわる様々な用語を解説しています。本センターの季刊紙『かわらばん』より「高等教育グローサリー（旧：カリキュラムグローサリー）」を随時転載しています。

https://web.cshe.nagoya-u.ac.jp/support/student/grossary/

◎ファカルティガイド

必要な情報にさっとアクセスできるように、トピック別に背景や論点と手法を簡潔にまとめた1枚もののガイドです。

https://web.cshe.nagoya-u.ac.jp/support/teacher/facultyguide/

◎ティップス先生からの7つの提案

名古屋大学の学生・教員・職員がよりよい教育を実現するための提案と具体的なアイディアをまとめたものです。

名古屋大学では、さまざまな優れた教育活動が実践されています。主に学内での調査を通じて収集した教育実践例をデータベース化し、教授法研究や学習理論研究の成果に基づいて、それらを整理し、簡潔な表現にまとめて提供しています。

なお、「ティップス先生からの7つの提案」には冊子版もあります。名古屋大学の教職員の方には配布しておりますのでご連絡ください。また学外で冊子版を希望される方は、出版業者（石川特殊特急製本株式会社、連絡先 052-231-2127）まで直接ご連絡ください。

https://web.cshe.nagoya-u.ac.jp/publication/tips/

◎成長するティップス先生

成長するティップス先生－名古屋大学版ティーチングティップス－の目的はとてもシンプル。つまり、われわれ教員が日ごろの教育活動のなかでしばしば出会う困ったこと、悩

みの解決のためにちょっとしたヒントをさし上げようということです。とりわけ初めて教壇に立つ教員の方々に有益なアドバイスとなることを念頭において制作しましたが、経験豊富な教員にとっても、困ったことが生じたとき、立ち止まって自分の授業を振り返り改善しようとするときに役立つものになっているはずです。
https://web.cshe.nagoya-u.ac.jp/resources/tips/

◎ティップス先生のカリキュラムデザイン
このハンドブックは、名古屋大学の学部や研究科などで教育プログラムやコースの開発を担当する教職員のみなさんにとって役に立つカリキュラムデザインの要点や方法を、わかりやすくステップで説明するものです。ティップス先生のように、はじめてカリキュラムの改訂を担当することになった方々を主な読者に想定しています。
https://web.cshe.nagoya-u.ac.jp/publication/tips/img/curriculum_design.pdf

◎名古屋大学教員のための留学生受け入れハンドブック
名古屋大学の教員有志によって立ち上げた留学生研究会で作成しました。本冊子は、教員と留学生が信頼関係を築く上で参考になると思われるアドバイスや各種情報をまとめたものです。
https://web.cshe.nagoya-u.ac.jp/publication/handbook/img/ryugakusei_handbook.pdf

◎研究者のための科学コミュニケーション Starter's Kit
科学コミュニケーションを始めたい研究者のために
・科学コミュニケーションとはなにか
・科学コミュニケーションの場をどうつくっていくか
・どのように科学コミュニケーションを行ったらよいか
について役立つ情報とノウハウを集めた実践ガイドです。
https://web.cshe.nagoya-u.ac.jp/scicomkit/

◎名古屋大学新入生のためのスタディティップス
一連の小冊子からなるシリーズです。「ティップス（tips）」とは、「秘訣・ヒント・こつ」などを意味します。「主体的な学習者」になることがなぜあなたにとって価値があり意味あることなのか。どうしたら学習姿勢を主体的なものに切り替えることができるのか。そのために役立つさまざまな秘訣について、提供していきます。
https://web.cshe.nagoya-u.ac.jp/resources/stips/

◎名古屋大学生のためのアカデミック・スキルズ・ガイド
名古屋大学において学習・研究を進めるために必要となる基本的なスキル（Common Basics）を取り上げ、解説したガイドです。トピックス別のスタート・ガイドはそれぞれ、(1)当該トピックスの概要、(2)チェックリスト、(3)チェックリスト達成のための説明、(4)推奨文献という 4 つのパートから構成されています。アカデミック・ライティング・ガイドは、執筆段階に沿った 3 部構成としています。各ガイドの出力には A4 用紙両面印刷がお薦めです。学習を始める際に、また学習の中で戸惑った時に、お役立てください。
https://web.cshe.nagoya-u.ac.jp/asg/

◎良識をもって学問をしよう！
名古屋大学の新入生が大学で学ぶ際に必要な学術倫理の基本をまとめたものです。単にしてはならないことを示すだけのガイドとは異なり、名大での学習活動を充実できるようにするためのアイデアや実践方法をまとめたものです。
https://web.cshe.nagoya-u.ac.jp/support/img/integrity.pdf

◎シラバステンプレート
実際に使用されているシラバスをテンプレートという形で公開しています。ワードファイルでも公開していますので、シラバス作成時に役立てていただければと思います。
https://web.cshe.nagoya-u.ac.jp/support/activity/

◎シラバス英文表記のための例文集
シラバスの重要な項目である、授業の目的と到達目標、成績評価方法、授業計画について、シラバスとしての質を最低限担保する最もシンプルな基本文型を示しました。また、キーワードを入れ替えることで、さまざまな分野のシラバス作成に対応できるようにしました。
https://web.cshe.nagoya-u.ac.jp/support/teacher/img/esyllabus.pdf

◎ミニッツペーパーテンプレート
授業中、学生に記述させるコンパクトな質問用紙です。用途や目的に応じて、「リアクションペーパー」「ワーキングペーパー」「コメントペーパー」とも呼ばれます。
PDF ファイル、エクセルファイルでテンプレートを公開しています。文言等を変更して使用することもできます。
https://web.cshe.nagoya-u.ac.jp/support/teacher/minute/

◎名大の授業

名古屋大学は、授業の一部を選び、そこで実際に使われている教材を電子化しインターネット上で無償公開する事業を行っています。

これは、授業教材をインターネット上で公開することで、普段は見ることのできない名古屋大学の教育の一端を、社会へ広く情報発信しようとするものです。学生の自学自習教材としての活用だけでなく、教員と学生、教員と学外者、そして教員同士の交流・インタラクションを期待しています。

この事業は、名古屋大学オープンコースウェア運営協議会が運営しており、日本オープンコースウェア・コンソーシアム（JOCW）と連携しています。

https://ocw.nagoya-u.jp/

◎東海高等教育研究所『大学と教育』

東海高等教育研究所に掲載された論文のうち、執筆者の許諾が得られたものをウェブサイトに公開しています。

https://web.cshe.nagoya-u.ac.jp/center/activitylog/publication/

名古屋大学学術機関リポジトリからも閲覧できます。

https://nagoya.repo.nii.ac.jp/search?page=1&size=20&sort=controlnumber&search_type=2&q=1657153778290

4. 研究会運営

4.1 アカデミックスキルズ教育研究会

1. 活動目標

高等教育研究センターでは、ホームページにおいて学生を対象にした研究活動の導入レベルの知識やスキルを伝えるコンテンツとして、「アカデミック・スキルズガイド」を公開している。現在、学士課程教育の低年次学生に対するアカデミックスキルズの習得は大きな課題になっており、学生が自主的に調査を行い、分析し、レポートをまとめることができるようにより詳細な「ガイド」を作成する必要がある。

そこで、本研究会は学生の主体的な学びを支援するためのツールとして低年次学生を対象にした調査・分析・レポート執筆の新たなガイドの開発を行うことを目的とする。加えて、実際の授業で試行し、学生や関係者からフィードバックを得ることや、学生の指導にあたっている教員や大学院生とも協力を得ることで、より実践的なガイドへとブラッシュアップしていく。

2. メンバー

安部 有紀子（名古屋大学高等教育研究センター）
齋藤 芳子　（名古屋大学高等教育研究センター）
松本 みゆき（名古屋大学高等教育研究センター）
竹永 啓悟　（名古屋大学高等教育研究センター）

3. 2024 年度の活動

これまで収集した情報をもとに、高等教育を題材にした質的調査法の動画教材（20 分 5 本）を作成した。実際に大学院の授業で活用し、受講生の達成状況や意見をもとに内容のブラッシュアップを行なった。「論文の書き方」をテーマにライティングに関する教材・ワーク教材を作成（2 本）した。教材をブラッシュアップするために名古屋大学図書館と協働で講習会（4 回／試行）を実施した。

＜講習会（試行）の実施＞

○「レポート執筆セミナー」名古屋大学附属中央図書館 2 階ディスカバリスクエア
　第 1 回　2024 年 7 月 3 日（水）13:00～14:30

「レポートに取り組むために～レポートの類型と書式を学ぶ～」

第 2 回　2024 年 7 月 10 日（水）13:00～14:30

「レポートを書こう！～学術的な文書の執筆のコツ～」

○「論文執筆セミナー」名古屋大学附属中央図書館 2 階ディスカバリスクエア

第 1 回　2024 年 10 月 30 日（水）13:00～14:30

「論文の大枠を決めよう～構成と「問い」の立て方を学ぶ～」

第 2 回　2024 年 11 月 6 日（水）13:00～14:30

「論文を執筆しよう～学術的な文書の執筆のコツ～」

4.2 学生アシスタント養成研究会

1. 活動目標

課外活動において訓練を受けた学生が他の学生を支援する取り組みは、現在多様な分野に広がっているが、その訓練方法については、担当教職員の個人的経験からの取り組みに留まり、大学組織を超えた情報や方法の共有が未発達である。本研究会では、学生の学習を促進するための学生スタッフの養成方法について、情報を収集するとともに、学術的知見に基づいたトレーニングモデルを開発する。

2. メンバー

安部 有紀子（名古屋大学）
蝶 慎一　　（香川大学）
小野 詩紀子（南山大学）
南 玉瓊　　（お茶の水女子大学）
下之門 直樹（立命館アジア太平洋大学）
丸山 侑子　（豊橋技術科学大学）
竹川 清美　（豊橋技術科学大学）
澤田 涼　　（名古屋大学大学院教育発達科学研究科博士後期課程）

3. 本年度の活動内容

＜研究会関係＞

第 13 回研究会　2024 年 9 月 6 日（金）9:00～12:00
・ワークブックの活用に関する検討

第 14 回研究会　2025 年 2 月 17 日（月）12:00～17:00
・報告（早稲大学学生寮／早稲田大学学生部学生生活課 横山優美）
・ディスカッション

＜講習関係＞

名古屋大学高等教育研究センター第 217 回招聘セミナー・第 7 回学生支援担当者講習会を開催
2024 年 9 月 6 日（金）14:00～16:00

「ソウル大学の学生寮教育の現状－Living & Learning (LnL) Residential College の経験から－」
Jong Kwon Choe（ソウル大学建設環境工学部 准教授／Living & Learning (LnL) 運営団長（Head of the Administrative Affairs of SNU LnL Residential College））

4. 成果と課題

2023 年度に作成したワークブックの活用を目指し研究会メンバーと意見交換を重ねた。その成果の一つとして、韓国大学の実地調査と情報交換を進めていくこととなり、その第 1 弾としてソウル大学の学寮担当者をお招きし、講習会を実施した。

今後はワークブックの成果を報告するために広く発信していくこと、また複数大学間の RA トレーニングに関する交流会の希望が高いことから、大学間のマッチングや企画の支援を研究会として進めていくことになった。

4.3 教務系 SD 研究会

1. 活動目標

名古屋大学高等教育研究センターにおける「FD・SD 教育改善支援拠点」（2010～2014 年度）事業の一環として設置された「名古屋 SD 研究会」を源流とし、拠点事業終了後もセンターのもとに活動を継続。「質保証を担う中核教職員能力開発拠点」（2017～2021 年度、2022～2024 年度）としてセンターが拠点事業の再認定を受けたことに伴い、研究会も再び拠点事業の一部に位置付けられている。2019 年度には、教務系実務に特化している現状を踏まえて、名称を「教務系 SD 研究会」に変更した。引き続き、教務系職員に必要な専門知識・スキル等を明らかにすることに加え、大学事務組織の課題を主体的に解決できる職員の育成に必要な支援を明らかにすることを目的としている。

具体的な目標及び課題は以下の通りである。

1）これまでの大会や講習会の実績を踏まえた教務系事務職員に求められる知識・理解の体系化を行い、書籍として教務事務の現場へ還元する可能性について方向性を決める。

2）教務系法規について、これまでの歴史的な経緯を確認し、課題を明らかにする。

3）教学マネジメント指針で提言されている教務事務に関する SD を現場視点で議論し、大学教務実践研究会のセミナーや大会の開催により、能力開発の機会を開発・提供する。

2. メンバー（所属は 2025 年 3 月現在）

代表　小野 勝士（龍谷大学）

齋藤 芳子（名古屋大学）
辰巳 早苗（追手門学院大学）
宮林 常崇（東京都立大学）
有馬 美耶子（白百合女子大学）
竹中 喜一（近畿大学）
徳丸 由紀（日本文理大学）
石樽 三鈴（中部大学）
田頭 吉一（長崎大学）
多畑 寿城（学校法人行吉学園）
村瀬 隆彦（福岡医療福祉大学）
大津 正知（茨城大学）
川島 香織（愛知県立大学）
加藤 史征（名古屋大学）
東岡 達也（名古屋大学）

3．本年度の活動実績

（1）組織的研修の開催（詳細は第Ⅱ部令和 6 年度の拠点活動実績に掲載）

①教務系職員向け初任者講習会

②教務系事務部門中堅者向け講習会

③教務課題検討フォーラム

④教員免許事務担当者講習会

⑤大学教育の国際化　基礎知識セミナー

⑥大学院教務の現在地

（2）研究会

①第 1 回　2024 年 5 月 17 日

名古屋大学東山キャンパス文系総合館 5 階アクティブラーニングスタジオ

・2024 年度構成員・年間スケジュールについて

・各プロジェクトの活動について

・改正大学設置基準施行後の状況について

②第 2 回　2024 年 9 月 13 日

名古屋大学東山キャンパス文系総合館 5 階アクティブラーニングスタジオ

・中堅者講習会の運営について

・課題検討フォーラムのプログラムについて

・各プロジェクトの活動について

・改正大学設置基準施行後の状況について

・第 4 期認証評価について

③第 3 回　2025 年 1 月 27 日名古屋大学 文系総合館会議室

名古屋大学東山キャンパス文系総合館 5 階会議室

・ 今年度の振り返り

・ 次年度の運営体制について

・ 次年度のスケジュールについて

4．成果と課題

①成果

・今年度は、オンライン・対面のハイブリッド開催に加え、分科会の内容に応じて、対面のみのセミナーも開催し、対面・オンラインの特性を生かした講習会を行った。
・教務を取り巻く今日的な課題に関して、各講習会・大会において取り扱い、実践的な知識や最新情報を広く提供することができた。特に教務課題検討フォーラムでは分科会の時間帯を 1 つ増やし、3 つの分科会を追加ことができた。
・国際部門と教務部門の架け橋プロジェクトが企画主体として、今年もセミナーを開催することができた。
・教育プログラム検討支援プロジェクトを新規に立ち上げ、昨年度の課題事項にあげた新規構成員の取り込みおよび世代間の知識の継承の一助となった。

②今後の課題

教育プログラム検討支援プロジェクトを設置したが、安定的な運営を行い、次世代の育成を視野に入れた活動の必要性がある。今後も構成員の年齢構成を考慮した新規構成員の取り込みを行い、世代間の知識の継承を図っていくことが課題である。

5. 特記事項

本研究会から派生して、大学教務実践研究会が任意団体として設立されている。以下にその概要を記す。

a. 活動内容および目標

・教務に関する実践的知識の探究、それらの蓄積及びネットワーク構築並びに次世代の教務系職員の育成等（趣意書より）
・教務事務の実務的な内容を中心とする

b. 運営体制

代 表	小野 勝士（龍谷大学）
副 代 表	辰巳 早苗（追手門学院大学）
事務局長	宮林 常崇（東京都立大学）
運営アドバイザー	田頭 吉一（長崎大学）
	多畑 寿城（学校法人行吉学園）
	村瀬 隆彦（福岡医療福祉大学）
	美納 清美（国士舘大学）

運営委員	有馬 美耶子（白百合女子大学）
	石榑 三鈴（中部大学）
	竹中 喜一（愛媛大学）
	徳丸 由紀（日本文理大学）
運営協力者	齋藤 芳子（名古屋大学）
	大津 正知（茨城大学）
	加藤 史征（名古屋大学）
	川島 香織（愛知県立大学）
	中井 俊樹（愛媛大学）
	松田 和才（名古屋大学）
	満田 満恵（中京大学）
	森 征一郎（名古屋大学）
	中島 英博（立命館大学）
	東岡 達也（名古屋大学）

c. 活動内容

①教務課題検討フォーラムの開催（12 月）

②セミナーの開催

教務系職員向け初任者講習会（6 月）

教員免許事務担当者講習会（5・9・2 月）

大学院教務の現在地（9 月）

教務系事務部門中堅者向け講習会（10 月）

大学教育の国際化　基礎知識セミナー（12 月）

4.4 名古屋経済学教育研究会

1. 活動目標

主に日本の大学で経済学を教える教員が、経済学教育を研究し、教育実践の向上を志向・共有するための場を提供する。

2. メンバー

齊藤 誠　（名古屋大学大学院経済学研究科）　代表
柳原 光芳（名古屋大学大学院経済学研究科）
藤田 真哉（名古屋大学大学院経済学研究科）
玉井 寿樹（名古屋大学大学院経済学研究科）
山口 景子（名古屋大学大学院経済学研究科）
田村 彌　（名古屋大学大学院経済学研究科）
加藤 真紀（名古屋大学高等教育研究センター）　事務局

3. 本年度の活動実績

1）打合せ

第 1 回会合
2024 年 6 月 10 日（月）9:00～11:00
名古屋大学東山キャンパス文系総合館 5 階アクティブラーニングスタジオ
・今年度の活動計画や授業実践における課題等について意見交換を行った。

2）メンバーの希望を基に以下の通り対面でセミナーを開催した。

講師：関西学院大学国際学部国際学科　宮田 由紀夫教授
テーマ：「アメリカの大学における学問の自由の変容」
開催日時：2024 年 9 月 13 日（金）13:00～15:00
開催方法：対面
開催場所：名古屋大学東山キャンパス文系総合館 5 階会議室
定員：15 人

米国における学問の変容を中心に講義頂き、特にテニュア制度との関連からは高等教育分野にも深い示唆を得る内容であった。経済学関係者を対象としたため、本テーマに関心を持つ参加者からは率直な質疑応答があった。

4. 成果と課題

今年度の成果は、1回の会合と1回の対面セミナーである。昨年度も指摘したように、非常に多忙なメンバーの会合をどのように調整開催するのかが大きな課題となった。またセミナー開催により、関西圏の大学からも来学があったが、いかに学外への展開を測るかが引き続きの課題である。これらを踏まえて、元々の研究会の趣旨である、参加できなかった時は残念に思うような会にしたいというメンバーの希望に沿う活動を企画実施する予定である。

4.5 高大社接続研究会

1. 活動目標

・大学入学前から卒業後までの長期的なスパンで学生の成長課題と必要な方策を検討する
・入試、高大接続業務の課題に対応するための方策を検討する
・入試、高大接続業務に携わる教職員の課題と必要な能力開発プログラムを検討する
・キャリア教育、就職支援の課題に対応するための方策を検討する
・キャリア教育、就職支援に携わる教職員の課題と必要な能力開発プログラムを検討する
・入試、高大接続担当者と、キャリア教育、就職支援担当者の連携の可能性を検討する

2. メンバー

代表　丸山 和昭（名古屋大学大学院教育発達科学研究科）
永野 拓矢（名古屋大学教育基盤連携本部アドミッション部門）
齋藤 芳子（名古屋大学高等教育研究センター）
東岡 達也（名古屋大学高等教育研究センター）
菊池 美由紀（愛知淑徳大学キャリアセンター）

3. 本年度の活動内容

1）会合

2024 年 8 月 5 日(月) 対面
・活動目標の確認
・活動内容についての意見交換
2024 年 9 月 18 日(水) 対面
・能力開発プログラムについての意見交換
2024 年 10 月 23 日(水) 対面
・セミナー開催についての意見交換
2024 年 11 月 27 日(水) 対面
・学校調査についての意見交換
2024 年 12 月 25 日(水) 対面
・講師選定についての意見交換
2025 年 1 月 29 日(水) 対面
・次年度計画についての意見交換

2）研修提供

2024 年 11 月 21 日(木) 15:00-17:00

・名古屋大学高等教育研究センター第 219 回招聘セミナー・第 18 回アドミッション担当教職員支援セミナーとして「学力の 3 要素・観点別評価の大学入試活用への期待と課題」と題するセミナーを開催した。

4.　成果と課題

・11 月のセミナーには、高校側・大学側の双方からの参加があり、互いの状況を知る機会提供できた。

・名古屋市におけるキャリア支援政策についての調査研究に着手した。

・入試改革が進む現状において、その分析検討が必要であるが、併せて、学習面での高大接続について、今後の検討課題としたい。

4.6 大学 IR×DX 研究会

1. 活動目標

・大学の IR（Institutional Research）の課題に対応するための方策を検討する
・大学の IR に携わる教職員の課題と必要な能力開発プログラムを検討する
・大学の DX（Digital Transformation）の課題に対応するための方策を検討する
・大学の DX に携わる教職員の課題と必要な能力開発プログラムを検討する
・IR と DX のシナジーによって可能となる、大学改革の方策について検討する
・IR 担当者と DX 担当者の連携の可能性を検討する

2. メンバー

江川 昂明（三重大学国際・情報部 DX・情報チーム）
加藤 真紀（名古屋大学高等教育研究センター）
東岡 達也（名古屋大学高等教育研究センター）
鄭 漢模（北海道大学高等教育推進機構）
長谷川 暁人（岐阜大学教育推進・学生支援機）
松本 みゆき（名古屋大学高等教育研究センター）
丸山 和昭（名古屋大学教育発達科学研究科）
神酒 太郎（岐阜大学教育推進・学生支援機）
代表　安田 淳一郎（名古屋大学高等教育研究センター）
幹事　和嶋 雄一郎（名古屋大学高等教育研究センター）

3. 本年度の活動内容

・大学の DX（Digital Transformation）の課題に対応するための方策を検討するための情報収集、セミナー開催

大学の DX 化の課題を整理するために、セミナーを開催し、情報収集を行った。大学の DX 化における作業の効率化の可能性に加えて、継続性を担保するための組織化のあり方等の情報収集を行った。また、大学 DX 化で注目されている学修成果の可視化に関して、効果的かつ実践的な方法に関しての情報集取を行った。

4. 本年度の活動成果

（1）第 220 回招聘セミナー・大学 IR×DX 研究会 第 4 回セミナー

【日　　時】2024 年 12 月 17 日（火）13:30～15:30

【講　　師】相生 芳晴 氏（上智大学 IR 推進室 室長）

【タイトル】上智大学の事務組織における、生成 AI の利活用について
－アンケートの自由記述の処理や、学内文書の翻訳など－

【主　　催】名古屋大学高等教育研究センター[質保証を担う中核教職員能力開発拠点]

（2）大学 IR×DX 研究会 第 5 回セミナー

【日　　時】2024 年 12 月 21 日（土）13:30～15:30

【講　　師】和嶋 雄一郎 氏（名古屋大学高等教育研究センター 特任准教授）

【タイトル】大学基本情報って国公立大学の学部・学科、研究科・専攻の情報を確認できる使えるデータなんですけど、使ってみたいと思いませんか？

【主　　催】名古屋大学高等教育研究センター[質保証を担う中核教職員能力開発拠点]

（3）第 221 回招聘セミナー・大学 IR×DX 研究会 第 6 回セミナー

【日　　時】2025 年 1 月 31 日（金） 13:30~15:30

【講　　師】湊 涼子 氏（大阪大学総務部／事務改革推進室 専門職員）

【タイトル】現役担当者が語る事務改革の光と影

【主　　催】名古屋大学高等教育研究センター[質保証を担う中核教職員能力開発拠点]

（4）大学教育改革フォーラム in 東海 2024 分科会（大学 IR×DX 研究会 企画）

【日　　時】2025 年 3 月 8 日（土）

【講　　師】今野 拓哉 氏（マイクロソフトコーポレーション Worldwide Public Sector Education インダストリーアドバイザー）

【タイトル】大学 DX 化の可能性を探る
－どんなことができたのか？もっとできないのか？をみんなで議論してみよう－

【主　　催】名古屋大学高等教育研究センター[質保証を担う中核教職員能力開発拠点]

4.7 名古屋哲学教育研究会

1. 活動目標

東海地域を中心として、哲学を教える教員が所属大学を越えて日頃の教育実践を共有し、知見を交換する機会を提供する。

2. メンバー

岩田 直也　（名古屋大学大学院人文学研究科）
笠木 雅史　（名古屋大学大学院情報学研究科）
久木田 水生（名古屋大学大学院情報学研究科）
久保田 祐歌（関西福祉科学大学社会福祉学部）
鈴木 真　　（名古屋大学大学院人文学研究科）
齋藤 芳子　（名古屋大学高等教育研究センター）　事務局担当

3. 本年度の活動と成果

本年度は、ここ数年間の活動やセミナーをふまえ、メンバー個々の教育実践をあらためて振り返り、情報共有を進めた。その結果、いくつかの観点を抽出することができた。

1）考えるスキルの育成

哲学の強みともいえる、問題の定式化や議論の組み立てのスキル教育は、教養教育／一般教育のなかでますます注目を集めており、哲学教育にとって１つの大きな柱である。生成 AI を誰もが使える現代において、これを使いこなすという観点も新たに確認できた。

2）哲学分野ならではの教育方法

DBER（学問分野別教育方法研究）が注目されるなか、哲学分野ならではの教育方法について、海外の研究に学びつつ、日本での哲学教育の展開を考えることは今後の課題の１つである。たとえば最近、哲学教育において用いられるトピックにジェンダーの偏りがあるのではないか、それが専門家のジェンダーの偏りにつながっているのではないかといった点が議論されている。本会メンバーにおいても、各種の動向の注視や議論への参加が必要であろうことを確認した。

3)専門教育としての哲学教育

専門教育としての哲学教育は、これまであまり取り上げてこなかった領域である。教養教育として、ないしは、スキル教育としての意味づけを離れたところで、しかし昨今の大学事情に照らして学生中心の授業を行うなかで、哲学の専門性を高めるとはいかなることかについて、あらためて検討してもよいかもしれない。その際には、AI や大規模データベースを活用した新たな取り組みにも眼を向けることになると考えられる。また、哲学の専門家のキャリアパス開発も視野に入れて、各段階の教育内容・方法を再考していくことも必要となるであろう。

4.8 物理学講義実験研究会

1. 活動目標

理系講義で学生が体験的に学習する機会を作り、理論と実験を関係づける手法の１つとして、講義中の実験（以下、「講義実験」）を導入する方法がある。現在、講義実験の器具開発と活用には、各大学の教員が各自で取り組んでおり、そのノウハウが共有されていない。そこで我々は、学内外の講義実験に関するノウハウを抽出し、各大学の教員間で共有できるネットワークを形成することを目的として活動を行っている。

2. メンバー

代表　三浦 裕一　（愛知県立芸術大学 非常勤講師）
　　伊東 正人　（愛知教育大学理科教育講座）
　　井村 敬一郎（名古屋大学教養教育院）
　　大薮 進喜　（徳島大学教養教育院）
　　小西 哲郎　（中部大学工学部）
　　齋藤 芳子　（名古屋大学高等教育研究センター）
　　千代 勝実　（山形大学学士課程基盤教育院）
　　中村 泰之　（名古屋大学教養教育院）
　　古澤 彰浩　（藤田医科大学医学部）
幹事　安田 淳一郎（名古屋大学高等教育研究センター）

3. 本年度の活動内容

1）新規講義実験の開発・集積
2）既存講義実験の調査と改善

オンライン会合日：2024 年 5 月 22 日、7 月 17 日

4. 本年度の活動成果

研究会開催　物理学講義実験研究会、徳島大学常三島キャンパス、2024 年 9 月 7 月。
学 会 発 表　三浦裕一・齋藤芳子・安田淳一郎・中村泰之・古澤彰浩・千代勝実・伊東正人・小西哲郎・大薮進喜「熱機関の熱効率を示す教材実験の開発－スターリングエ

ンジンと水飲鳥の効率測定」日本物理学会 2025 年春季大、2025 年 3 月 18 日〜21 日、オンライン開催。

4.9 マネジメント人材育成研究会

1. 活動目標

マネジメント人材育成研究会は、大学の職場で求められる教職員のマネジメント力向上を支援するため、人材育成や能力開発の考え方と方法論を体系的にまとめることを目的とする。その際に、現場主体のマネジメント力向上のため、現場の課題を現場の教職員で解決していくアプローチを重視する。

この課題に取り組むため、昨年度までに引き続き「後輩指導の理論と実践」を重点課題とする。経営改善やマネジメントの高度化には、一般職員から係長レベルが対応する複雑化・高度化する業務への対応が求められているためである。これらに少ない職員で取り組むには、現場主体の人材育成が必要であり、潜在的なニーズも高い。また、優れた主任・係長級の育成は、その後の管理職育成にもつながる取組である。後輩指導の知見は、人的資源管理論や成人教育論の領域で蓄積されており、本研究会でもこの領域での研究と実践を目指す。

大学職員を対象とした研修は、各大学が行う財務、総務、教務等の領域別研修や、大学横断的に行う IR、アドミッション、学生支援等の政策課題的研修がある。後者の研修は、自大学で研修を開催できない大学にとっては有用であるが、能力開発に参加する職員を過度に限定したり、研修に積極的な職員が職場で周辺化されるなどの弊害もある。また、経営人材育成の必要性が指摘される中、上位層向けの研修のみに注目が集まっているが、一般職員を対象としたマネジメント研修はあまり議論されてこなかった。本研究会は、この分野に貢献することを目指している。

2. メンバー

大津 正知（茨城大学）
小山 敬史（名古屋大学）
齋藤 芳子（名古屋大学）
武谷 信吾（州産業大学）
中島 英博（立命館大学）
坂本 規孝（広島市立大学）　代表
的場 由紀子（フリーコンサルタント）
宮林 常崇（東京都立大学／公立大学協会）

3. 本年度の活動内容

1）会合

2024 年 12 月 19 日（木）9:30-11:00

・2023 年度までの活動の振り返り

・大学教育改革フォーラム in 東海 2025 のセッション企画について

2025 年 1 月 29 日（水）10:00-11:00

・大学教育改革フォーラム in 東海 2025 のセッション進行について

2）研修提供

2025 年 3 月 8 日（土）13:30-15:00

・係長クラスを主対象とするセッション提供（大学教育改革フォーラム in 東海 2025 内）

4. 成果と課題

今年度は、大学教育改革フォーラム in 東海 2025 へのセッション提供を行い、参加者間でのミドルマネジメントにおける失敗や工夫をざっくばらんに語りあいつつ、今後の糧を得てもらえるよう研究会メンバーが細やかなファシリテーションを実施した。このなかで、ミドルマネジメント層における課題を、研究会側としても把握・抽出することができた。また、メンバー個々に独自の問題意識をもって、研修開発に向けた検討を進めることができた。得られた観点をとりまとめ、どのように研修に生かせるかが、今後の課題である。

5. 研究開発

5.1 学術論文

◎スタッフ

Michael M Hull, Jun-ichiro Yasuda, Naohiro Mae "Methodological suggestions for creating subquestions for the Force Concept Inventory (and other research-based assessments)" *Journal of Physics: Conference Series*, 2705(1), 12002, April 2024.

Armaghan Eslami, Atsuko Kanai, Miyuki Matsumoto "Development of the Multidimensional Workaholism Scale (MWS) Japanese Edition and Examination of its Convergent, Discriminant, and Incremental Validity", *Japanese Psychological Research*, 1111(10), https://doi.org/10.1111/jpr.12518, April 2024.

Tatsuya Tooka, Naoyoshi Uchida, Keigo Takenaga, Kazuaki Maruyama, Maki Kato "Digitalization of Higher Education in Japan: Challenges and Reflections for Education Reform" *Journal of Comparative and International Higher Education*, 16(2), pp.35-46, May 2024.

川人よし恵・和嶋雄一郎・武田裕之・加賀有津子「技術者教育としての文理共創アイデア生成ワークショップ手法の検討」『工学教育』第 72 巻 3 号、5-12 頁、2024 年 5 月。

Kato Maki, Ota Kazusa "International partnership of Japanese university: Reciprocity and stratification of study abroad" *Research in Comparative and International Education*, 19(4), pp.503-522, September 2024.

Jun-ichiro Yasuda, Michael M. Hull, Kentaro Kojima "Designing a computerized adaptive testing chain for the Force Concept Inventory" *2024 Physics Education Research Conference Proceedings*, pp.456-461, September 2024.

Michael M Hull, Jun-ichiro Yasuda, Naohiro Mae "A Methodology for Generating Subquestions for the Force Concept Inventory" *International Journal of Physics & Chemistry Education*, 16(2), pp.21-36, November 2024.

和嶋雄一郎・齋藤渉・山本亮・津久井浩太郎「IR 担当者は不安でいっぱい？ IR 担当者が感じる執行部との意識の違いの調査」『大学情報・機関調査研究集会 論文集』第 13 号、54-60 頁、2024 年 11 月。

Lilan Chen, Akari Kikuchi, Yuichiro Wajima, Tatsuo Kawashima "Disciplinary Variations in Graduate Student Experiences: A Study of Osaka University" *SERU Consortium Reports*, December 2024.

東岡達也・安田淳一郎「AI 社会を切り拓く大学カリキュラムの再構築と協働の可能性－パネルディスカッションの記録－」『名古屋高等教育研究』第 25 号、77-93 頁、2025 年 3 月。

◎客員

伏木田稚子「学習環境から捉えた大学院研究室の全体像－大学院生に対するオンライン調査を繙いて－」『名古屋高等教育研究』第 25 号、141-177 頁、2025 年 3 月。

崔承賢「気候災害時代の高等教育のあり方－韓国における新唯物論的教育研究の可能性－」『名古屋高等教育研究』第 25 号、179-201 頁、2025 年 3 月。

5.2 その他執筆

加藤真紀「日本の博士エコシステム（博士と共栄する社会）を考える」『かわらばん』第 86 号、2024 年 4 月。

安田淳一郎、大森不二雄編著「第 1 部第 3 章『アンケート調査から見えた学習成果の可視化の諸相』」『大学における教学マネジメント 2.0：やらされ仕事から脱し、学びの充実のための営みへ』東信堂、2024 年 4 月。

齋藤芳子「研究公正教育に学生はなにを思うのか－名古屋大学における経験から－」『高等教育研究叢書［高等教育学の専門分野が推進すべき研究公正の取り組みの探索－第 51 回（2023 年度）研究員集会の記録］ 第 175 号』広島大学高等教育研究開発センター、2024 年 5 月。

安田淳一郎「組織変革を駆動するモデル」『かわらばん』第 87 号、2024 年 7 月。

齋藤芳子「GPA は学びの指標たりえているか？」『かわらばん』第 88 号、2024 年 10 月。

安部有紀子「コロナ禍を経て注目される『大学のコミュニティ』」『かわらばん』第 89 号、2025 年 1 月。

加藤真紀「趣旨 未来/AI 社会のキャリアに向けた大学教育のカリキュラム」『名古屋高等教育研究』2025 年 3 月。

齋藤芳子「≪書評≫黒田昌裕著『科学技術と日本の経済成長：知的資本投資の効果測定』（慶應義塾大学出版会、2024 年）」『大学論集第 58 集』広島大学高等教育研究開発センター、2025 年 3 月。

5.3 講演発表

安部有紀子・蝶慎一「米国州立大学の学寮プログラムにおける統合とアセスメント－LLC（Living Learning Community）における継続的な事例分析に基づいて」日本高等教育学会第 27 回大会、鎌倉女子大学、2024 年 5 月 25 日。

Akiyoshi Yonezawa, Kinjal Vijay Ahir, Maki Kato "Student mobility and university partnership between East Asia and South Asia Japan-India university partnerships as a case study" 10th HERA Conference Higher Education Research Association, University of Hong Kong, June 6, 2025.

安部有紀子・日暮トモ子「コロナ禍・ポストコロナ禍における学寮プログラムの挑戦からの示唆－国際比較の視点から－」大学教育学会第 46 回大会、関西国際大学、2024 年 6 月 8 日。

安部有紀子「統合的な学びのための学生支援プログラムの開発について－メリーランド大学の事例をもとに－」大学教育学会第 46 回大会、関西国際大学、2024 年 6 月 9 日。

竹永啓悟「大学院の学際教育プログラムの学修成果に関する事例研究：社会科学系博士課程学生の語りを手がかりに」大学教育学会第 46 回大会、関西国際大学、2024 年 6 月 9 日。

Jun-ichiro Yasuda, Michael M. Hull, Naohiro Mae, Kentaro Kojima "Designing a computerized adaptive testing chain for the Force Concept Inventory" 2024 AAPT Summer Meeting/Physics Education Research Conference 2024、Westin Boston Waterfront Seaport District, June 10, 2024.

Masaki Nakamura, Hideki Ichida, Yuichiro Wajima, Jin Higashijima "Developing an Effective Tool for Assessing Research Integrity in Japanese Research Institutions"
8th World Conference on Research Integrity, July 4, 2024. 【ポスター発表】

安田淳一郎・Michael HULL・植松晴子・中村琢・前直弘・小島健太郎「力学概念指標を用いた連鎖的コンピュータ適応型テストの妥当性評価に向けた予備調査」日本物理教育学会年会　第 40 回研究大会、工学院大学新宿キャンパス、2024 年 8 月 10 日。

Jun-ichiro Yasuda, Michael M. Hull, Naohiro Mae, Kentaro Kojima "A feasibility study to develop chain computerized adaptive testing for the Force Concept Inventory" 4th World Conference on Physics Education 2024, Jagiellonian University, August 27, 2024.

安田淳一郎・Michael HULL・植松晴子・中村琢・前直弘・小島健太郎「力学概念指標を用いた連鎖的コンピュータ適応型テストの妥当性評価に向けた予備調査」日本科学教育学会 第48回年会、函館工業高等専門学校、2024年9月15日。

安田淳一郎・Michael HULL・植松晴子・中村琢・前直弘・小島健太郎「連鎖的FCI-CATの妥当性評価：マイクロジェネティック法に基づく質的調査の試行」日本物理学会第79回年次大会、北海道大学札幌キャンパス、2024年9月18日。

和嶋雄一郎「名大グッズに赤ちゃん用よだれかけが欲しくないですか？」Idea Stoa LUNCH Vol.15、名古屋大学、2024年9月18日。

和嶋雄一郎・齋藤渉・山本亮・津久井浩太郎「IR担当者は不安でいっぱい？ IR担当者が感じる執行部との意識の違いの調査」第13回MJIR研究集会、関西大学、2024年11月8日。

Akiyoshi Yonezawa, Kinjal Vijay Ahir, Maki Kato "Knowledge Diplomacy and Internationalization of Higher Education between Japan and India" Sixth Stakeholders' Meeting on Internationalization of Higher Education, Avani Sukhumvit Bangkok Hotel, December 3, 2024.

加藤真紀「アカデミックキャリアへの留学効果を考える」海外博士講演会 2025～海外博士号取得者からのメッセージ～、名古屋大学、2025年3月18日。

齋藤芳子・熊坂真由子・三枝麻由美「大学教員のためのメンタープログラム－名古屋大学における取り組み事例の現状と課題－」大学教育改革フォーラムin東海2025［ポスター発表］、名古屋大学、2025年3月8日。

三浦裕一・齋藤芳子・安田淳一郎・中村泰之・古澤彰浩・千代勝実・伊東正人・小西哲郎・大薮進喜「熱機関の熱効率を示す教材実験の開発ースターリングエンジンと水飲鳥の効率測定」日本物理学会2025年春季大会、オンライン、2025年3月18日。

Maki Kato "Push Factors for Mobility of Asian Female Foreign Faculties in the United States" 69th Annual Meeting of the Comparative and International Education Society (CIES 2025), Palmer House a Hilton Hotel, March 22-26, 2025.

5.4 国際交流

◎機関訪問

[安部有紀子]

2025 年 3 月 19 日～22 日

ソウル大学、延世大学、ソウル市立大学（韓国）

[松本みゆき]

2024 年 7 月 10 日

Kinjal 先生と表敬訪問

名古屋市立栄小学校（日本）

2025 年 2 月 16 日

Faizur Rhaman Ideal Institute（バングラディシュ）

◎参加国際会議

[安田淳一郎]

2024 年 7 月 6 日～11 日

2024 AAPT Summer Meeting/Physics Education Research Conference 2024（アメリカ）

2024 年 8 月 26 日～30 日

4th World Conference on Physics Education 2024（ポーランド）

[齋藤芳子]

2024 年 6 月 2 日～4 日

WCRI2024 (8th World Conference on Research Integrity)（ハイブリッド開催：ギリシャ）

◎セミナー開催

[加藤真紀]

2025 年 1 月 15 日

Knowledge Diplomacy and Soft Power: The role of international, higher education and research in international relations.（日本）

6. 研究プロジェクト

◎センター教員が研究代表者であるもの

種別		研究代表者	研究課題名
科研費	基盤研究（B）	加藤真紀	国際的な大学進学：構造、選択プロセス、認識変容
科研費	基盤研究（C）	安部有紀子	学生の学習を促進する質保証を基盤とした学生支援プログラムの開発
科研費	挑戦的研究(萌芽)	安田淳一郎	デジタル画像実験を用いた物理学実験で習得する思考力の評価法の開発
科研費	基盤研究（B）	安田淳一郎	個々人の力学概念理解度の進展を捉える連鎖的コンピュータ適応型テストの開発
科研費	国際共同研究加速基金(国際共同研究強化(B))	松本みゆき	バングラデシュの日本型教育学術基盤の構築：持続可能なインクルーシブ教育と衛生教育
科研費	基盤研究（C）	松本みゆき	大学教員の包摂的教育実践における高等教育の質保証のための課題検討とモデル構築
科研費	研究活動スタート支援	竹永啓悟	大学院の学際的教育プログラムの質保証－人文・社会科学系の学生の観点から－
科研費	若手研究	竹永啓悟	学際教育プログラムにおける博士論文の形成過

◎センター教員が研究分担者として参画したもの

教員名	種別	研究課題名	研究代表者名（所属）
安部有紀子	科研費 基盤研究（C）	大学教員の包摂的教育実践における高等教育の質保証のための課題検討とモデル構築	松本みゆき （名古屋大学特任准教授）
安田淳一郎	科研費 基盤研究（B）	遠隔授業に対応したアクティブラーニング型物理学実験テーマの教育効果測定指標の開発	千代勝実 （山形大学教授）
安田淳一郎	科研費 挑戦的研究(開拓)	高度デジタル技術を用いた新たな理数系評価問題の開発：科学的思考力の育成に向けて	安野史子 （国立教育政策研究所統括研究官）
安田淳一郎	科研費 基盤研究（B）	大規模大学における教育 DX 推進によるパフォーマンス・ガバナンスに関する国際比較研究	杉本和弘 （東北大学教授）

和嶋雄一郎	科研費 基盤研究（C）	国際 IR 開発と大学における国際活動の再定義	望月麻友美 （大阪大学准教授）
齋藤芳子	科研費 挑戦的研究(萌芽)	「社会変革型」科学技術イノベーション政策時代の大学院教育	両角亜希子 （東京大学教授）
齋藤芳子	科研費 基盤研究（B）	遠隔授業に対応したアクティブラーニング型物理学実験テーマの教育効果測定指標の開発	千代勝実 （山形大学教授）
齋藤芳子	科研費 基盤研究（B）	学問の自由保障に関する国際比較：規範意識・社会規範・法規範の関係構造の探究	羽田貴史 （広島大学名誉教授）

◎その他

教員名	種別	研究課題名	研究代表者名 （所属）
加藤真紀	学術コンサルティング	「博士エコシステム」の提言に向けた指導	加藤真紀 （名古屋大学教授）
和嶋雄一郎	寄附金	研究助成	和嶋雄一郎 （名古屋大学特任准教授）
和嶋雄一郎	共同研究	Data Brainstorming：データ可視化ツールを活用したアイデア生成手法の構築	和嶋雄一郎 （名古屋大学特任准教授）
松本みゆき	受託事業	アジアにおける産学官連携の包摂的「持続可能な教育ネットワーク」構築のための国際ワークショップ事業	松本みゆき （名古屋大学特任准教授）

Appendix　拠点外令和 6 年度活動実績

A.1 教育

A.1.1 正課

[兼担]

教育発達科学研究科高等教育学講座	加藤真紀
教育発達科学研究科高等教育学講座	安部有紀子
教育発達科学研究科高等教育学講座	安田淳一郎

[授業担当]

〇全学教育科目

基礎セミナー	安部有紀子
同上	安田淳一郎
高等教育学	加藤真紀
同上	安部有紀子
同上	安田淳一郎
同上	齋藤芳子
物理学実験	安田淳一郎
名古屋大学の歴史：2 単位 15 回のうちの 1 回を担当	齋藤芳子

〇大学院教育発達科学研究科

高等教育学研究 I 〔大学教員論〕	加藤真紀
同上	安部有紀子
同上	安田淳一郎
同上	齋藤芳子
高等教育学研究 I 高等教育経営論－高等教育と国際社会－	加藤真紀
高等教育学研究 II 高等教育経営論－高等教育と国際移動－	加藤真紀
高等教育学研究 I 高等教育経営論－学生支援研究－	安部有紀子
高等教育学研究 I 高等教育経営論－高等教育の方法論	安部有紀子
高等教育学研究 II 高等教育経営論－大学教育マネジメント研究－	安部有紀子

○大学院生命農学研究科

研究リテラシー：1 単位 8 回のうちの 1 回を担当　齋藤芳子

Research Literacy：1 単位 8 回のうちの 1 回を担当（英語）　齋藤芳子

○大学院情報学研究科

情報学特論（プロフェッショナル・リテラシー）：1 単位 8 回のうちの 1 回を担当

和嶋雄一郎

同上　齋藤芳子

○教養教育院大学院共通科目

大学教員論（教育発達科学研究科「高等教育学研究 I」を提供）　加藤真紀

同上　安部有紀子

同上　安田淳一郎

同上　齋藤芳子

大学授業の設計と実践　安部有紀子

大学授業の開発と改善　安部有紀子

同上　加藤真紀

同上　安田淳一郎

同上　齋藤芳子

プロフェッショナル・リテラシー：1 単位 8 回のうちの 1 回を担当　和嶋雄一郎

プロフェッショナル・リテラシー：1 単位 8 回のうちの 1 回を担当　齋藤芳子

Professional Literacy：1 単位 8 回のうちの 1 回を担当（英語）　齋藤芳子

A.1.2 名古屋大学学生論文コンテストの企画運営

本学の学部 1 ～3 年次生の学習研究意欲を喚起し、アカデミックライティングを経験してもらう場として、学生論文コンテストを毎年開催しています。初年次教育である基礎セミナーと連携するなど、教員のアカデミックライティング指導への支援を含んでいます。このような取り組みの現状や効果を他大学と共有できるよう、情報を公開しています。

・応募要項

論文内容：応募論文においてとりあげるテーマ／問いを明確に記述したうえで、文献等を活用して論じてください。内容領域は問いませんが、当該領域を専門としない人にも理解できるよう記述してください。

応募期間：2025 年 1 月 9 日（木）正午まで

応募資格：名古屋大学に在学する学部 1～3 年生

応募規定：

・応募論文は、単著、未発表かつ日本語で書いたものに限ります。

・審査対象論文は 1 人 1 編のみとします。

・次項「応募方法」に掲載されている書式に従って作成し提出してください。

応募方法：

1. 書式に従って論文を作成してください。
2. 論文本編ファイルを PDF に変換したうえで、ファイル名を応募者氏名にし、応募フォームから期日内に提出してください。

審査：本学教員による

表彰：数名にセンター及び協賛機関からの賞状と副賞を授与

結果発表：

・2025 年 2 月

・発表に際し、入賞者の所属学科および氏名を公表いたします。

・入賞作品は名古屋大学学術機関リポジトリに掲載いたします。

その他：

・「名古屋大学論文コンテスト」説明会

　日時：2024 年 10 月 15 日（火）12:10-13:00

　場所：中央図書館 2 会　ディスカバリスクエア B

内容：高等教育研究センターの教員によるコンテストの紹介、過去の受賞者の論文紹介、論文執筆相談など

・「論文の書き方セミナー」

日時：2024 年 10 月 30 日（水）13:00-14:30

「論文の大枠を定めよう～構成と『問い』の立て方を学ぶ」

2024 年 11 月 6 日（水）13:00-14:30

「論文を執筆しよう～学術的な文章の書き方のコツ」

場所：中央図書館 2 会　ディスカバリスクエア A

内容：高等教育研究センターの教員による論文を書き始めるにあたって知っておきたいことがらを、初歩から学ぶ講座

・中央図書館 2 階サポートデスクでは、大学院生スタッフからレポートの書き方の相談を受けられます。

主催：名古屋大学高等教育研究センター、教養教育院

共催：名古屋大学附属図書館

協賛：名古屋大学消費生活協同組合

・ウェブサイト

https://web.cshe.nagoya-u.ac.jp/support/student/contest/

・実施スケジュール

2024 年 10 月　3 日	チラシ、TACT による広報開始
2025 年　1 月　9 日	応募締切（3 件）
2024 年　1 月 19 日	高等教育研究センター教員による予備審査
2025 年　2 月　3 日	本審査（審査員：藤巻朗理事、納谷信教養教育院長、佐久間淳一附属図書館長、北栄輔高等教育研究センター長）
2024 年　3 月 18 日	表彰式

・選考結果

入選【佳作】

大学生のアルバイトの職種と動機・継続要因の関連　　法学部 1 年 助田麻由里

【奨励賞】

大規模言語モデルを用いた青春の定量的な定義法の考案　　情報学部 3 年 樹神宇徳

・表彰式写真

A.2 学内研修の企画運営

A.2.1 東海国立大学機構新任教員研修プログラム

東海国立大学機構の教員としての各種職務の遂行に必要な基本情報を得たり、授業で困ったときや改善したいときに参考になる情報を提供する目的で行っています。

日　　時：2024 年 4 月 8 日（月）13:00～17:15
実施方法：対面／オンライン
対面会場：名古屋大学東山キャンパス野依記念学術交流館
対 象 者：2023 年 4 月 2 日～2024 年 4 月 1 日迄に岐阜大学、名古屋大学に着任した教員
（週 38 時間 45 分勤務する研究員を含む）
運　　営：東海国立大学機構構教育基盤統括本部（アカデミック・セントラル）／
総務部人事労務課／教育戦略部教育戦略課
岐阜大学 教育推進学生支援機構／学務部教務課
名古屋大学高等教育研究センター
目　　標：1_機構・大学教員としての各種職務の遂行に必要な基本情報を得る
2_授業で困ったときや改善したいときに参考となる情報を得る
3_教員間のネットワークをつくる

プログラム：
東海国立大学機構新任教員研修
13:00　開会
13:05　歓迎の挨拶・講演
松尾 清一（機構長）
13:20　歓迎の挨拶・講演
杉山 直（機構長補佐）
藤巻 朗（機構長補佐／教育基盤統括本部 本部長）
13:45　ワークショップ
白村 直也（岐阜大学 准教授）
加藤 真紀（名古屋大学 教授）
安田 淳一郎（名古屋大学 准教授）

名古屋大学新任教員研修

15:10　交流ティータイム

教育研究支援サービス等ポスター展示

16:00　歓迎の挨拶・講演

杉山 直（名古屋大学 総長）

16:30　名大教員生活スタートアップ

「名古屋大学の教養教育」

納谷 信（教養教育院 院長）

「名古屋大学学生支援本部」

鈴木 健一（学生支援本部 教授）

「名古屋大学における研究支援」

福島 和彦（学術研究・産学連携推進本部 副本部長）

「東海国立大学機構の安全保障輸出管理－研究インテグリティ確保に向けて－」

宮林 毅（学術研究・産学連携推進本部 特任教授）

「人事・労務上の制度」

東 高之（総務部長）

「授業改善支援」

安部 有紀子（高等教育研究センター 准教授）

17:15　閉会

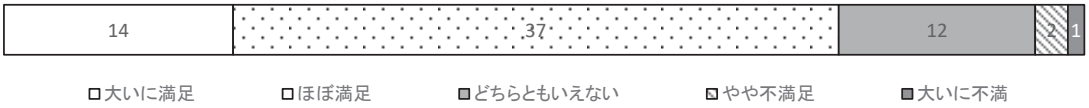
▷アンケート結果

参加者：173 人［岐阜大学：対面 29 名・オンライン 12 名

名古屋大学：対面 86 名・オンライン 46 名］

アンケート回答者：66 人（岐阜大学 15 名・名古屋大学 51 名）

Q1. 本日の新任教員研修は満足のいくものでしたか。（単位：人）



Q2. 自由記述

【ワークショップ】

・新しい視点・刺激が得られて勉強になりました。

・新任教員の交流時間に共同プロジェクトを考えるのは、コミュニケーションのきっかけとして非常によかったと思います。
・新任教員のワークショップは面白い取り組みかと思います。企業の新任社員と同じと考えれば、普通の取り組みかもしれませんが、教員かつ年齢も経歴（経験）も異なるメンバーでの共同作業は、色々な気付きもあって楽しめました。

【シラバスの書き方講座】

・名古屋大学と共同で開催していただけたのでより東海国立大学機構のメリットを感じました。授業に関する学内システムについては、丁寧な講義で活用のイメージができました。授業に関することだけでなく、勤務管理、出張、研究費に関することなど、学内施設に関すること、たとえば図書館の利用なども教えていただけるとよかったです。

【全体を通して】

・ワークショップで他分野の先生方と話ができたことや、ティータイムを設けていただいたことは、ネットワークを広げるという点で大変有効だったと思います。
・新任教員として知っておくべき内容が網羅されていて、研修を受けたことで安心して教員生活が始められます。

A.2.2 大学教員準備講座

名古屋大学高等教育研究センターでは、2010 年度より大学教員を目指す大学院生を対象にした 2 単位 1 科目の授業を開講してきました。2023 年度からは、講座の内容を拡充し、体系的に構成した 3 科目 4 単位の認定プログラムとしてスタートしました。各科目を修了するごとに修了証が授与され、3 つの科目すべてを修了すると「大学教員準備講座修了証」が授与されます。

https://web.cshe.nagoya-u.ac.jp/support/student/program/

◎大学授業の設計と実践

大学の授業を担当するために必要な授業デザインと教育技法についての知識・スキルを身につけていくための集中コースです。学生の学びを促すための授業デザイン、授業シラバスの作成、多様な活動を伴う教授法、授業見学、模擬授業等の実践的な学習を通じて、授業実践への十分な準備を行います。

日　　時：【春学期】2024 年 5 月 22 日（水）、5 月 29 日（水）、6 月 12 日（水）、6 月 19 日（水）、6 月 26 日（水）、7 月 17 日（水）、7 月 24 日（水）

【秋学期】2024 年 10 月 26 日（土）、11 月 9 日（土）、12 月 5 日（木）
対 象 者：名古屋大学、岐阜大学の大学院学生、ポスドク、非常勤講師、教員歴が浅い教員
開催場所：名古屋大学東山キャンパス文系総合館 5 階アクティブラーニングスタジオ
担　　当：安部有紀子

プログラム：
【春学期】
5 月 22 日（水）：授業デザインとは何か？
5 月 29 日（水）：シラバス作成の理論（授業目標・授業計画・評価）と実践
6 月 12 日（水）：学習の科学と多様な教授法
6 月 19 日（水）：アクティブラーニングの技法・授業デザインシートの作成
6 月 26 日（水）：パフォーマンス評価実践（ルーブリック作成）
7 月 17 日（水）：模擬授業
7 月 24 日（水）：全体ふりかえり（合理的配慮について）
履修者：10 名
聴講者：6 名
【秋学期】
10 月 26 日（土）：授業デザインとは何か？
シラバス作成の理論（授業目標・授業計画・評価）と実践
学習の科学と多様な教授法
11 月　9 日（土）：アクティブラーニングの技法・授業デザインシートの作成
パフォーマンス評価実践（ルーブリック作成）
合理的配慮について
12 月　5 日（木）：模擬授業・全体ふりかえり
履修者：7 名
聴講者：9 名

◎大学教員論
大学教員になるために必要な知識と技能の獲得をめざして、多面的に大学教員の職務を検討していく集中プログラムです。受講生の今後のキャリア設計・開発に資するよう、実践的に進めています。
日　　時：TACT によるオンデマンド受講期間（7 時限分）

2024 年 7 月 17 日（水）13:00～

対面授業（対面・オンラインライブを併用しますが、対面を推奨します。）

2024 年 7 月 31 日（水）、8 月 1 日（木）、2 日（金）

対 象 者：名古屋大学、岐阜大学の大学院学生・ポスドク・非常勤講師等

担　　当：加藤真紀・安部有紀子・安田淳一郎・齋藤芳子

テキスト：夏目達也・近田政博・中井俊樹・齋藤芳子（2010）『大学教員準備講座』玉川大学出版部

プログラム：

7 月 31 日（水）8:45～16:15

1 限：「大学・大学教員」を学ぶ

2 限：大学教員という職業

3 限：授業の実施と大学教育の質保証

4 限：研究指導と研究マネジメント

5 限：社会サービスの実施

8 月 1 日（木）8:45～16:15

1 限：多様な高等教育機関と若手教員

2 限：大学教育におけるチームワークと学生参加

3 限：大学教育・研究の国際化

4 限：ICT ツールと学習データの活用

5 限：模擬授業のオリエンテーション

8 月 2 日（金）

1 限：模擬授業

2 限：模擬授業

3 限：模擬授業

4 限：模擬授業

5 限：ライフコース

履修者：23 名

◎大学授業の開発と改善

この授業では、大学教員としてのキャリアを希望する大学院生が、将来的に大学で担当する授業を自ら継続的に改善するための知識やスキルを身につけます。授業改善に資するテーマを選び、計画を立て、研究的なアプローチにより改善を試みます。教員や受講生とのディスカションやフィードバックを通じて学んでいきます。

日　　時：2024 年 10 月 10 日（木）、12 月 10 日（火）、2025 年 1 月 17 日（金）、21 日（火）
対 象 者：名古屋大学、岐阜大学の大学院学生・ポスドク・非常勤講師等・教員
開催場所：名古屋大学東山キャンパス文系総合館 5 階アクティブラーニングスタジオ
担　　当：安部有紀子・加藤真紀・安田淳一郎・齋藤芳子
プログラム：
10 月 10 日（木）：授業ガイダンス
12 月 10 日（火）：中間報告・フィードバック
1 月 17 日（金）：最終報告会・全体のふりかえり
1 月 21 日（火）：最終報告会・全体のふりかえり
履修者：12 名
聴講者：5 名

A.2.3 名古屋大学教員のためのメンタリングプログラム

赴任間もない新任教員にとって、大学における活動に不安はつきものです。教員メンタープログラムは、大学において一定の職務経験をもつ教員と交流することで、新任教員が大学教員として成長していくことを支援するプログラムです。ジェンダーダイバーシティセンターと協力してプログラムを運営しています。

・主な活動内容・成果

1）新任教員研修において教員メンタープログラムを広報し、希望者にメンター教員を紹介
2）パンフレットおよびホームページを通して広報し、希望者にメンター教員を紹介
3）ジェンダーダイバーシティセンターメンターワーキンググループにメンバーとして参画し、希望者とメンターのマッチングを実施

・ウェブサイト

https://web.cshe.nagoya-u.ac.jp/support/teacher/portal/mentor/

A.2.4 名古屋大学教員のための教育研修プログラム

社会に有為な学生を育てること、そのために質の高い教育を行うことは、どの研究科・学部においても重要であり、関心が高まっています。

高等教育研究センターでは、順次新たな研修プログラムを開発し、学内のみなさまのご要望にお応えできるよう努めています。各部局の教育力を高めるために、ぜひこのプログラムをご活用ください。

・この研修プログラムのねらい

各学部・研究科の教育力を高めることをめざします。

・授業改善に必要な基礎的な知識やノウハウを提供します

・各学部・研究科による組織的な授業改善の指針を提供します

・教育・授業についてのコミュニティをつくる支援をします

・研修プログラム

各研修は 90 分を目安としていますが、ご要望に応じて内容を一部変更しての時間調整が可能です。

プログラム一覧：

・現代の大学生

・シラバス設計法

・大学教授法の基礎

・メディアを活用した教授法

・多人数授業の教授法

・成績評価の方法

・大学教員という職業

・英語で教える方法

・メンタリングプログラムの進め方

・コーチングの技法

・教育改善のためのデータ活用

研修のすすめ方：

1. 研修を希望される日の 1 ヶ月前までを目安に、高等教育研究センターまで随時ご連絡ください。その際、部局名、希望される研修プログラム、ご希望の日時、その他のご要望・ご事情についてお知らせください。

2. お申し込みがあってから 2〜3 日の内にお返事を差し上げます。なお、ご希望の日時に添えないときには、ご寛恕下さい。
3. 実施決定後、日時・内容・方法について貴部局担当者とセンター担当者による事前打ち合わせを行います。研修の対象者、ニーズなどをお聞かせ下さい。
4. このプログラムでは次のようなサービスをご提供いたします。
5. 相談（部局のご要望をお伺いします）
6. 企画（ご要望に沿って、研修当日の内容を組み立てます）
7. 実施（研修当日の進行役を務めます）
8. 教材（研修教材をご提供します）
9. 研修の評価と今後の課題の整理（研修後に各学部・研究科のご担当者と高等教育研究センターの担当者で話し合います）
10. プログラム改善のため、研修参加者にアンケートをお願いしております。どうぞご協力ください。

・ウェブサイト
https://web.cshe.nagoya-u.ac.jp/support/teacher/

A.2.5 個別の授業改善支援（名古屋大学教職員対象）

・授業の悩みの相談にのります

「シラバスがうまく作れない」「学生が授業にのってこない」「学生の私語が多くて授業にならない」など、授業について悩みを抱えていらっしゃる先生方は少なくないと思います。どの教員も多かれ少なかれ悩みを抱えながら、授業をしているのが実情でしょう。

そのような場合には、一人で悩まずに、高等教育研究センターにご相談ください。授業改善の取り組みは一人でもできますが、できるだけ多くの方々、とくに同じような悩みを抱えた方々と積極的な議論や共同の取り組みを行うとより効果的にできます。多くの方との議論によって多くのヒントを得ることができますし、授業改善の意欲も高まります。

授業でお悩みの場合には、まずは気軽に高等教育研究センターにご相談ください。

・授業を見学させてください。授業を一緒に見学しませんか。

高等教育研究センターでは、すぐれた授業とは何か、それを成立させるための条件とは何かについて研究しています。この研究のために、また『成長するティップス先生』の内容を

改訂するために、すぐれた授業を行っている学内外の先生方から積極的に学ぶために、授業を見学させていただきたいと考えています。すでに一部の先生方からご協力をいただいています。

また、高等教育研究センタースタッフと一緒に授業見学を希望する方を募集しています。日々の授業を改善するための手っ取り早い方法は、他の教員の授業、それもすぐれた授業を見学することです。名古屋大学にはそのような授業がたくさんあるはずです。それをご一緒に発掘し、学んでみませんか。

授業見学でご協力いただける方、また、ご一緒に見学をしてみようとお考えの方は、高等教育研究センターまでご連絡ください。

・ウェブサイト

https://web.cshe.nagoya-u.ac.jp/support/teacher/portal/consultation/

A.3 学内貢献

A.3.1 学内委員・室員等の委嘱

東海国立大学機構アカデミック・セントラル インストラクショナル・デザインチーム		
	メンバー	加藤真紀
	メンバー	安部有紀子
	メンバー	安田淳一郎
	メンバー	齋藤芳子
東海国立大学機構アカデミック・セントラル QTA・GSI トレーニングセンター		
	センター長	加藤真紀
	メンバー	安部有紀子
	メンバー	安田淳一郎
	メンバー	齋藤芳子
	メンバー	竹永啓悟
東海国立大学機構アカデミック・セントラル運営委員会	委員	加藤真紀
教育基盤連携本部会議	委員	加藤真紀
	オブザーバー	安田淳一郎
全学教育企画委員会	委員	加藤真紀
文系総合館管理運営委員会	委員	加藤真紀
国際教育運営委員会	委員	加藤真紀
国際戦略室	オブザーバー	加藤真紀
名古屋高等教育研究	編集長	加藤真紀
OCW プロジェクトミーティング	委員	安部有紀子
国際共修検討ワーキンググループ	委員	安部有紀子
	委員	齋藤芳子
教養教育院、教育の質保証専門委員会	専門委員	安田淳一郎
IR 戦略室	室員	安田淳一郎
	室員	和嶋雄一郎
名古屋大学医学部カリキュラム評価（IR）委員会	委員	安田淳一郎
学生生活状況調査 WG	委員	安田淳一郎
情報セキュリティ連絡協議会	メンバー	安田淳一郎

情報セキュリティ連絡協議会（～10 月まで）	メンバー	齋藤芳子
学務情報システム WG（2024 年度）	メンバー	和嶋雄一郎
機構 LMS：TACT 運用 WG（2023～2024 年度）	メンバー	和嶋雄一郎
教員メンターWG	メンバー	齋藤芳子
教養教育院基礎セミナー検討会	メンバー	齋藤芳子
博士課程教育推進機構	協力教員	齋藤芳子
博士課程教育推進機構統括会議	オブザーバー	齋藤芳子

A.3.2 学内活動への協力

教学 IR 企画・分析支援（教育基盤連携本部）	安田淳一郎
同上	松本みゆき
同上	和嶋雄一郎
基礎セミナーオンデマンド教材提供（教養教育院）	齋藤芳子
基礎セミナー担当 QTA 関連（教養教育院）	齋藤芳子
教養教育院 e-portfolio の開発（教養教育院）	齋藤芳子

A.4 社会貢献

A.4.1 学会等における活動

[加藤真紀]

・International Medical Education Editorial Board Member（2022 年 4 月～）

[安田淳一郎]

・日本物理教育学会編集幹事（2020 年 7 月～）

・名古屋大学消費生活協同組合理事（2024 年 4 月～）

[和嶋雄一郎]

・日本認知科学会プログラム委員（2023 年 10 月～2024 年 10 月）

[齋藤芳子]

・研究・イノベーション学会評議員（2002 年 10 月～[中断期間あり]）

・大学教育学会編集委員会委員（2023 年 8 月～）

A.4.2 社会における活動

[加藤真紀]

・四日市市大学構想策定委員会委員（2023 年 5 月～）

・大学教育イノベーション日本副代表（2023 年 10 月～）

[安部有紀子]

・日本学生支援機構学生支援の取組状況に関する調査委員会委員（2009 年 4 月～）

・文部科学省先導的改革推進委託事業審査委員会委員（2016 年 7 月～）

A.5 組織運営

A.5.1 高等教育研究センター運営委員会委員名簿

委員長	北 栄輔	高等教育研究センター センター長
委員	宇田川 幸則	法学研究科 教授
委員	丸山 和昭	教育発達科学研究科 准教授
委員	久本 直毅	理学研究科 教授
委員	中島 宏彰	医学系研究科 准教授
委員	尾崎 文宣	環境学研究科 准教授
委員	納谷 信	教養教育院 院長
委員	加藤 真紀	高等教育研究センター 教授
委員	安部 有紀子	高等教育研究センター 准教授
委員	安田 淳一郎	高等教育研究センター 准教授
委員	松本 みゆき	高等教育研究センター 特任准教授
委員	和嶋 雄一郎	高等教育研究センター 特任准教授

A.5.2 高等教育研究センター運営委員会開催状況

2024 年 8 月 2 日（金）～ 8 月 8 日（木）	第 1 回運営委員会（メール会議）
2024 年 12 月 20 日（金）～12 月 25 日（水）	第 2 回運営委員会（メール会議）

A.5.3 高等教育研究センター会議開催状況

高等教育研究センター会議および高等教育システム開発部門ミーティングとして月 1 回の会合を開催している。本年度の開催状況は以下のとおり。

第 1 回	2024 年 4 月 12 日（金）	WEB 会議
第 2 回	2024 年 5 月 17 日（金）	WEB 会議
第 3 回	2024 年 6 月 21 日（金）	WEB 会議
第 4 回	2024 年 7 月 19 日（金）	WEB 会議
第 5 回	2024 年 9 月 13 日（金）	WEB 会議
第 6 回	2024 年 10 月 11 日（金）	WEB 会議

第 7 回	2024 年 11 月　7 日（木）	WEB 会議
第 8 回	2024 年 12 月 20 日（金）	WEB 会議
第 9 回	2025 年　1 月 17 日（金）	WEB 会議
第 10 回	2025 年　2 月 21 日（金）	WEB 会議
第 11 回	2025 年　3 月 11 日（金）	WEB 会議

A.6 令和 6 年度基盤的経費

■名古屋大学高等教育研究センター2024（令和 6）年度予算配分額

（単位：千円四捨五入）

授業料	学外研究開発助成金等	拠点事業経費	小計
14,220	27,176	7,802	〈48,992〉
（うち学内競争的資金） 50	（うち間接経費） 3,174		

注）学内競争的資金は「研究力強化事業ほか」を指す。

編集委員長　北 栄輔　センター長
編集委員　加藤 真紀　教授
編集幹事　安部 有紀子　准教授
編集委員　安田 淳一郎　准教授
同上　齋藤 芳子　助教
同上　松本 みゆき　特任准教授
同上　和嶋 雄一郎　特任准教授
同上　竹永 啓悟　特任助教
編集幹事補助　東岡 達也　研究員

編集補助　岡田 久樹子　事務員
同上　谷口 千佳　事務員

名古屋大学高等教育研究センター
質保証を担う中核教職員能力開発拠点

2024 年度総合報告書

2025 年 3 月 31 日

発行 名古屋大学高等教育研究センター
〒464-8601 名古屋市千種区不老町
電話　052-789-5696
FAX　052-789-5695
E-mail　info@cshe.nagoya-u.ac.jp
https://web.cshe.nagoya-u.ac.jp